

秋田県文化財調査報告書第327集

# 姥ヶ沢窯跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ —

2001・8

秋田県教育委員会

姥うばヶが沢さわ窯跡

— 農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ —

2001・8

秋田県教育委員会

## 序

秋田県ではこれまでに約4,500箇所の遺跡が発見されており、先人の尊い遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。「最良の予言者は過去である」という言葉がありますように、これらの埋蔵文化財は、歴史や伝統文化を理解し、未来を展望した豊かな郷土文化を創造していくうえで欠くことのできない大切なものです。

一方、農業分野においては、農業を取り巻く内外の厳しい情勢に対処するため、各種基盤整備が急務となっており、農道整備事業やほ場整備事業の推進等によって、本県の基幹産業である農業もさらなる効率化が求められていることは言うまでもありません。

このたび、横手市と田沢湖町を結ぶ農免農道整備事業が計画され、その路線が横手市金沢中野に所在する姥ヶ沢窯跡の一部を通過することになりました。このため、本教育委員会は関係機関と協議のうえ、工事に先だって発掘調査を実施することといたしました。

遺跡のある横手市金沢地区は、歴史上、後三年の役の古戦場として著名であり、古代の遺跡が数多く分布することでも知られています。今回の調査では、小規模の面積にもかかわらず土器焼成遺構や竪穴状遺構が比較的密に分布し、傾斜地を利用した生産遺跡であることがわかりました。これらの遺構や遺物は、この地域の歴史を解明するうえでたいへん貴重な資料です。

本報告書は、姥ヶ沢窯跡の発掘調査成果をまとめたものです。本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、郷土についての誇りと埋蔵文化財愛護の一助になることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御援助、御協力いただきました秋田県平鹿総合農林事務所、横手市教育委員会、仙南村教育委員会をはじめ関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成13年 8月

秋田県教育委員会

教育長 小 野 寺 清

## 例 言

1. 本報告書は、農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業（奥羽南部第2・2期地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、平成12年度に実施した横手市金沢中野所在の姥ヶ沢窯跡の調査成果を収めたものである。
3. 土層断面図の土色や土器の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。
4. 本報告書に使用した地形図および地勢図は、国土地理院発行50,000分の1地形図「六郷」「横手」、同25,000分の1地形図「金沢本町」「横手」および秋田県平鹿総合農林事務所提供の工事用図面である。
5. 自然科学的分析は以下の機関に委託した。  
テフラ分析……………パリノ・サーヴェイ株式会社  
放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定……………株式会社 パレオ・ラボ  
樹種同定……………株式会社 パレオ・ラボ
6. 姥ヶ沢窯跡の発掘調査における水準測量は風間測量設計株式会社に委託した。
7. 「第5章 自然科学的分析」には、パリノ・サーヴェイ株式会社および株式会社パレオ・ラボに業務委託した分析報告書の一部を収載した。
8. 草稿執筆および編集は吉川孝が担当した。

## 凡 例

1. 本報告書に収録した遺構実測図・グリッド配置図の方位は座標北を示す。座標北と磁北との偏角は、西に $7^{\circ}50'$ である。
2. 層序は、基本層位にローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……………）、各遺構の堆積土にアラビア数字（1・2・3……………）を用いた。
3. 各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。

遺構	SD—溝跡	SJ—土器焼成遺構	SK—土坑
	SKI—竪穴状遺構	SKP—柱穴様ピット・ロクロピット	
	SN—焼土遺構	SX—性格不明遺構	SQ—配石遺構
遺物	RP—土器・土製品	S—自然礫	C—炭化物
4. グリッド設定による4m四方の方眼区画を「区」と呼称した。区の名称は方眼区画南東の測量杭の名称を以てこれに当てた。
5. 遺構番号は01から始まるから始まる2桁以上の通し番号を検出順に付した。遺構精査・遺物整理の段階で欠番となったものがある。また、調査の結果、複数の遺構の重複であることが判明した場合、Aから始まる細別記号を付して区分した。

6. 本報告書に収録した遺構実測図の縮尺は1/40・1/20、遺物実測図の縮尺は1/3を主としているが、適宜異なる縮尺も使用した。いずれの場合も、挿図にはそれぞれスケールを付している。

7. 本報告書では、古代土器について以下のような基準によって分類および記述した。

①酸化焰焼成による軟質の赤褐色土器を、ロクロ使用の有無や黒色処理の有無を問わず「土師器」とした。ただし、遺物観察表（第8表～第11表）では、土師器のうち、内面に黒色処理が施されたものを「内黒」と略称して記載している。

②還元焰焼成で硬質の灰色の土器を「須恵器」とする。須恵器を作ることを意図したものの、還元焰の状態が保てず結果的に褐色ないし赤褐色を呈すると判断したのも、須恵器として扱った。

8. 「第4章 調査の記録」挿図および観察表における凡例は以下のとおりとする。

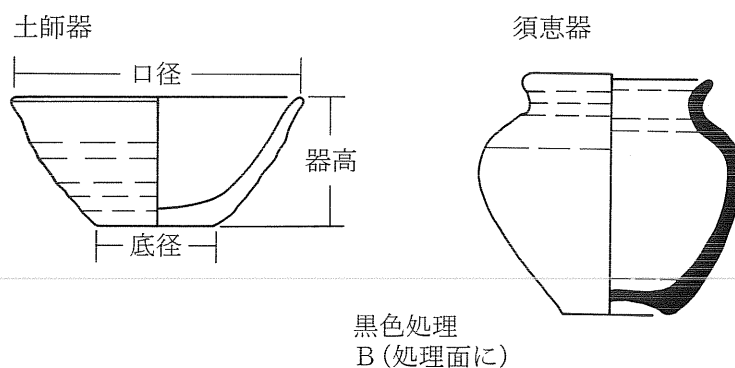
①柱穴様ピット観察表における確認面は「Ⅱ」がⅡ層上面、「Ⅴ」がⅤ層上面を表す。

②遺物観察表における「外底部/台部特徴」の技法において、「回糸」とあるのは回転糸切り技法による切り離しを意味し、( )内はロクロの回転方向を表す。

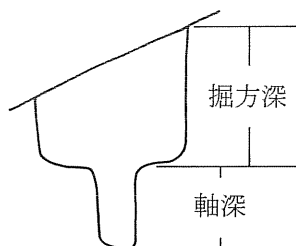
③挿図中の土師器・須恵器の区別、土師器の黒色処理、および遺物観察表における坏・皿類の計測基準と指数算定式は以下のとおりである。

・底径指数＝底径÷口径（口径を1としたときの底径の値）

・高径指数＝器高÷口径（口径を1としたときの器高の値）



9. 「第6章 まとめ」中の第15表「県内ロクロピット集成」における「掘方深」および「軸深」の値は、以下の図に示す箇所の深さを表すこととした。したがって、確認面から軸底までの深さは両者の値を加えたものとなる。



10. 挿図中のスクリーントーン、シンボルマークは下記の通りである。

焼土痕



# 目 次

序	i
例言・凡例	ii
目次	iv
第1章 はじめに	
第1節 発掘調査に至るまで	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の立地と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
第1節 遺跡の概観	9
第2節 発掘調査の方法	9
第3節 発掘調査の経過	11
第4章 調査の記録	
第1節 調査区の地形と層序	12
第2節 検出遺構と出土遺物	14
1. 検出遺構の概要	14
2. 古代の遺構	14
3. 時期不明の遺構	24
4. 小結	25
第3節 遺構外出土遺物	27
第5章 自然科学的分析	
第1節 出土炭化材の樹種同定	70
第2節 放射性炭素年代測定	73
第3節 出土試料のテフラ分析	75
第6章 まとめ	79
図版／報告書抄録	

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査に至るまで

農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業の計画地域は県下有数の穀倉地帯である仙北平野のほぼ東端に位置し、従来、関係市町村では複合農家を核に生産基盤の整備、未利用地開発による高原野菜等畑作物の作付拡大、飼料自給率の増大による農業経営の安定化を目指してきた。しかし、奥羽山脈の山麓を南北に走る基幹的農道がこれまで皆無だったことから、その規模は各地域ごとの零細産地の域にとどまっている。

この現状を踏まえ、本計画は、横手市大沢地内の国道107号より、仙北郡仙南村、六郷町、千畑町、太田町、角館町のそれぞれ東部を通過して国道46号仙北郡田沢湖町神代地内までの奥羽山麓沿いに農免農道を整備し、この地域における広域農業圏の形成と流通の合理化を図る目的で策定された。農道名称は「奥羽山麓大規模農道（瑞穂の里ロード）」で総延長は42,281mである。ただし、太田町内ほぼ全域と千畑町内の一部の区間は既存道路を利用するため、本計画における工事総延長は32,189mとなる。

このうち、奥羽南部第2地区の計画路線内には上台A遺跡が、隣接する奥羽南部第2・2期地区には姥ヶ沢窯跡が存在することが判明した。そこで、秋田県教育委員会は原因者である秋田県農政部と協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することにした。

上台A遺跡については、平成11年度に秋田県教育委員会が発掘調査を行った。

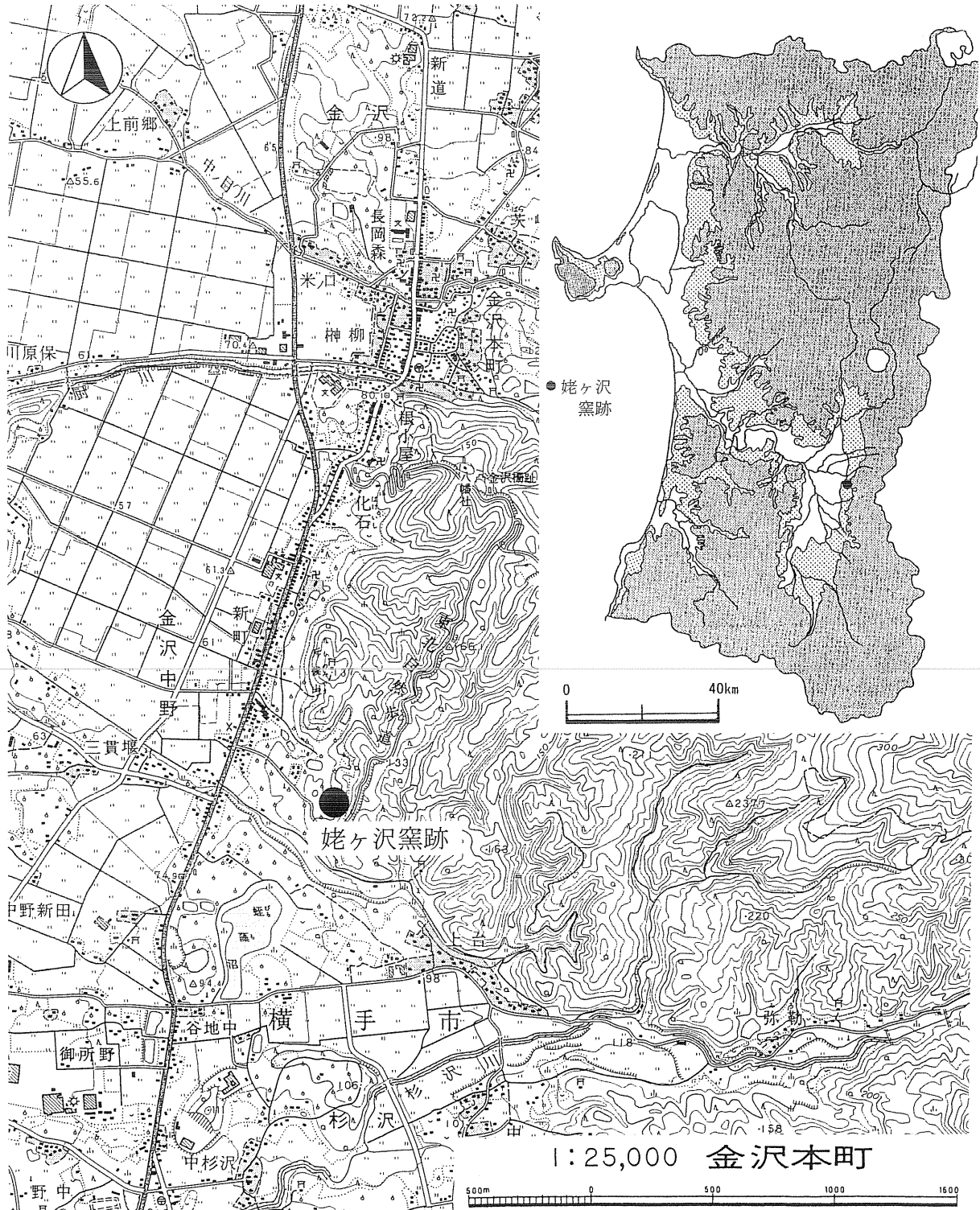
姥ヶ沢窯跡については、平成10年6月に横手市教育委員会が範囲確認調査を実施し、その後の調整を経て、工事に係る1,050㎡について、平成12年9月より発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査要項

遺跡名	姥ヶ沢窯跡（略号；8UGSK）
所在地	秋田県横手市金沢中野字姥ヶ沢6-75外
調査期間	平成12年9月5日～10月20日
調査面積	1,050㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	吉川 孝（秋田県埋蔵文化財センター調査課第3科学芸主事） 倉田 伸治（秋田県埋蔵文化財センター調査課第3科非常勤職員）
総務担当者	佐藤 悟（秋田県埋蔵文化財センター総務課長） 佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事） 八文字 隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

第1章 はじめに

調査協力機関 秋田県平鹿総合農林事務所  
横手市教育委員会  
仙南村教育委員会



第1図 遺跡位置図



## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地と地理的環境

遺跡の所在する横手市は秋田県南部の横手盆地ほぼ中央東寄りに位置する。北を仙北郡仙南村および同六郷町、東を平鹿郡山内村、南を平鹿郡平鹿町、西を大曲市および平鹿郡大雄村と接する。平成13年3月末現在、面積110.58km<sup>2</sup>、人口40,483人の小都市である。

遺跡は横手市の北部、北緯39°21′28″、東経140°34′24″に立地し、JR奥羽本線横手駅から北へ約5.7km、同後三年駅からは東へ約2.8kmの位置にある。

横手盆地は、秋田県南東部に所在する、東西約15km、南北約60kmと南北に細長い形状の盆地で、西奥羽盆地列中最大の面積を有する。盆地の東縁は急峻な奥羽山脈と接し、西縁は低平な出羽丘陵によって限られる。盆地の西側を県内最長の雄物川が北流、大曲市花館付近で西北西に流路を変え、出羽丘陵を横断して秋田平野へと流下し、日本海に注ぐ。

奥羽山脈から西へ向かって流れる中小の諸河川は、横手盆地東縁部に多くの扇状地を発達させている。『土地分類基本調査六郷』では、本遺跡周辺の地形を東から順に山地・丘陵地・台地・低地と大きく4区分している<sup>(註1)</sup>。

本遺跡は金沢丘陵地に立地し、その南方および西方には杉沢川・吉沢川合成開析扇状地が、西北方には厨川・中ノ目川合成扇状地が広がる。なお、この2つの扇状地は、前掲書における4区分のうちの台地に属している。これら扇状地上および扇状地前延扇状構造低地上には、長岡森丘陵地や後三年美入野丘阜群などの残丘が点在する。遺跡北方約0.5km地点にある斥候山<sup>ものみ</sup>(標高137m)および本遺跡周辺からは、広大な田園に島状に点在するこれら残丘を見渡することができる。

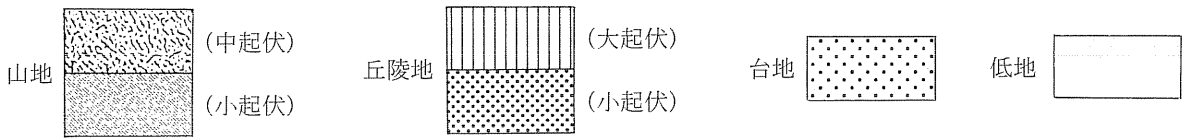
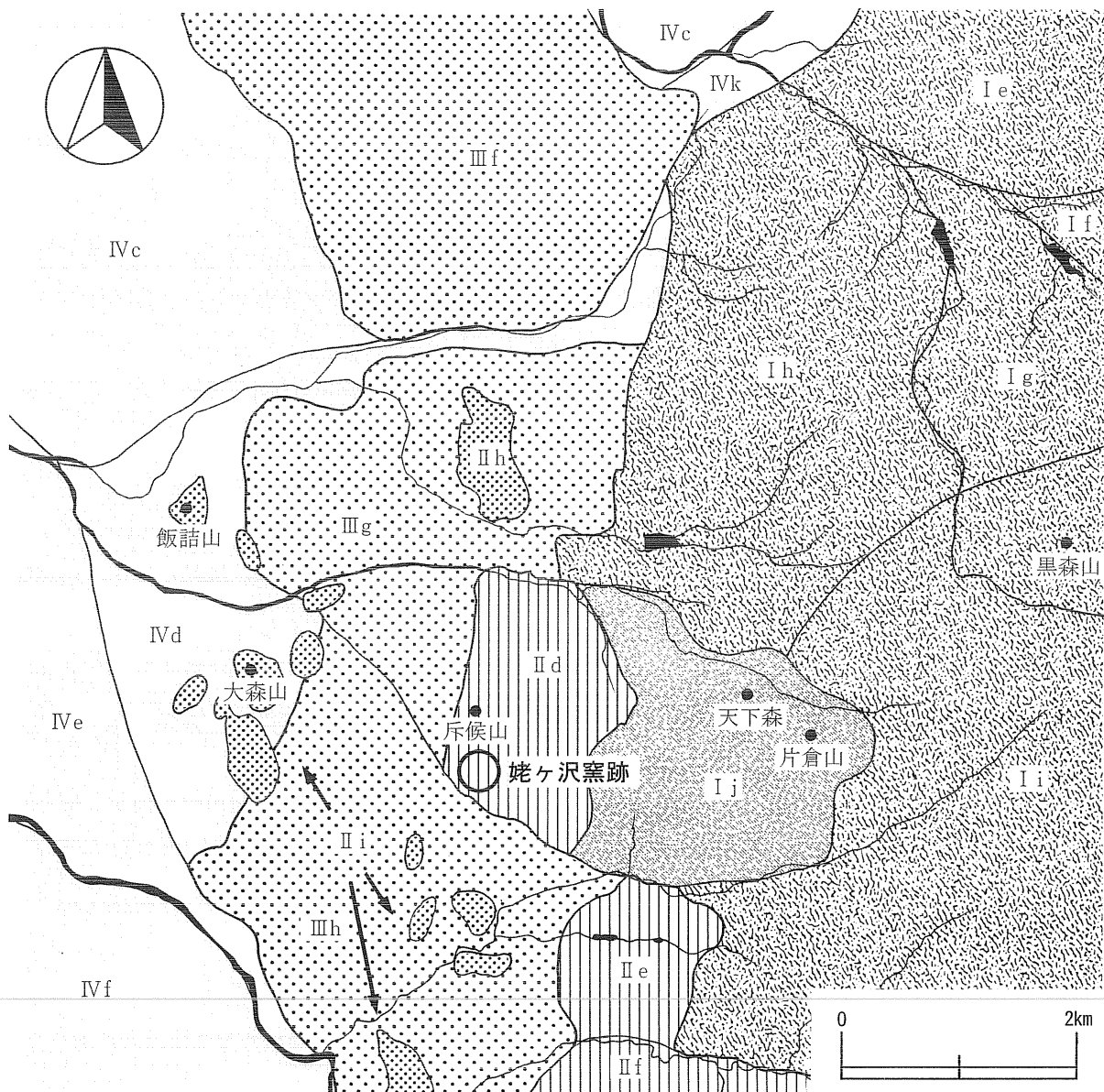
斥候山付近より発する姥ヶ沢その他の小さな沢を集め、三貫堰が上述の扇状地を北西方向に流れる。本遺跡は、三貫堰が国道13号と交わる東側0.4km地点に立地する。昭和59・60年度の横手市教育委員会による市内遺跡詳細分布調査では、「山地の突端に形成された中位段丘第2段東側斜面で(須恵器窯跡を)1基確認」と記している。今回の調査区はこのとき確認した須恵器窯跡には直接係らないが、沢を挟んだその対岸にあたる<sup>(註2)</sup>。

本遺跡の表層地質は、新第三紀中新世堆積の弥勒層に属し、軽石凝灰岩および砂質凝灰岩より成る。軽石凝灰岩は、風化作用により軟化してしばしば奇岩を呈し、細工し易いという特徴があり、本遺跡周辺で「金沢石」としてカマドや掘抜井戸の側壁として利用されたことが知られている。

### 第2節 歴史的環境

横手市教育委員会刊行による詳細分布調査報告書には、横手市内の遺跡として186箇所の遺跡が掲載されており、縄文時代の遺跡が最も多く、平安時代がこれに次ぐ<sup>(註3)</sup>。

ここでは横手市金沢地区・同杉沢地区および両地区に北接する仙北郡仙南村に所在する遺跡につい



- I 山地
  - (I e) 女神山山地 (I f) 湯田山地 (I g) 黒森山山地 (I h) 四天地山地
  - (I i) 御岳山山地 (I j) 片倉山山地
- II 丘陵地
  - (II d) 金沢丘陵地 (II e) 中島丘陵地 (II f) 吉沢丘陵地
  - (II h) 長岡森丘陵地 (II i) 後三年美入野丘阜群
- III 台地
  - (III f) 丸子川(六郷)扇状地 (III g) 厨川・中ノ目川合成扇状地
  - (III h) 杉沢川・吉沢川合成開析扇状地
- IV 低地
  - (IV c) 丸子川扇状地前延扇状構造低地 (IV d) 厨川扇状地前延扇状構造低地
  - (IV e) 横手川水系右岸低地 (IV f) 横手川水系左岸低地 (IV k) 善知鳥川河谷低地

第2図 地形区分図

て調査の行われた例を中心に概観し、近接する諸地域については適宜簡単にふれることとする。

この地域は、源義家が雁行の乱れによって伏兵を知ったという“西沼”、清原家衡最期の地である“長岡森（武者隠しの森）”、清原武衡が捕らえられたとされる“蛭藻沼”など、後三年合戦にまつわる多くの伝説に彩られたロマンあふれる土地柄であるが、発掘調査例は必ずしも多くない。

旧石器時代の遺跡はこの地域での確認例はない。市内横手地区や朝倉地区において、横手川生成による河岸段丘上に台処館遺跡・小吉山遺跡等が存在することは明らかになっている。

縄文時代では、市内旭地区の上猪岡遺跡の土坑覆土から貝殻腹縁文の施された早期の土器片が出土しており<sup>(註4)</sup>、本遺跡西北西1.3kmの保土森遺跡〈22〉では大木6式期（縄文前期）と推定される竪穴住居跡が確認されている。

本遺跡南1.1kmに立地する中杉沢A遺跡〈42〉は、1969（昭和44）年から7次にわたる調査が実施され、縄文中期前葉の竪穴住居跡26軒が検出された集落跡である<sup>(註5)</sup>。他に中期の遺物は西長岡森遺跡〈7〉・飯詰竪穴群〈25〉等でも見つかっている。

縄文時代後～晩期では、仙南村と六郷町にまたがる石名館遺跡で水路部分のみの調査が2次にわたって行われており、土坑が検出されたほか、土器や祭祀に関わる遺物が確認されている<sup>(註6)</sup>。また、旭地区に所在するオホン清水A遺跡は、後期後半～晩期前半の墓域を含めた集落遺跡である<sup>(註7)</sup>。

弥生時代になると遺跡数は減少し、この地域では遺跡の確認例が未だない。横手盆地全体でも、遺構が明瞭に確認されているのは、旭地区の上猪岡遺跡の竪穴住居跡1軒・土器埋設遺構1基などにすぎない<sup>(註8)</sup>。古墳時代の遺跡は全県でも数箇所しか確認されていないが、横手市内ではオホン清水B遺跡（旭地区）と田久保下遺跡（横手地区）の2遺跡が確認されている<sup>(註9)</sup>。

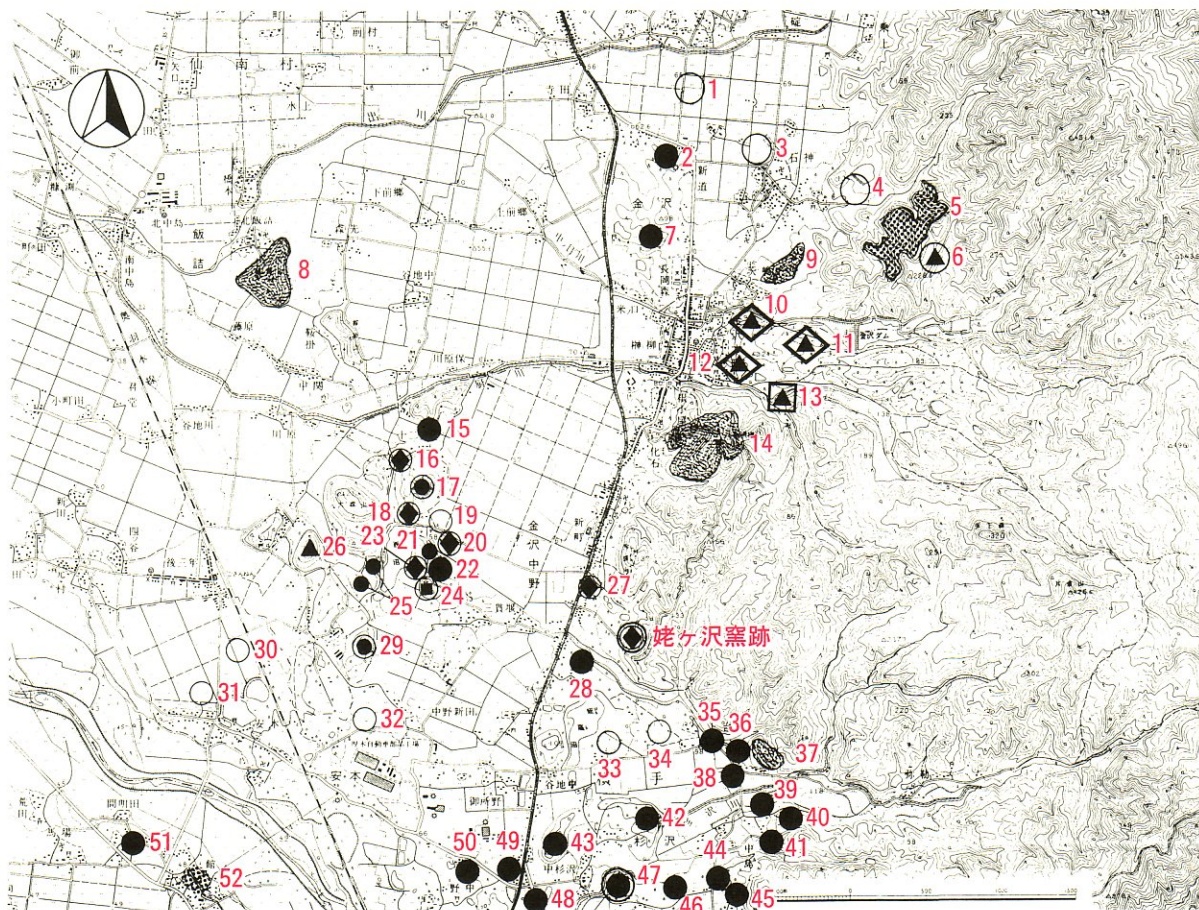
奈良時代に入って、平鹿町に所在する年子狐遺跡・中藤根遺跡・下藤根遺跡の各遺跡が奈良時代から平安時代初期にかけての集落跡と考えられている<sup>(註10)</sup>。当該期に至って中央政府の横手盆地への進出も顕著となり、南部では須恵器生産が始まっている。盆地中央部の中山丘陵付近では竹原窯跡が8世紀、田久保下遺跡・富ヶ沢窯跡・郷土館窯跡などは9世紀に始まった窯業遺跡と考えられる<sup>(註11)</sup>。

平安時代では、本遺跡の北西約0.4kmに物見窯跡〈27〉があり、9世紀から10世紀前半までを操業期間とする須恵器窯跡4基が調査された<sup>(註12)</sup>。十二牲A窯跡〈16〉・十二牲B窯跡〈18〉・下矢来沢窯跡〈20〉・保戸森窯跡〈23〉などの窯業遺跡は、発掘調査は行われていないが、「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」などでは操業期間を平安時代と推定している<sup>(註13)</sup>。

本遺跡北西約1.9kmには十二牲B遺跡〈15〉がある。県営ほ場整備事業（金沢地区）に係る調査として平成10（1998）年度に7,580㎡の発掘調査がなされた。9～10世紀の掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土師器焼成遺構、柱列などの遺構のほか、須恵器、土師器、木製品、木簡などの遺物が出土した<sup>(註14)</sup>。

本遺跡南約0.6kmには上台A遺跡〈34〉がある。農免農道工事建設計画路線に係り、平成11（1999）年度にその一部350㎡が調査された。その結果、平安時代の竪穴住居跡1軒、土師器焼成遺構4基などを検出している<sup>(註15)</sup>。

平安時代の集落跡としては、集落全体の様相がわかるような調査はなされていない。本遺跡の西北西約1.5kmにある飯詰竪穴群〈25〉は、竪穴平面形状が方形であったことから当該期の集落と推測されるが詳細は不明である<sup>(註16)</sup>。この地域以外では、横手市旭地区の手取清水遺跡が掘立柱建物主体の集落であり、墨書土器・硯・木簡・鳥形など多様な遺物が出土している<sup>(註17)</sup>。また、朝倉地区における大鳥



凡例			
● 縄文	● 縄文・古代	■ 館跡(古代)	◆ 窯跡
○ 古代	◇ (古代～中世)	■ 館跡(中世)	■ 墓
□ 中世		▲ 経塚	

第3図 周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	中谷地	遺物包含地	古代	19	下矢来沢A	遺物包含地	古代	37	杉沢城	館跡	中世
2	長岡森	遺物包含地	縄文	20	下矢来沢窯跡	窯跡	古代	38	上台B	遺物包含地	縄文
3	元東根	遺物包含地	古代	21	下矢来沢B	遺物包含地	縄文	39	杉沢字中島A	遺物包含地	縄文
4	陀弥長根	遺物包含地	古代	22	保土森	集落跡	縄文	40	杉沢字中島B	遺物包含地	縄文
5	石神館	館跡	古代	23	保土森窯跡	窯跡	古代	41	杉沢字中島C	遺物包含地	縄文
6	一字山	経塚	古代	24	保土森火葬墓	墳墓	古代	42	中杉沢A	集落跡	縄文
7	西長岡森	遺物包含地	縄文	25	飯詰竪穴群	竪穴群	縄文	43	中杉沢B	遺物包含地	縄文
8	飯詰城	館跡	中世	26	東山本	経塚	不明	44	狼ノ沢A	遺物包含地	縄文
9	茨島館	館跡	中世	27	物見窯跡	窯跡	古代	45	見入野天狗沢A	遺物包含地	縄文
10	老姥山経塚	経塚	(古代～中世)	28	杉沢字谷地中B	遺物包含地	縄文	46	狼ノ沢C	遺物包含地	縄文
11	瀬袋経塚	経塚	(古代～中世)	29	東西法寺	遺物包含地	縄文・古代	47	狼ノ沢B	遺物包含地	縄文・古代
12	真坂経塚	経塚	(古代～中世)	30	本田下	遺物包含地	古代	48	中杉沢C	遺物包含地	縄文
13	閑居長根経塚群	経塚	中世	31	中通西	遺物包含地	古代	49	南御所野	遺物包含地	縄文
14	金沢城跡	館跡	中世	32	北御所野	遺物包含地	古代	50	村後	遺物包含地	縄文
15	十二牲B	遺物包含地	縄文	33	杉沢字谷地中A	遺物包含地	古代	51	上間明田	遺物包含地	縄文
16	十二牲A窯跡	窯跡	古代	34	上台A	遺物包含地	古代	52	真壁館	館跡	中世
17	十二牲A	遺物包含地	縄文・古代	35	上台C	遺物包含地	縄文				
18	十二牲B窯跡	窯跡	古代	36	鞍石沢	遺物包含地	縄文				

第1表 周辺遺跡一覧

井柵跡は後三年合戦における在地勢力である出羽清原氏の居館と称され、昭和52（1976）年から昭和56（1981）年にかけて行われた横手市教育委員会による調査では、平安時代後期に平地に営まれた防禦性集落であることが明らかになった<sup>(註18)</sup>。

平泉政権期およびそれに後続する時期には、県内では主として横手盆地縁辺部の丘陵上で幾つかの経塚が発見されている。本遺跡周辺はそのなかでも経塚分布の密な地域で、元久3（1206）年銘のある銅製経筒の出土した閑居長根経塚群〈13〉をはじめ、獺袋経塚〈11〉、老姥山経塚〈10〉、直坂経塚〈12〉、一字山経塚〈6〉など現在欠失したものも含めると相当数にのぼる<sup>(註19)</sup>。また、保土森遺跡からは当該期の火葬墓を検出しており、出土した須恵器系中世陶器の骨壺は県指定有形文化財となっている<sup>(註20)</sup>。

後三年合戦において中心的な舞台になったとされる金沢城跡〈金沢柵跡、14〉は、本遺跡北北東約1.5kmの丘陵上に位置するが、昭和39（1964）年～昭和46（1951）年の発掘調査の結果では、出土遺物の多くは中世のものであり、平安時代後半の軍事施設としての遺構は検出されなかった<sup>(註21)</sup>。

本遺跡周辺では杉沢城〈37〉、飯詰城〈8〉、茨島館〈9〉などの中世城館が確認されている。それぞれ杉沢氏、久米氏、金沢氏の居館と推定されている<sup>(註22)</sup>。

近世以降の金沢は、羽州街道沿いの一集落として今日に至っている。本遺跡の北0.5km地点に所在する横手市立金沢小学校（旧格知小学校）は、近世にあつては羽州街道の伝馬所であったといわれている<sup>(註23)</sup>。

註1 秋田県農政部農地整備課『土地分類基本調査 六郷』 1988（昭和63）年

註2 横手市教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』 横手市文化財調査報告11 1986（昭和61）年

註3 註2に同じ

註4 秋田県教育委員会『東北自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ－上猪岡遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第208集 1991（平成3）年

註5 横手市教育委員会『中杉沢遺跡発掘調査概報』 横手市文化財調査報告1 1973（昭和48）年

註6 秋田県教育委員会『石名館遺跡発掘調査報告書－仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』 秋田県文化財調査報告書第112集 1984（昭和59）年

秋田県教育委員会『石名館遺跡第2次発掘調査報告書－仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査－』 秋田県文化財調査報告書第138集 1986（昭和61）年

註7 横手市教育委員会『オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』 横手市文化財調査報告10 1984（昭和59）年

註8 秋田県教育委員会『東北自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅹ－上猪岡遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第208集 1991（平成3）年

註9 横手市教育委員会『オホン清水－第3次遺跡発掘調査報告書－』 横手市文化財調査報告10 1984（昭和59）年

註10 秋田県教育委員会『中藤根遺跡』 1974（昭和49）年

秋田県教育委員会『下藤根遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第39集 1976（昭和51）年

利部 修「下藤根遺跡出土土師器の再検討」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第8号』 1993（平成5）年

註11 秋田県教育委員会『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書－富ヶ沢A・B・C窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚－』 秋田県文化財調査報告書第220集 1992（平成4）年

## 第2章 遺跡の位置と環境

- 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』 秋田県文化財調査報告書第209集  
1991（平成3）年
- 利部 修「竹原窯跡の須恵器編年」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要7号』 1992（平成4）年
- 註12 杉渕 馨「物見窯跡について」『秋田地方史論集』 1981（昭和56）年
- 註13 利部 修「辺境における出羽北半の窯跡出土須恵器」『蝦夷・律令国家・日本海－シンポジウムⅡ・資料集－』日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会 1997（平成9）年
- 弘田柵跡調査事務所『弘田柵跡Ⅰ 政庁跡』 1985（昭和60）年
- 岩見誠夫・船木義勝「秋田県の須恵器及び須恵器窯の編年」『秋大史学』32 1985（昭和60）年
- 註14 秋田県教育委員会『十二牲B遺跡－県営ほ場整備事業（金沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第304集 2000（平成12）年
- 註15 秋田県教育委員会『上台A遺跡－農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』 秋田県文化財調査報告書第301集 2000（平成12）年
- 註16 秋田県教育委員会『秋田県の文化財』 1989（平成元）年
- 註17 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V－手取清水遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第190集 1990（平成2）年
- 註18 横手市教育委員会『大鳥井山V－横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報－』 1982（昭和57）年
- 註19 秋田県教育委員会『秋田県の文化財』 1989（平成元）年
- 註20 奈良修介『秋田県の紀年遺物』 1976（昭和51）年
- 秋田県教育委員会『秋田県の文化財』 1989（平成元）年
- 註21 秋田県教育委員会・横手市教育委員会『金沢柵跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第12集 1967（昭和42）年
- 秋田県教育委員会・横手市教育委員会『金沢柵跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第23集 1971（昭和46）年
- 秋田県教育委員会・横手市教育委員会『金沢柵跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第25集 1972（昭和47）年
- 註22 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 註23 秋田県教育委員会『歴史の道調査報告Ⅷ 南部羽州街道』 秋田県文化財調査報告書第141集 1986（昭和61）年

## 第3章 調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

遺跡周辺は、前章第1節に述べた通り、地形区分上、金沢丘陵地に属している。丘陵地は一般に水はけがよく、また丘陵斜面は平坦面よりも相対的に日当たりも良好であることなどから樹園地として利用される場合が多く、本遺跡およびその周辺ではりんご・ぶどうの果樹園となっている。

今回の調査範囲は遺跡の全体ではなく、農免農道建設事業に係る一部分(1,050m<sup>2</sup>)にすぎない。本調査区は丘陵斜面の裾部にあたり、東高西低の傾斜を呈する。遺構確認面まで掘り下げた状態では、標高値の最も高いのは東端L S 50区内の95.5m、最も低いのは西端M J 52区内の87.5mであり、その間の距離は約45mであるところから、平均斜度はおよそ17°48'となる。

昭和59・60年度の横手市教育委員会による遺跡詳細分布調査では、今回の調査区から見て沢の対岸にあたる中位段丘第2段で須恵器窯跡1基を確認しており、「標高92~96m」と記録している(註1)。

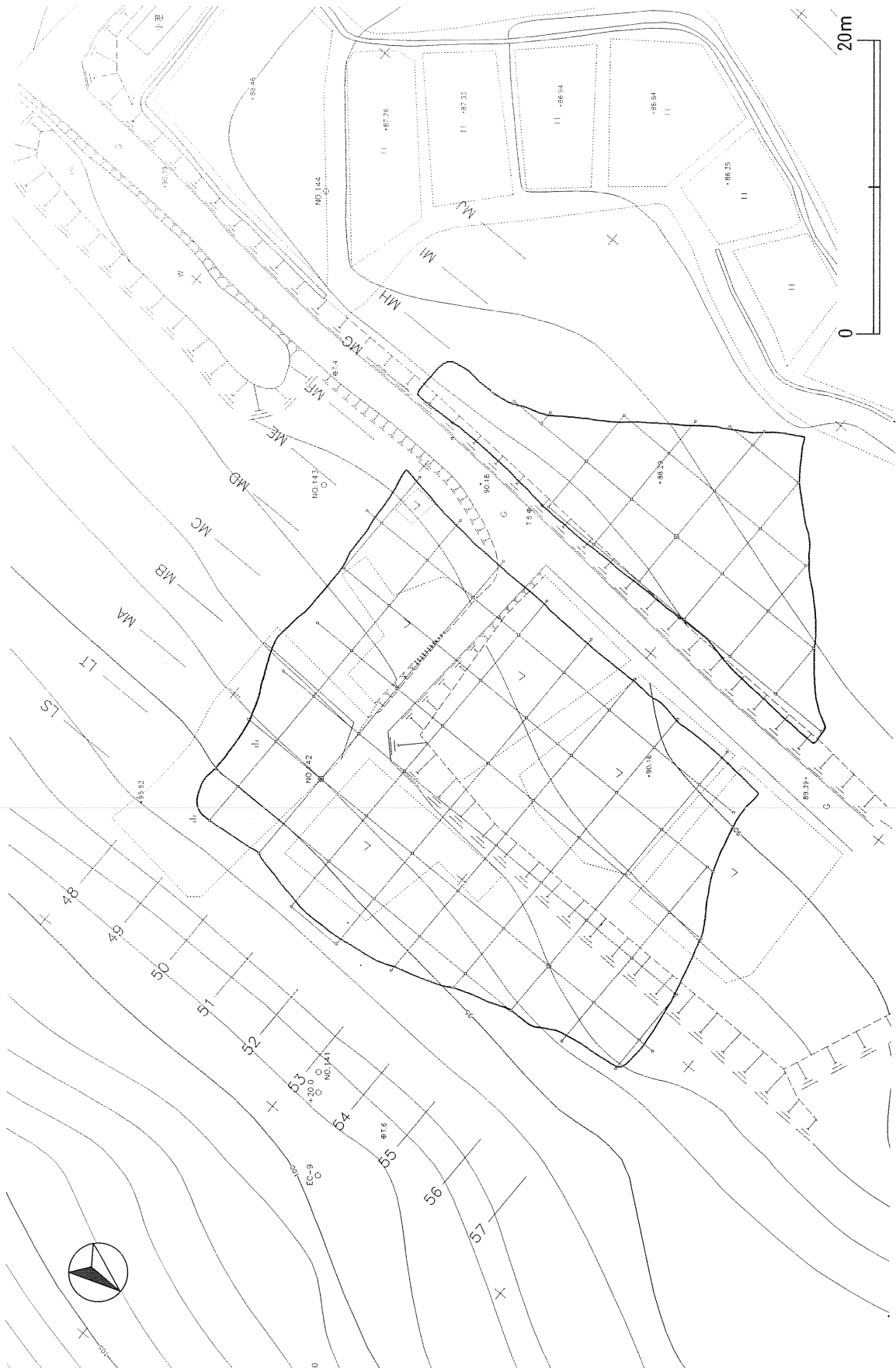
本調査では、1,050m<sup>2</sup>の範囲に計5基の土器焼成遺構、工房址の可能性が考えられる7基の竪穴状遺構ほかを検出している。須恵器窯跡は今回の調査では検出されなかった。土器焼成遺構は、土器焼成窯と土器焼成坑とに二分したうちの後者に属する。出土遺物のほとんどは、酸化炭焼成による、いわゆるロクロ土師器(赤焼き土器、以下単に「土師器」と呼称)である。ロクロピットと見なされる遺構も2基検出している。

これらの諸点から、本遺跡は、丘陵傾斜地を利用した平安時代の生産遺跡であり、歴史的には、当地方における律令制的窯業生産の定着を意味するものとして捉えることができるであろう。

### 第2節 発掘調査の方法

調査区全域には国家座標第X系の座標北を基準として、(X=-71191.732, Y=-22359.236)を原点とする各4m間隔の方眼を設定した。方眼の原点を通る南北線をMA、同じく東西線を50とし、南北線は西に向かってアルファベットの符号を、東西線は北に向かって数字の符号を、それぞれ昇順となるよう付した。なお、南北線に付した2文字のアルファベットはA~Tまでの20文字の繰り返しとなっている。この方眼によって画する4m四方の区画を「区」とし、その南北隅を通る東西線の符号と南北線の符号とを組み合わせ、MA50区のように呼称した(第4図)。

調査は、重機および人力による表土除去ののち、遺構確認作業を行った。遺構番号は「凡例」に示した通り、確認順に付し、遺構の性格を表す略記号と組み合わせ、SK I 01のように呼称した。ただし、調査の進行に伴い、遺構の性格が当初予想したものと異なり略記号を変更した場合や、途中で遺構でないことが判明して欠番とした場合がある。確認後の遺構精査は、長軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを残す四分割法と、柱穴などの小規模な遺構および現農道に係る部分などは長軸に沿う二分法で行うことを原則とし、遺構の重複する箇所などでは適宜サブトレンチを入れた。



第4図 調査区とグリッド設定



記録は図面と写真によった。遺構実測は、原則的に各方眼杭を基準として計測を行った。遺構の平面図・断面図の原図縮尺は1/20を基本としたが、遺物出土状況など細部の表現が必要なところでは縮尺1/10の計測も行っている。写真撮影は、35mmカラーリバーサルフィルムとモノクロネガフィルムを主に使用したが、必要に応じ35mmネガカラーフィルムも使用した。

遺物は、遺構名・方眼区画名・出土層位・出土年月日をチャック付ポリ袋もしくは耐水用荷札に記入のうえ取り上げることを原則とした。

### 第3節 発掘調査の経過

調査日記にもとづいて、以下に調査経過を略述する。なお、文中「西側」「東側」とあるのは、調査時点における現農道の西側、東側という意味である。

9月5日、作業員説明会、機材の搬入および現場・事務所等の環境整備を経て、午後より人力による粗掘作業と遺構確認作業を調査区西側より開始。6日、作業員の募集の件について横手市教育委員会・仙南村教育委員会・ハローワーク横手に依頼。西側遺構の半截作業を開始。7日、芳賀所長来跡、現地視察および作業員に激励と挨拶。8日、西側遺構の断面計測作業を開始。

11日、東側地区の人力による表土除去を開始。西側遺構の平面計測作業を開始。12日、櫻田課長補佐来跡、現地視察と現地指導。13日、西側遺構の確認終了、東側は表土除去から遺構確認にうつる。14日、西側SKP01Cがロクロピットと判明、西側地区の地形測量を開始。

18日、西側地区精査終了、午後、原因者である平鹿総合農林事務所(担当：池田裕一氏)に引渡す。20日、櫻田課長補佐来跡、現地指導。21日、埋蔵文化財センター保管事業部門関係各位の現場見学。

25日、SKI105を確認。26日、SKI105よりカマドを検出。27日、この日まで土器焼成遺構4基を検出、この時点では精査を継続中。29日、東側南部平坦部分の精査終了。

10月2日、平坦部分の重機による掘り下げ。竪穴状遺構と土器焼成遺構の半截開始。3日、土器焼成遺構の遺物出土分布図作成を開始。4日、平坦部分の下に遺構のないことを確認。土器焼成遺構の焼土範囲図作成を開始。5日、横手市教育委員会石田正明主事来跡。6日、遺構確認作業ほぼ終了。

10日、基本土層図の作成。11日、小林課長補佐来跡、現地指導。12日、SKI142が土器焼成遺構と重複していることを確認(SJ404)。13日、利部第3科長来跡、現地指導。

16日、遺構確認面の下1.4mより、白色粘土層確認。小林課長補佐来跡。17日、芳賀所長来跡、慰労をかねて現場終了挨拶。全土器焼成遺構の精査を終了。18日、LT・MA53・54区焼土遺構の精査を終了。地形測量を終了。19日、SK529検出。全竪穴状遺構の精査を終了。文化財保護室藤澤学芸主事・武藤学芸主事来跡。20日、SK529精査終了。大規模遺構の完掘写真と遺跡全景写真の撮影。午後、原因者に引渡し、機材の搬出・撤収作業を行った。

註1 横手市教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』横手市文化財調査報告11 1986(昭和61)年

## 第4章 調査の記録

### 第1節 調査区の地形と層序

第2章第1節「遺跡の立地と地理的環境」や前章第1節「遺跡の概観」でもふれたように、本遺跡は、奥羽山系金沢丘陵地の西向き斜面上に立地し、遺構確認面東端標高値が95.5m、西端標高値が87.5mを測り、比高8.0m、平均斜度17°48′のかかなりの急斜面となる。平坦面らしい平坦面は第5図や第7図で示されるようにほとんど存在しない。ただし、調査区南側には盛土により構築された可能性のある、やや平坦な一画が存在する。

基本土層観察のためのポイントは、調査区内に3箇所（ME55区、MD51区、ME48・49区）を設けたが、ここでは今掲げた平坦面上に所在するME48・49区の層序を基準に概略を述べる（第6図）。

- I層：表土 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり弱
- II層：明黄褐色土 粘質土 粘性強 しまり強 小礫少量混入 V層由来土
- III層：遺物包含層 黒褐色土 シルト 粘性中 しまり弱～中
- IV層：遺物包含層 黒色土 シルト 粘性中 しまり中
- V層：基盤層 明黄褐色土 粘質土 粘性強 しまり強 小礫少量混入
- (VI層：浅黄色土 粘土)

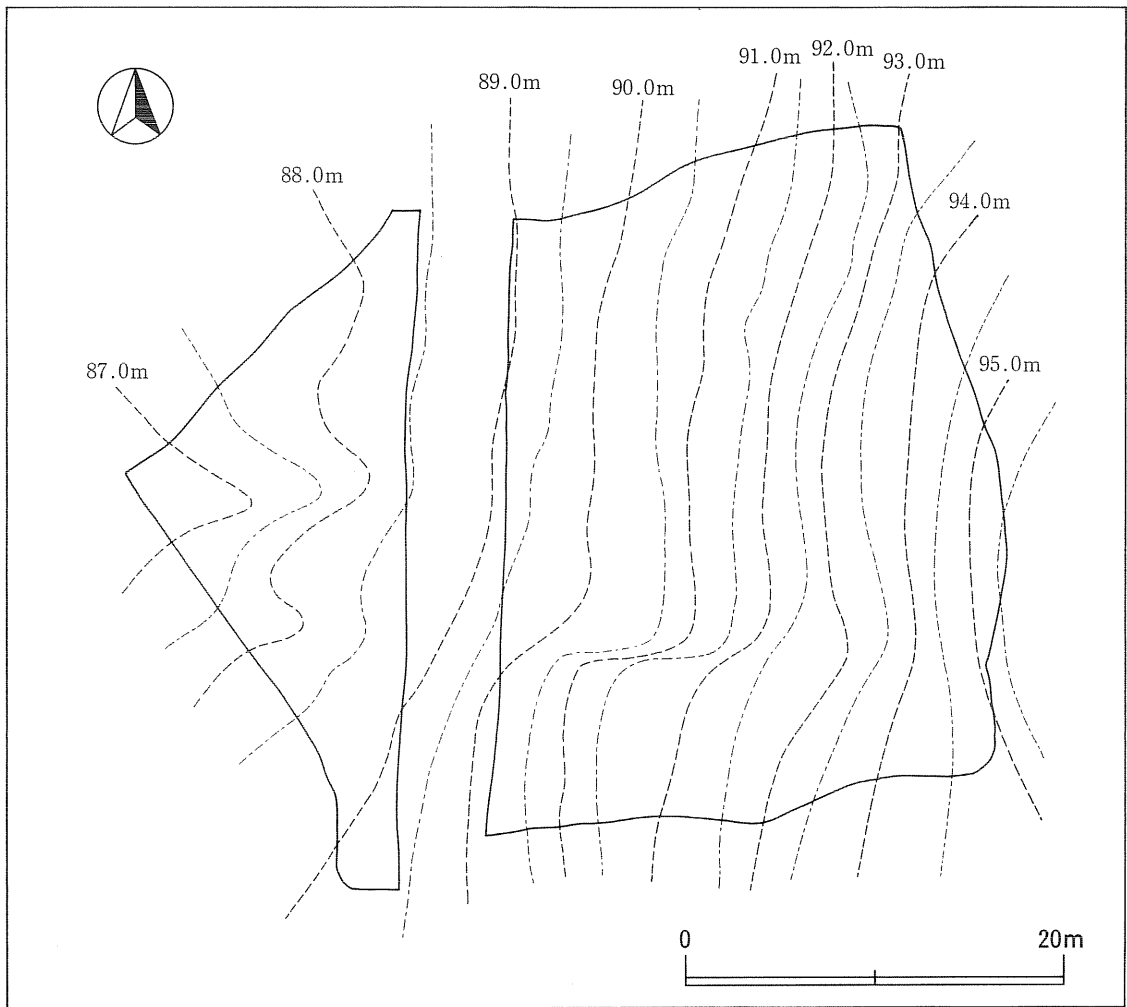
I層は、ME55区では黒色を呈する。

II層はV層由来土であり、MA～MF47～50区に広がっている。層厚は南端に近いME48・49区で0.2m前後あり、さらに南側にも広がっている。多くの遺構が立地する北側では、この層は欠失している。これが盛土による平坦面の造成であるならば、その層の厚さから重機使用が想像されるが、地元の話では、戦後、そのような事実はないとのことであり、詳細は不明である。この層の広がる区域のより上方が相対的にかなりの急傾斜を呈するため、地すべり、土砂崩れなどの自然的成因により形成されたとする見方も否定できない。

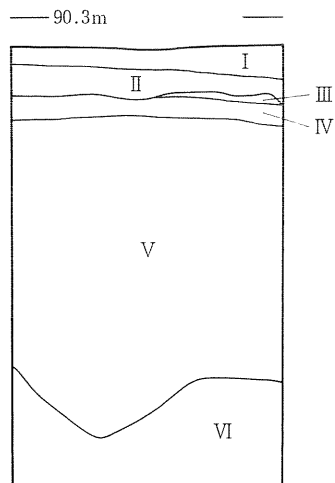
III層およびIV層は遺物包含層であるが、場所によってはいずれか一方の層が欠失するケースが多い。本遺跡が斜面上に立地すること、遺物の時期差が必ずしも明瞭に言えないことなどを考えあわせると、相対的に上位にあるIII層は、より上方からの流入等によって堆積したと推定できる。

V層は、MD51区では橙色を呈する。本層上面が平安時代の遺構確認面である。

VI層は、本遺跡における土師器生産において原料となった粘土と思われる。地山面よりの深さ1.4～1.7mである。いわゆる白色粘土である。調査に並行して周辺工事が行われていたためもあって採掘坑等は確認することができなかった。

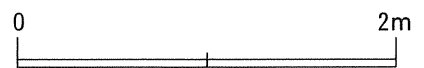


第5図 調査区内地形図



基本土層 (ME48・49区)

- I 表土 黒褐色土(10YR2/2) 粘性中 しまり弱
- II 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性強 しまり強  
小礫径5~20mm少 V層由来土
- III 黒褐色土(10YR3/1) 粘性中 しまり弱~中
- IV 包含層 黒色土(10YR2/1) 粘性中 しまり中
- V 明黄褐色土(10YR7/6) 粘性強 しまり強 基盤層  
小礫径5~20mm少
- VI 浅黄色土(2.5Y7/4) 粘土 土師器原料か



第6図 基本土層図

## 第2節 検出遺構と出土遺物

### 1. 検出遺構の概要

発掘調査の結果、本遺跡は傾斜地急斜面を利用した平安時代の土師器生産遺跡が北側～中央部のV層上面に広がり、南側のII層上面からは時期不明の各遺構を検出した。後者については、前節で述べたようにII層形成の時期が明らかでなく、遺物の共伴関係からも年代特定の根拠たりうるような遺物の出土がない。

### 2. 古代の遺構

古代の遺構は土器焼成遺構5基、竪穴状遺構7基、土坑28基、焼土遺構4基、溝跡3条、配石遺構2基、柱穴様ピット363基、掘立柱建物跡1棟、ロクロピット2基である。遺構確認面はすべてV層上面であるため、各遺構の説明において、確認面の記述は省略する。窯業生産に特化している本遺跡の性格に鑑み、本書においては、カマドを有し、通常は竪穴住居跡と称される遺構についても竪穴状遺構として扱った。

#### (1) 土器焼成遺構

土器焼成遺構は、いずれも調査区北側（53ライン以北）で確認している。出土遺物はほとんどが土師器である。比較的標高の高い北東部に2基、低い北西部に3基が分布し、後者は前者に比べ平面形状がやや円みを帯びる傾向がある。後者のなかには溝状の張り出しをともない、全体で柄鏡状を呈するものがある（S J 125）。

5基の土器焼成遺構は、規模的には長径が1.5～1.8m、短径が1.1～1.5mの範囲に収まり、断面構造も斜面山側を深く掘り、谷側を浅く掘って底を平坦にしている点では共通している。したがって、短径における断面形状は大略直角ないし鈍角三角形に近い形状となる。

土器焼成遺構より採取した炭化物は、樹種同定の結果ブナ属もしくはクリの木炭が多く、燃料としては広葉樹が好まれたであろうことが知られる。S J 404上面採取のサカキもしくはヒサカキはS K I 142に伴う可能性が高い。

#### S J 125（第9図、図版1-2）

MC54区に位置する。長軸方向はN-2°-Wである。ほぼ南北に細長い楕円形の掘り込みの下方（西方やや南寄り）に筋状の張り出しを伴い、全体では柄鏡状をなす。楕円プランの長径は1.50m、短径は1.10m、筋状の張り出しは長さ0.80mである。張り出し部には焼土の広がりが見えないため、焚き口としてではなく排水溝としての役割を果たして防湿・防水に供したか、もしくは酸素量を調節するための通風口の役割を果たしたものと考えられる。また、南側側壁に小規模な凹みがあり、こちらは焚き口の可能性がある。山側最深部の深さは0.25mである。底面標高は90.2mである。長軸における断面形状は立ち上がりが緩やかで、逆台形様を呈する。覆土は黒褐色で、その下層に焼土層と炭化物層がある。長径15cm大の楕円礫が覆土上方に投げ込まれており、廃絶行為の痕跡である可能性も考えられる。出土遺物は破片で144点を数える。土師器坏（第24図2・3）、土師器有台坏（第24図1）、須

恵器甕などが出土している。不掲載の土師器坏のなかには内面黒色処理を施したものがある。

採取の炭化物は、樹種同定の結果ブナ属3片を検出した。うち1片のブナ属（測定番号PLD-785）の放射性炭素年代測定の結果では、1245BP±45の値を得ている。

#### S J 139（第10図、図版1-3）

L T 53区に位置する。長軸方向はN-3°-Eである。隅丸方形の平面形状を呈する。長径1.80m、短径1.30mの規模を有する。山側最深部の深さは0.20mである。底面標高は93.2mであり、5基の土器焼成遺構中最高位に立地する。長軸における断面形状は、立ち上がりが緩やかで逆台形様を呈する。山側上方に攪乱があり、覆土は黒褐色土で地山土塊が混じる。底面が焼土となっている。出土遺物は、破片で51点を数える。土師器坏（第24図4～6）、土師器甕（第24図7）などが出土している。出土遺物は、他の土器焼成遺構よりも年代的にやや新しい諸特徴を有する。

採取の炭化物は、樹種同定の結果クリ3片を検出した。うち1片のクリ（測定番号PLD-786）の放射性炭素年代測定の結果では、1235BP±35の値を得ている。

#### S J 143（第11図、図版1-4）

MD54区に位置する。不整円形に近い平面形状を呈し、長径1.60m、短径1.46mの規模を有する。下方（西方）やや南寄りに、長径0.5m、短径0.4mの不整の掘り込みがあるが、覆土の土色・出土遺物などからみて一連の遺構と考えられる。上部が削平を受けており、元来つながっていたものか、そうでないかの判断はできなかった。

周囲を小ピットが囲んでおり、上屋がかかっていた可能性がある（S B 549）。山側最深部の深さは0.23mである。底面標高は89.5mであり、5基の土器焼成遺構中最低位に立地する。長軸における断面形状は、立ち上がりが緩やかで逆台形様を呈する。覆土は黒褐色土で、底面が焼土層となっている。出土遺物は破片総数189点で、本遺跡の土器焼成遺構中最多であった。土師器坏（第24図8～14、第25図1～4）、土師器甕（第25図5～7）、須恵器甕（第25図9）、須恵器壺（第25図8）などが出土している。土師器坏のなかには内面あるいは内外面に黒色処理を施したものがある。

採取した炭化物は、樹種同定の結果ブナ属およびクリの計2片と判明した。うちブナ（測定番号PLD-788）の放射性炭素年代測定の結果では、1040BP±35の値を得ている。

#### S J 240（第12図、図版1-5）

L T 56区に位置する。不整円形に近い平面形状を呈する。長径1.58m、短径1.40mの規模を有する。山側最深部の深さは0.28mである。底面標高は92.3mである。長軸における断面は一方が緩やか、一方が比較的急な立ち上がりを見せる。覆土は黒褐色土で、下面が小礫を少量含む焼土層になっている。出土遺物は破片で58点であった。土師器坏（第25図10～12・14、第26図1～3）、土師器有台坏（第25図13）、須恵器甕（第26図4）、須恵器壺が出土している。不掲載の土師器坏のなかには内面黒色処理を施したものがある。また、第25図11・12、第26図1のように灰黄褐色を呈する坏があり、柿の渋を塗布した可能性も考えられる。

### S J 404 (第17図、図版3-2)

MD53区に位置する。SK I 142に切られる。本遺構の山側の壁がそのままSK I 142の壁として利用されている。したがってSK I 142より年代的に古いことは確かであるが、本遺構廃絶後、さほど時間を置かずSK I 142の構築を開始した可能性が高い。焼土範囲は、底面における焼土の広がりとしてしか確認できないが、その規模は長径1.56m、短径1.42mである。最深部の深さは現状では0.23mである。底面標高は89.7mである。

土師器坏が上面より出土した。採取した炭化物の樹種同定の結果、ブナ属およびサカキの計2片を確認した。いずれもSK I 142に伴う可能性がある。

## (2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、方形ないし隅丸方形の平面形状をなすが、壁に溝を伴うもの伴わないもの、周囲や内部にピットを伴うもの伴わないものとさまざまなタイプがある。内部がマウンド状に盛り上がっているものもある(SK I 104A)。また、SK I 105とSK I 142はカマドをともない、それぞれ南側に煙道を有する。SK I 140でも焼土が確認された。

これら竪穴状遺構は、かなり急傾斜を示す丘陵地上に立地すること、カマドを併設しないものも多いこと、一辺2.5~3.0mほどの小規模なものが多いことなどを考慮すると、住居として用いられたと考えるよりは、いずれも工房として用いられた蓋然性が高い。

SK I 01においては、その内部よりロクロピット(SK P 01C)を検出している。ロクロピットについては別項を設け、そこで詳述することとした。

### SK I 01 (第13図、図版2-1)

MG53・54区に位置する。東側が現農道下となっており、調査期間が果樹の収穫等と重なり、地元で使用していたため調査不能であった。もともとは隅丸方形の平面形状を呈するものと推測する。一辺の推定約2.8mで他の一辺の長さは不明である。農道造成時に削平された可能性が高く、床までの深さは0.09mにすぎない。底面はほぼ平坦である。底面標高は88.3mであり、7基の竪穴状遺構中最低位に位置する。黒褐色土単一層である。内部にピット3基を伴う。うち、1基(SK P 01C)はロクロピットである。周溝・煙道・カマドは確認できなかった。土師器坏(第26図5・6、図版5-5)が出土しており、ともに外底面にはスノコ状圧痕が見られる。不掲載の土師器坏のなかには、内面黒色処理を施したものがある。

### SK I 104A (第14図、図版3-3)

MA51・52区に位置する。SK I 104B上位にあり同遺構を切る。隅丸方形の平面形状をなす。一辺最大長約3.7mとなり、本遺跡では最大規模の遺構となる。深さは0.57mである。本遺構の特徴としては床面がマウンド状に盛り上がり、その周囲をピットがめぐっていることが掲げられる。マウンド状の盛り上がりは、1.0m×1.4mほどの広がりや0.4mほどの高まりをもつ。底面標高は92.5mである。土師器坏(第26図9)、土師器甕(第26図10)が出土している。不掲載の土師器坏のなかには内面黒色処理を施したものがある。

採取した炭化物は、樹種同定の結果クリ1片と判明した。クリ（測定番号PLD-783）の放射性炭素年代測定の結果、1155BP±40の値を得ている。

#### SK I 104B（第14図、図版3-3）

MA・MB52区に位置する。SK I 104A下位にあり同遺構に切られる。楕円形の平面形状を呈する。底面標高は92.4m、深さは0.23mである。土師器坏（第26図8）、土師器有台坏（第26図7）など出土している。

#### SK I 105（第15図、図版2-3・4）

LS50・51区に位置する。隅丸方形の平面形状を呈する。規模は一辺2.80mである。周溝・カマド・煙道・排煙口をともなう。煙道基点付近ではカマドの芯材と思われる凝灰岩質の礫を数点検出した（図版2-4）。遺構の深さは0.18m、底面標高は94.6mであり、7基の竪穴状遺構中最高位に位置する。煙道は2つあり、いずれも南方に1.0m、0.8mの長さで並んで張り出す。東側の1.0mの煙道はトンネル状の排煙口を伴う。土師器坏（第27図1～5）、土師器小壺（第28図7、図版4-5）、土師器甕（第27図6～10、第28図1～6）および須恵器甕（第28図8）など多種類の遺物が出土している。カマド周囲、とくに煙道基点付近からは甕を中心に多数の遺物がまとまって出土した。土師器小壺は、割れ口部分が丁寧に擦られており、不良品転用の可能性がある。

採取の炭化物は、樹種同定の結果ブナ属2片と判明した。うち1片のブナ属（測定番号PLD-784）の放射性炭素年代測定の結果では、1240BP±40の値を得ている。

#### SK I 140（第16図、図版2-5）

LT53区に位置する。現状で長径約3.2mの規模を有する。山側の攪乱を切る。谷側及び上面が広範囲な攪乱を受けており、形状や内部構造など不明瞭な点が多い。ただし、南西側で焼土が確認されたので、元来はカマドをともなっていた可能性は高い。覆土より土師器坏（第28図9～11）、土師器甕（第29図1・2）を出土している。甕のなかには口径19.0cm、器高推定23cmの内面黒色処理を施したもの（第29図1、図版4-2）がある。

覆土よりテフラ分析試料（試料番号3・4）を採取した。分析の結果、本遺構は十和田aテフラが降下したと考えられる西暦915年には既に構築され、白頭山-苫小牧テフラ降下の時期と考えられる西暦947年には放棄され、堆積が進んでいた可能性が高いことがわかった。

#### SK I 141（第13図、図版3-4）

ME53区に位置する。一部が現農道下となっている。位置的には、SK I 01とSK I 142の中間に位置する。隅丸方形の平面形状を呈するものと思われる、一辺の長さは推定2.1mである。深さは0.18mである。底面標高は88.9mである。土師器坏が出土している。

#### SK I 142（第17図・第18図、図版3-1）

MD53区に位置する。SJ404を切る。SJ404の壁をそのまま本遺構の溝の壁に利用しているので

S J 404廃絶直後に営まれたものと考えられる。隅丸方形の平面形状を呈する。規模は一辺2.80mである。深さは0.21mである。底面標高は89.7mである。出土遺物は破片数212点で全遺構中最多である。土師器坏（第29図3～11、第30図、第31図、第32図3、図版5-1・2・6）、土師器甕（第32図1・2、図版4-3・4）、須恵器甕（第32図4～6）、須恵器壺（第32図7）が出土している。土師器坏の中には内面黒色処理を施したもの（第32図3、図版5-7）がある。外底面にスノコ状圧痕をともなうもの、内底面に黒斑のあるものが多く、タール質もしくは漆質の黒色付着物をともなうもの、すす状炭化物が器面に付着したもの、2次被熱痕の確認できる遺物も数多く確認されている。また、第29図5や第30図13のように底部に径1.5～2cm大の孔を穿いた土師器坏もあった。これらの資料は、本遺構では、不良品等が盛んに転用されたこと、土器の用途がきわめて多岐にわたっていたことなどを示すものとして評価できる。

本遺構で特徴的なのは、カマドを伴っていること、また山側の一辺とそれに直交するように内部に仕切り溝を有していることである。したがって溝は全体ではTの字に近い、やや変則的なものとなる。また、本遺構の東側1.2～1.3mにSD144が平行して立地しており、その平行関係は北東隅の屈曲部分についても言えるので、SD144が本遺構にともなうものであることは確実に考えられる。

採取の炭化物は、樹種同定の結果ブナ属2片と判明した。うち1片のブナ属（測定番号PLD-787）の放射性炭素年代測定の結果では、1335BP±40の値を得ている。

### （3）土坑

#### SK02（第19図）

MG54区に位置する。不整形の平面形状をなし、規模は長径1.48m、短径1.14mである。底面は段差を有する不整形で、壁はやや開きながら立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.45mで、底面標高は87.2mである。覆土は小～中礫を含む黒褐色土単一層である。

#### SK08（第19図）

MG53区に位置する。円形の平面形状をなし、長径1.35m、短径1.27mの規模を有する。断面は、ほぼ平坦な底面より急傾斜で立ち上がり、全体ではほぼ逆台形様を呈する。確認面から底面までの深さは0.47mであり、底面標高は87.6mである。覆土は色調等により3層に分層した。土師器坏が出土している。

#### SK20（第19図）

MH53区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径0.55m、短径0.42mの規模を有する。断面は、ほぼ中央に段を伴う二段構造を呈する。この形状からロクロピットの可能性も全くないとはいえないが、遺物等の共伴もなく、掘方の壁もやや不明瞭であるため、ここでは土坑とした。確認面から底面までの深さは0.23mであり、底面標高は87.3mである。覆土は黒色土単一層である。



**SK24 (第19図)**

MH50区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.88m、短径0.66mの規模を有する。断面は、円味を帯びた底面よりほぼ垂直に立ち上がり、全体ではU字状を呈する。確認面から底面までの深さは0.66mであり、底面標高は87.8mである。須恵器壺（第33図1）が出土している。覆土は2層に分層した。

**SK27 (第19図)**

MG51区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.52m、短径1.11mの規模を有する。断面は、ほぼ平坦な底面からやや急に立ち上がり、全体ではほぼ逆台形様を呈する。確認面から底面までの深さは0.50mであり、底面標高は87.8mである。覆土は色調などにより2層に分層した。

**SK28 (第19図)**

MI52区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.11m、短径0.56mの規模を有する。底面は緩やかに傾斜し、東側が深く、立ち上がりは一方はやや急で一方はやや緩やかであるため、断面形状は不整である。確認面から底面までの深さは0.5mであり、底面標高は86.8mである。覆土は2層に分層した。

**SK56 (第8図)**

MH53区に位置する。不整円形の平面形状をなし、長径0.61m、短径0.57mの規模を有する。深さは0.21mである。底面標高は87.6mである。

**SK67 (第20図)**

MI52区に位置する。楕円形の平面形状をなし、長径1.12m、短径0.76mの規模を有する。底面は比較的平坦であるが中央がやや盛り上がりしており、壁は大きく外反する。確認面から底面までの深さは0.44mであり、底面標高は86.6mである。

**SK74 (第8図)**

MG48区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径0.85m、短径0.77mの規模を有する。深さは0.50mである。底面標高は88.3mである。

**SK75 (第8図)**

MG48区に位置する。不整形の平面形状をなし、遺構の一部は調査範囲外となる。長径1.28m、短径0.96mの規模を有し、深さは0.36mである。底面標高は88.5mである。

**SK77 (第8図)**

MG47区に位置する。不整円形の平面形状をなし、長径1.10m、短径1.02mの規模を有する。深さは0.60mである。底面標高は88.4mである。

**SK78 (第8図)**

MG51区に位置する。不整形の平面形状をなし、径0.91mの規模を有する。深さは0.18mである。底面標高は88.5mである。

**SK79 (第8図)**

MG48区に位置する。不整円形の平面形状をなし、長径1.28m、短径1.14mの規模を有する。深さは0.17mである。底面標高は88.6mである。

**SK80 (第8図)**

MG50区に位置する。一部調査範囲外となり、平面形は不明である。推定径0.70mの規模を有し、深さは0.16mである。底面標高は88.6mである。

**SK145 (第20図)**

MD52区に位置する。円形の平面形状をなし、長径0.73m、短径0.71mの規模を有する。底面は中央に浅い凹みを伴うが、概ね平坦であり、壁は急に立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.20mであり、底面標高は89.5mである。覆土は色調等により2層に分層した。土師器坏が出土している。

**SK159 (第20図)**

MC54区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.65m、短径0.33mの規模を有する。深さは0.18mである。底面標高は90.6mである。

**SK165 (第8図)**

MB55区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.70m、短径0.34mの規模を有する。深さは0.06mである。底面標高は91.1mである。

**SK167 (第20図)**

MB52区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径0.86m、短径0.73mの規模を有する。壁はやや開きながら立ち上がり、底面は北側が凹みを伴って全体ではやや不整の断面形状となる。確認面から底面までの深さは0.35mであり、底面標高は89.7mである。覆土は色調などにより2層に分層した。土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。

**SK180 (第8図)**

MC51区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.84m、短径0.55mの規模を有する。深さは0.65mである。底面標高は89.9mである。

**SK198 (第20図)**

MA53区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.06m、短径1.00mの規模を有する。深

さは0.33mである。底面標高は92.1mである。土師器小甕（第33図2）を出土している。

#### S K 199（第16図）

MA53区に位置する。不整楕円形に近い平面形状をなし、長径2.85m、短径1.35mの規模を有する。深さは0.63mである。底面標高は92.4m、覆土は黒褐色土単一層である。山側の攪乱を切り、谷側には焼土（S N 395A～C）が広がる。山側を深く、谷側を浅く掘り込んで底を平坦にしているため、断面形状は土器焼成遺構に酷似する。ただし、壁および底から焼土は確認できなかった。土師器坏（第33図3）、土師器甕（第33図4・5）のほか、穿孔のある用途不明の土製品（第33図6）が出土している。土製品は長径2.0cm、短径1.8cmの不整楕円形、厚さは0.3cmと板状の形状をしている。径0.3cmの小さな孔が穿たれているが、つくりは粗く、手慰みの感が持たれる。

#### S K 233（第20図）

L T 51区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径1.20m、短径0.70mの規模を有する。底面は地形に伴って傾斜し、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。確認面からの深さは0.11mである。底面標高は92.3mである。覆土は色調等により2層に分層した。土師器坏が出土している。

#### S K 234（第8図）

調査区東端のL S 52区に位置する。楕円形の平面形状をなし、一部は調査範囲外となる。推定長径0.90mの規模を有する。深さは0.10mである。底面標高は95.3mである。

#### S K 238（第21図）

MA55区に位置する。楕円形の平面形状をなし、長径0.94m、短径0.81mの規模を有する。壁は緩やかに開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦で、深さはわずか0.05mである。底面標高は92.4mである。覆土は炭化物粒、地山土塊を含む、人為堆積による黒褐色土単一層である。土師器坏が出土している。

#### S K 270（第8図）

L T 53区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径0.58m、短径0.43mの規模を有する。深さは0.21mである。底面標高は93.5mである。

#### S K 328（第21図）

MB55区に位置する。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.98m、短径0.53mの規模を有する。上部削平によるためか、壁の立ち上がりは高さ0.05mにも満たない。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは0.06mである。底面標高は90.9mである。覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。

#### S K 344（第21図）

L T 55区に位置する。L T 55～57区をほぼ南北に走向するS D 205によって切られている。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.45m、短径0.96mの規模を有する。壁は開きながら立ち上がり、山側は

ラッパ状に開く。底面は、山側に比較的広い平坦面をもつ。確認面からの深さは0.25mである。底面標高は92.8mである。覆土は色調等により2層に分層した。1層土は比較的新しい年代の流入によるものと思われる。土師器坏・甕、須恵器甕が出土している。

#### SK529 (第21図)

ME54区に位置する。全体のほぼ半分が現農道にかかるため平面形状は不明である。確認できる範囲は不整形を呈し、一辺推定1.06mの規模を有する。壁は緩やかに外反し、底面は円味を帯びている。確認面から底面までの深さは0.55mであり、底面標高は88.4mである。覆土は色調等により4層に分層した。有機物由来の層や有機質ブロックがあり、採取炭化物の樹種も多岐にわたる。また、土師器坏(第33図7～9)、土師器甕(第33図10)、土師器鍋(第33図11)、須恵器甕(第33図12)を出土しており、生活に使用した器種が多いことなどから、当時の生活廃棄物を捨てた土坑と判断した。

採取の炭化物は、樹種同定の結果ヌルデ1、ブナ属2の計3片が判明した。うち、ヌルデ(測定番号PLD-790)の放射性炭素年代測定の結果では、1035BP±40の値を得ている。

#### (4) 焼土遺構

SN395A、SN395B、SN395Cは、それぞれ一連の遺構である可能性が高い。成形された礫2個体ほか中小の礫が配されており(SQ550A・B)、当焼土遺構と関連するものである可能性がある(第22図)。

#### SN395A (第22図)・SN395B (第22図)・SN395C (第22図)

MA53区に位置し、北よりA、B、Cと細分した。最北のSN395Aの北0.22m地点にロクロピットSKP324が立地するが、これら焼土遺構とSKP324との関係は不明である。

Aは円形、Bは不整形楕円形、Cは楕円形の平面形状をなす。規模はそれぞれ、Aが径0.55m、Bが長径1.00m、短径0.71m、Cが長径0.40m、短径0.33mの広がりをもつ。焼土層厚はAが0.09m、Bが0.18m、Cが0.08mといずれも薄い。焼土層下の標高はそれぞれAが92.3m、Bが92.4m、Cが92.5mである。焼土の固結の度合いは比較的低い。遺物は、Aからの出土はなく、Bからは土師器坏が出土しており、Cからは土師器坏、土師器甕(第35図8・9)、土師器鍋(第35図7)が出土している。

樹種同定の結果、SN395Bよりブナ属3片を検出している。

#### SN405 (第21図)

LT56区に位置する。楕円形の平面形状をなし、長径0.53m、短径0.40mの広がりをもつ。焼土の層厚は0.09mである。底面標高は92.7mである。口径20cm、器高33cmの土師器平底長胴甕(第35図6、図版4-2)および土師器坏が出土している。

#### (5) 配石遺構

#### SQ550A (第22図)・SQ550B (第22図、図版2-6)

MA53区に位置する。より上位にあるAと下位にあるBとに分けたが、石材がともに凝灰岩質であることを考慮すると、一連の構築物を形成していた可能性がある。さらにSN395A～Cの直上もしくは近接して礫の広がり確認されたことから、同焼土遺構と一連の遺構であった可能性もある。ただし、本遺構を構成する礫から必ずしも明瞭な被熱痕を確認できなかったことから、断定は避けたい。

IV層中より中小の礫を多数検出しており、SQ550Aと呼称する。現状ではいくつかの小破片ブロックとなっている。

SQ550Aの3cm下方より、V層を掘り込んで埋設されている成形された礫2点を確認した(図版2-6)。礫は16×36cm、20×40cmとほぼ同一の大きさで、直列に並ぶ配置をなしており、本来は一对をなしていたものと考えられる。他に、焼土SN395Bを切るようなかたちでも何点かの礫を確認しており、いずれもV層上面で確認した。IV層中確認のSQ395Aと区別し、以上を一括してSQ550Bと呼称した。

## (6) 溝跡

### SD144 (第17図)

MD53区に位置する。SKP331を切る。本溝はSKI142の山側(東側)1.2～1.3mに所在し、同遺構とは平行関係にある。その平行関係はSKI142プラン北東隅のほぼ直角部分にも及ぶので、同遺構にともなう可能性がきわめて高い。長さは3.20mで、最大幅0.40m、平均幅は0.30mほどである。断面形状は立ち上がり緩やかな逆不等三角形で、深さは0.20mである。底面標高は90.1mである。土師器坏が出土している。本溝からはテフラ試料(試料番号2)を採取している。分析の結果、十和田aテフラが降下したと考えられる西暦915年には既に構築されていた可能性が高いことが判明した。

### SD204 (第8図・第22図)

MA54区に位置する。一部、攪乱されている。最大幅は0.37mである。断面形状はU字形で、深さは0.12mである。底面標高は92.1mである。土師器坏(第34図1)、須恵器甕が出土している。

### SD205 (第8図・第21図・第22図)

LT55～57区に位置し、〈北北東-南南西〉方向に走向する。SK344を切る。最大幅は0.50mである。断面形状は逆台形で、深さは0.23mである。地山土塊を含む黒褐色土単一層であり、テフラ試料(試料番号1)および炭化物を採取している。底面標高は92.8mである。土師器皿(第34図2、図版6-1)、土師器坏(第34図3～8、図版5-3・4)、土師器有台坏(第34図9)、土師器甕(第34図10)、須恵器甕(第34図11)が出土している。土師器坏のなかには内面黒色処理を施したものがある。土器焼成遺構SJ240の山側を走向することから、同遺構と関連のある溝であった可能性がある。

テフラ分析の結果では、十和田aテフラが降下したと考えられる西暦915年には既に構築されていた可能性が高いことが判明した。

いっぽう採取した炭化物は、樹種同定の結果、クリ・ブナ属・ナシ亜科の3片であることが判明した。うちクリ(測定番号PLD-789)は放射性炭素年代測定の結果では、1210BP±60の値を得ている。この値はテフラ分析の結果とは矛盾しない。

### (7) 柱穴様ピット

柱穴様ピットについては、一括して第2表～第7表に別掲した。363基中、V層上面では327基を確認している。

SKP201で土師器坏が出土している(第35図3)。この他ではSKP58、SKP156、SKP288、SKP304、SKP371、SKP528で土師器片、SKP334で土師器片および須恵器片が出土している。

### (8) 掘立柱建物跡

#### SB549 (第11図)

MD54区に位置する。SJ143を囲むかたちで同遺構1m以内に14基のピットが立地している。SJ143の上屋として機能していたものと考えられるが、上屋を支えるピットの構成は不明である。

### (9) ロクロピット

#### SKP010 (第13図、図版2-2)

MF54区に位置し、SKI01内に立地する。隅丸方形の平面形状を呈し、全体では長辺0.40m、短辺0.29mの規模を有する。ロクロ軸痕跡の径は0.11m、断面は二段構造を呈し、全体の深さは0.52mとなる。底面標高は87.8mである。覆土より土師器坏(第34図12~14)、土師器甕(第35図1・2)が出土している。坏には内面黒色処理を施したもの(第34図14)もある。出土状況から廃絶儀礼の存在を示唆するものと評価できる。

#### SKP324 (第18図、図版3-5・3-6)

MA53区に位置する。全体では長径0.43m、短径0.38mの規模の楕円形平面を呈する。焼土遺構SN395A~Cおよび配石遺構SQ550A・Bの北側に近接して立地する。単独の検出であるが、遺構断面が二段構造となっており、下段側面に粘質土が塗られたようなかたちで確認されたため、ロクロピットと判断した。ロクロ軸痕跡の径は0.13mである。全体の深さは確認面から0.51mである。底面標高は92.0mである。覆土より土師器坏(第35図4)、土師器甕(第35図5)が出土しており、掘方覆土下位で軸痕跡を覆うかたちで確認されたため。意図的な埋納の可能性が高いと判断した。

### 3. 時期不明の遺構

II層上面で柱穴様ピットを36基検出している(第3表・第4表)。また、性格不明の土坑を7基検出しており、いずれも遺物を伴っていない。うち6基は、盛土様を呈する平坦面に立地するため、年代的には古代以降に属することは確実であるが、詳細は不明である。

#### SK129 (第8図)

MD48区に位置する。不整形の平面形状をなし、長径0.72m、短径0.58mの規模を有する。深さは0.19mである。底面標高は91.1mである。

**SK166 (第23図)**

MB53区に位置する。Ⅱ層上面より検出した。楕円形の平面形状をなし、長径0.70m、短径0.60mの規模を有する。断面は、ほぼ平坦な底面より、壁が急傾斜で立ち上がり、全体では逆台形様を呈する。確認面から底面までの深さは0.45mであり、底面標高は91.2mである。覆土は地山土塊を含む黒褐色土単一層である。覆土中位より近世陶磁器片が出土しているため、近世以降の土坑である可能性がある。

**SK191 (第23図)**

MB50区に位置する。Ⅴ層上面より検出した。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.37m、短径0.67mの規模を有する。比較的平坦な底面から東側は緩やかに、西側は急に立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.15mであり、底面標高は91.8mである。覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。

**SK192 (第23図)**

MB50区に位置する。Ⅴ層上面より検出した。楕円形平面をなし、長径0.68m、短径0.57mの規模を有する。地形に伴い東へ傾斜している底面から、壁はやや開きながら立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.12mであり、底面標高は92.1mである。覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。

**SK193 (第23図)**

MB49区に位置する。Ⅴ層上面より検出した。不整楕円形の平面形状をなし、長径0.98m、短径0.45mの規模を有する。比較的平坦な底面から、壁がやや開きながら緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.07mであり、底面標高は92.2mである。覆土は地山土粒を含む黒褐色土単一層である。

**SK194 (第23図)**

MB49区に位置する。Ⅴ層上面より検出した。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.27m、短径0.58mの規模を有する。地形に伴い傾斜した凹凸のほとんどない底面より、壁が開きながら緩やかに立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.06mであり、底面標高は92.5mである。覆土は地山土塊・粒を含む黒褐色土単一層である。

**SK208 (第23図)**

MD48区に位置する。Ⅴ層上面より検出した。不整楕円形の平面形状をなし、長径1.03m、短径0.61mの規模を有する。南側に比較的平坦な面を有する底面から、壁が緩やかに開きながら立ち上がる。確認面から底面までの深さは0.12mであり、底面標高は91.2mである。

#### 4. 小結

遺構内出土遺物については第24図～第35図に記している。図として掲載した遺物についてはすべて観察表を付した(第8表～第11表)。掲載していない遺物もすべて平安時代の土師器、須恵器である。

生産遺跡は一般に、墨書土器の出土等は見られず、破損や焼成不良などの失敗品・不良品、あるいは

は半製品が多いとされる。本遺跡にあっても同様の傾向にあり、焼成不良のものが多く、黒斑のあるものの比率も高い。台付土器も少ない。そのなかで注目されるのは、内面もしくは内外面に黒色処理を施したものが比較的多く見られることであり、黒色処理の工程は、本遺跡の工房内で行われたものと判断する。

興味深いのは、本来、半製品や不良品であったものを工人たちが転用して自らの生活に役立てたのではないかと思われる資料が散見されることである。これらの土器にはS K I 105出土の壺のように割れの部分を擦った痕跡がみられる例もある。また、S K I 142から出土した坏（第29図6、第30図8・15）のように、漆もしくはタールが割れの断面に固着しており、割れた後もそのままの状態で使用したことが明らかな資料もある。

土器焼成遺構については、出土遺物のほとんどは土師器である。器種としては坏が多い。微細な須恵器片もごく稀少ではあるが上位から出土している。これは後世の混入か、もしくは焼き台などとして使用されたものの可能性もある。

望月精司氏は「土師器焼成坑の分類」のなかで、土師器焼成坑（土器焼成遺構）を、床面と壁面が焼ける被熱度合いによって、床、壁ともに被熱する土師器焼成坑を「A類焼成坑」、床面のみ被熱するものを「B類焼成坑」、西日本に多く分布する明瞭な被熱痕を床面にも壁面にも有しないものを「C類焼成坑」と3つに大きく分類している<sup>(註1)</sup>。本遺跡の土器焼成遺構はいずれも床面および壁面に被熱痕を確認しているのでA類焼成坑に帰属し、平面形状においては横長の形態を指向するものと捉えてよいであろう。

工房址と目される竪穴状遺構からは坏のみならず甕・壺も多く出土しており、特にカマドを有するS K I 105・S K I 142は量・種類ともに豊富である。須恵器の出土は土器焼成遺構よりは相対的に多いが、器形全体がわかるような資料は皆無であった。この須恵器が沢向かいに所在するとされる須恵器窯の産か否かは確かめようもないが、状況証拠的にはその可能性はおおいに高い。今回の調査区で出土した須恵器がいずれも破片であり、接合したものが稀少であることは、隣接地から破片の状態を持ち込まれた蓋然性を示すものといえよう。

遺構内出土土師器は土器焼成遺構、その他の遺構を通じ、いずれも9世紀後半から10世紀前半にかけてのことが多い。そのなかでS J 143出土遺物のみは若干新しい要素を含む。甕も含めロクロナデ痕跡の確認されるものがほとんどである。須恵器は上述したように、年代特定の根拠となるような器形全体がわかるような遺物の出土はなかった。

テフラ分析の結果、S K I 140、S D 144およびS D 205から検出したテフラ試料は、10世紀代に降下したものとみられる。このことは、出土土師器の帰属年代とも整合する。



### 第3節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物については第36図・第37図に記している。図として掲載した遺物はすべて観察表を付した(第11表)。掲載していない遺物もほとんどすべてが平安時代の土師器もしくは須恵器である。遺構外出土遺物についても、遺構内出土遺物とほぼ同様の傾向が言える。年代的にも、遺構内出土遺物と大きく離れるものは、近現代の陶磁器を除いては皆無である。

MM51区より底部内外両面に回転糸切り痕をもつ坏が出土している(第37図2)。底部外面に回転糸切り痕を有する坏・碗・皿類土器はごく普通に見られるが、内面にも見られるものは極めて稀であり、秋田県内では平成11年度に調査を行った古開Ⅱ遺跡(飯田川町)に次いで2例目である(註2)。全国的には、東京都南多摩窯跡群御殿山14号(G14)窯(註3)、群馬県月夜野町藪田遺跡(註4)、岐阜県恵那市正家1号窯(註5)などで出土例がある。

内面糸切り痕をもつ、こうした土器の存在は、「底部円柱づくり」という成形技法が想定されている。本遺跡の出土土器の場合も、外面が右回りのロクロ回転を示すのに対し、内面は左回転を呈しており、これは、右回転切り離しのネガと考えられる。また、粘土巻き上げの接合痕も観察でき、さらに底部円柱上に成形されていた粘土が一部内面に付着している。

こうした諸点から、本遺物がロクロ水挽きによるものではないことは明らかであろう。この資料の存在は、大量生産的な土器成形の側面を示唆するものであり、「回転糸切り痕=ロクロ水挽き成形」という従来の考え方が見直されるべきであることを示している。いずれにせよ、当地方におけるこの時代の窯業生産が、ある種の専門性をもち、一部「底部円柱づくり」を採用することにより、製品の企画化や作業の効率化が図られていたことを示すものとして評価できよう(註6)。

また、実際の工具等の出土はみられなかったが、製作工程の一段階を示すと思われる焼粘土塊(第37図7)が1点出土している。この焼土塊には指頭大の凹みのほか靱痕跡がみられた。

なお、不良品の再利用を示す資料はここでもみられる。高台を打ち欠いて再利用したもの(第36図6・7)や破損した坏を転用して皿としたのではないかと推測される資料(第36図13、図版5-8)などがそれである。

註1 望月精司「第1章 土師器焼成遺構の定義と形式分類 第2節 土師器焼成坑の分類」 窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』 真陽社 1997(平成9)年

註2 秋田県教育委員会『日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ-古開Ⅱ遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第317集 2001(平成13)年

註3 服部敬史・福田健司「南多摩窯跡群の須恵器とその編年」 神奈川考古同人会『神奈川考古第6号』 1995(昭和54)年

註4 群馬県教育委員会『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第4集 藪田遺跡』 1985(昭和60)年

註5 恵那市教育委員会『正家1号窯発掘調査報告書』 1983(昭和58)年

註6 内面糸切り痕を有する土器についての記述は、

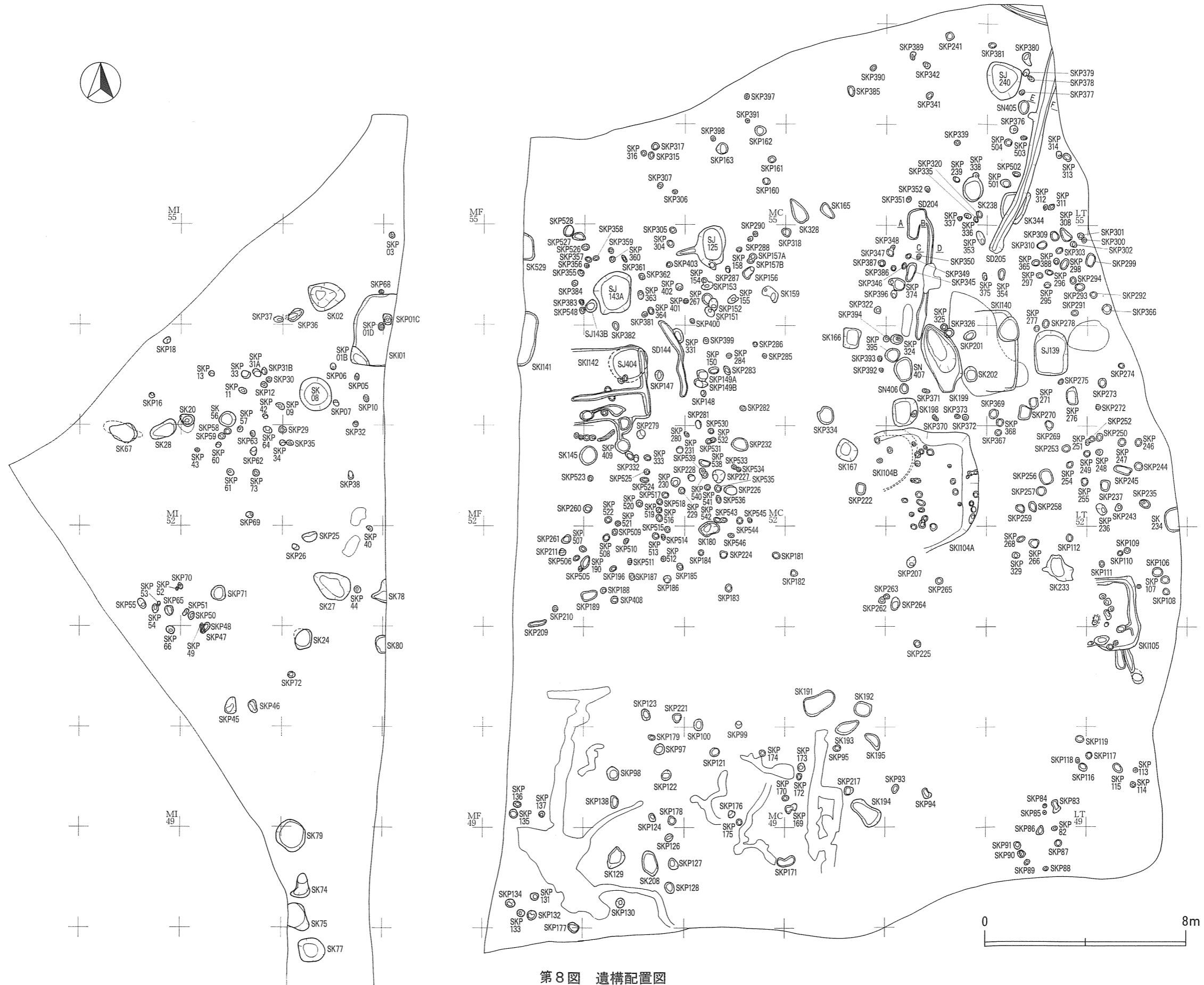
・野末浩之「内面糸切り痕をもつ山茶碗片をめぐって」 『愛知県陶磁資料館研究紀要6』 1987(昭和62)年

・群馬県教育委員会『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第4集 藪田遺跡』 1985(昭和60)年

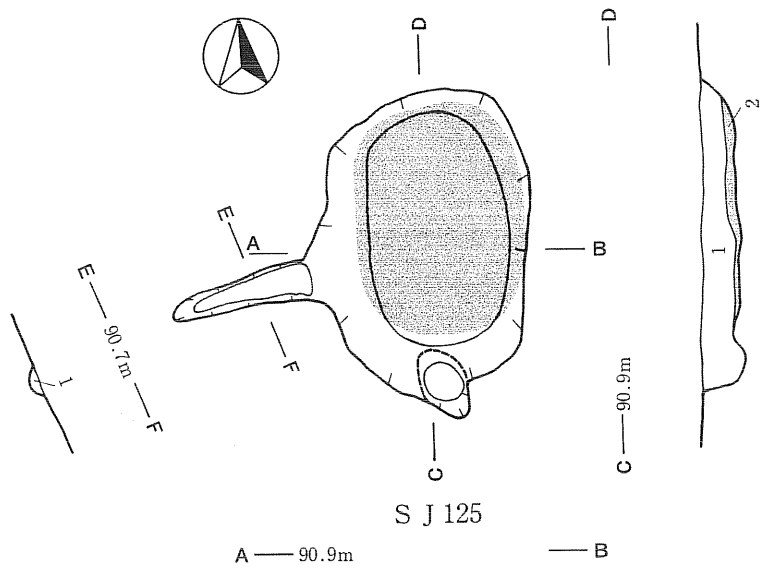
などを参照した。



第7図 遺構配置図



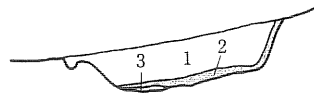
第 8 図 遺構配置図



S J 125

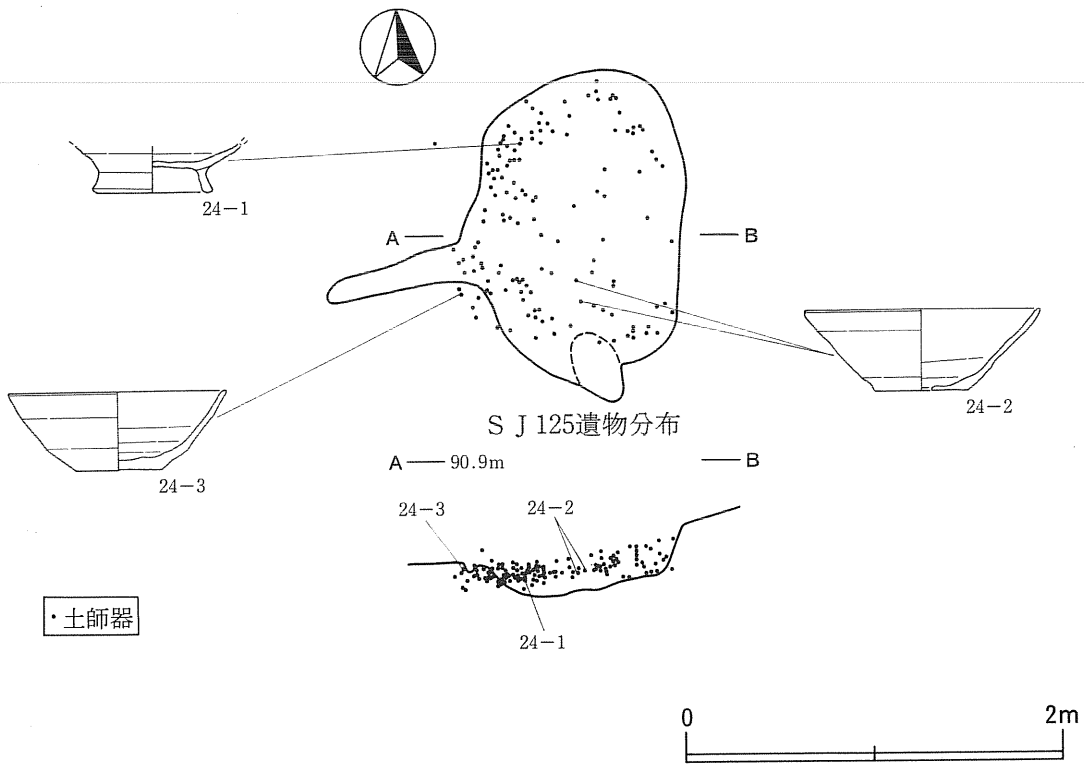
A — 90.9m

— B

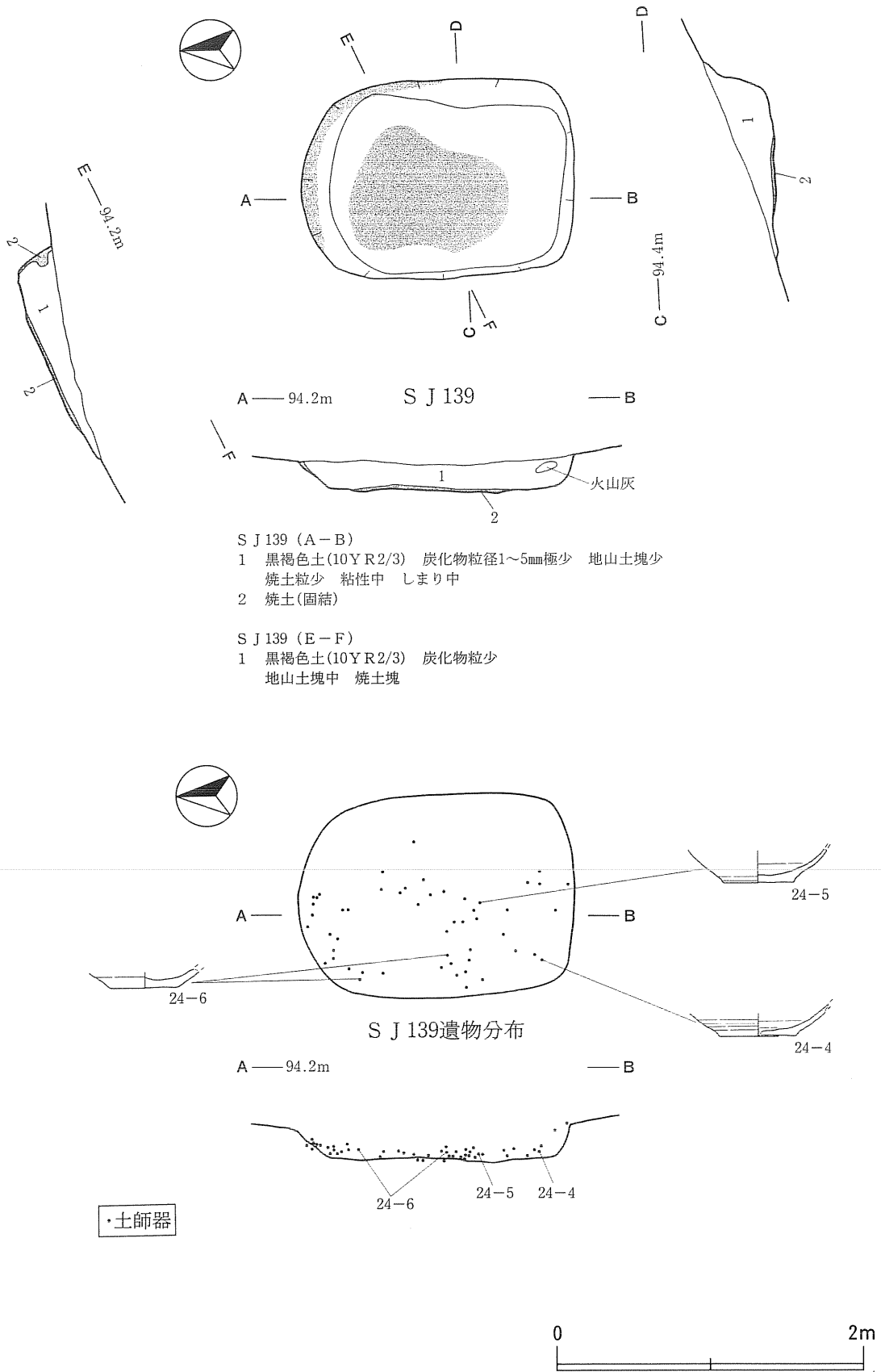


S J 125

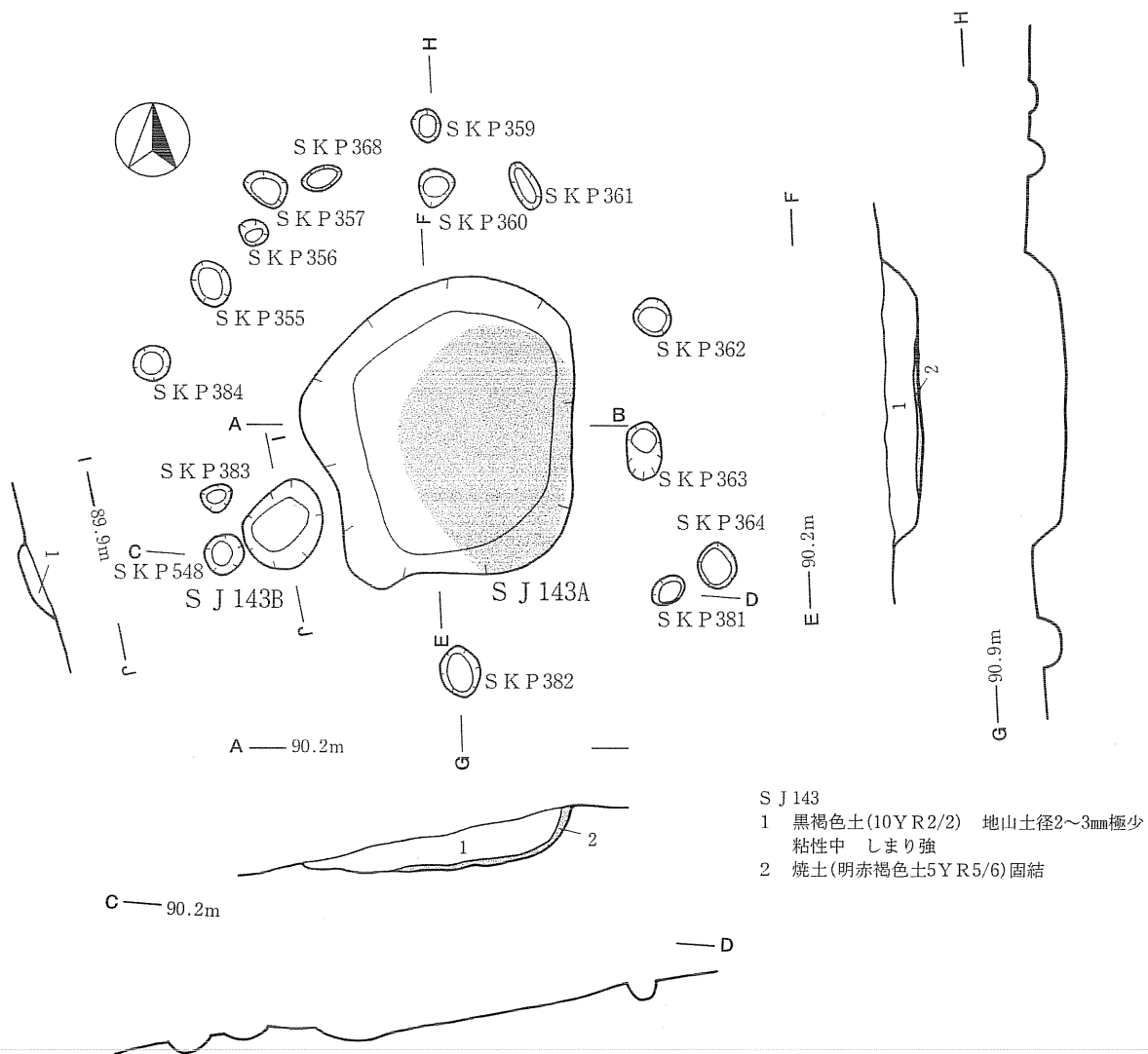
- 1 黒褐色土(10Y R 2/2) 炭化物粒径2~5mm少  
粘性中 しまり強
- 2 焼土(明赤褐色土5Y R 5/6)固結
- 3 炭化物



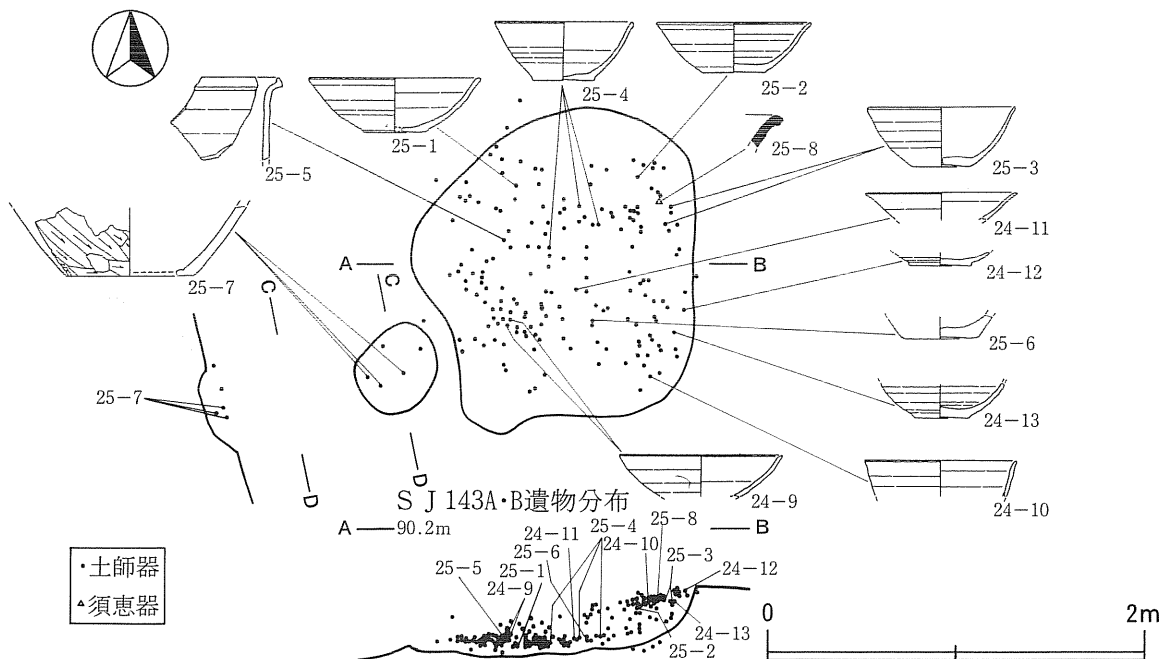
第9図 検出遺構 (1) (S J 125)



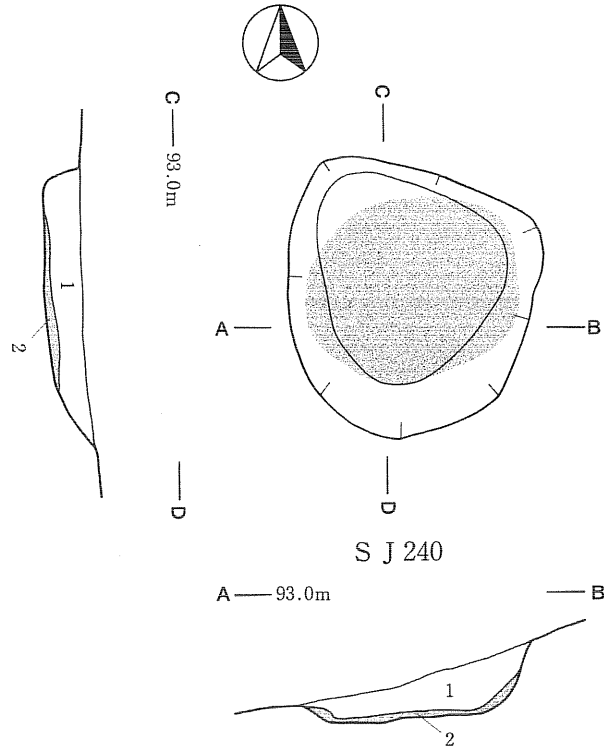
第10図 検出遺構 (2) (S J 139)



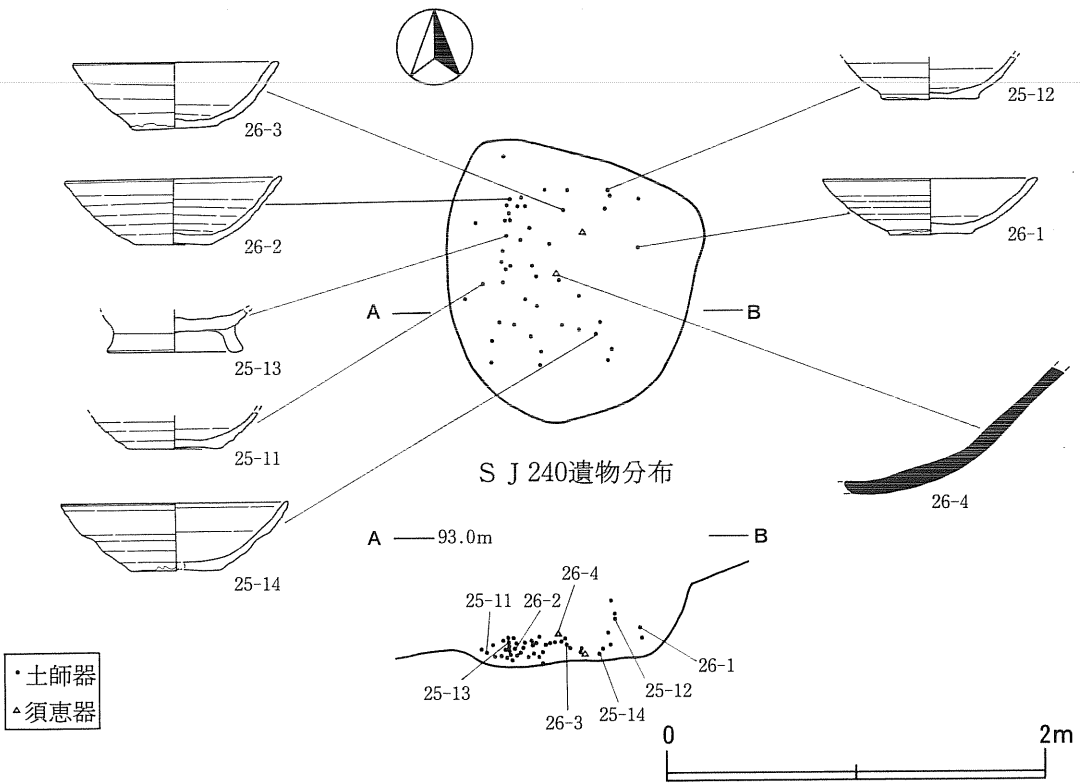
S J 143  
 1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土径2~3mm極少  
 粘性中 しまり強  
 2 焼土(明赤褐色土5YR5/6)固結



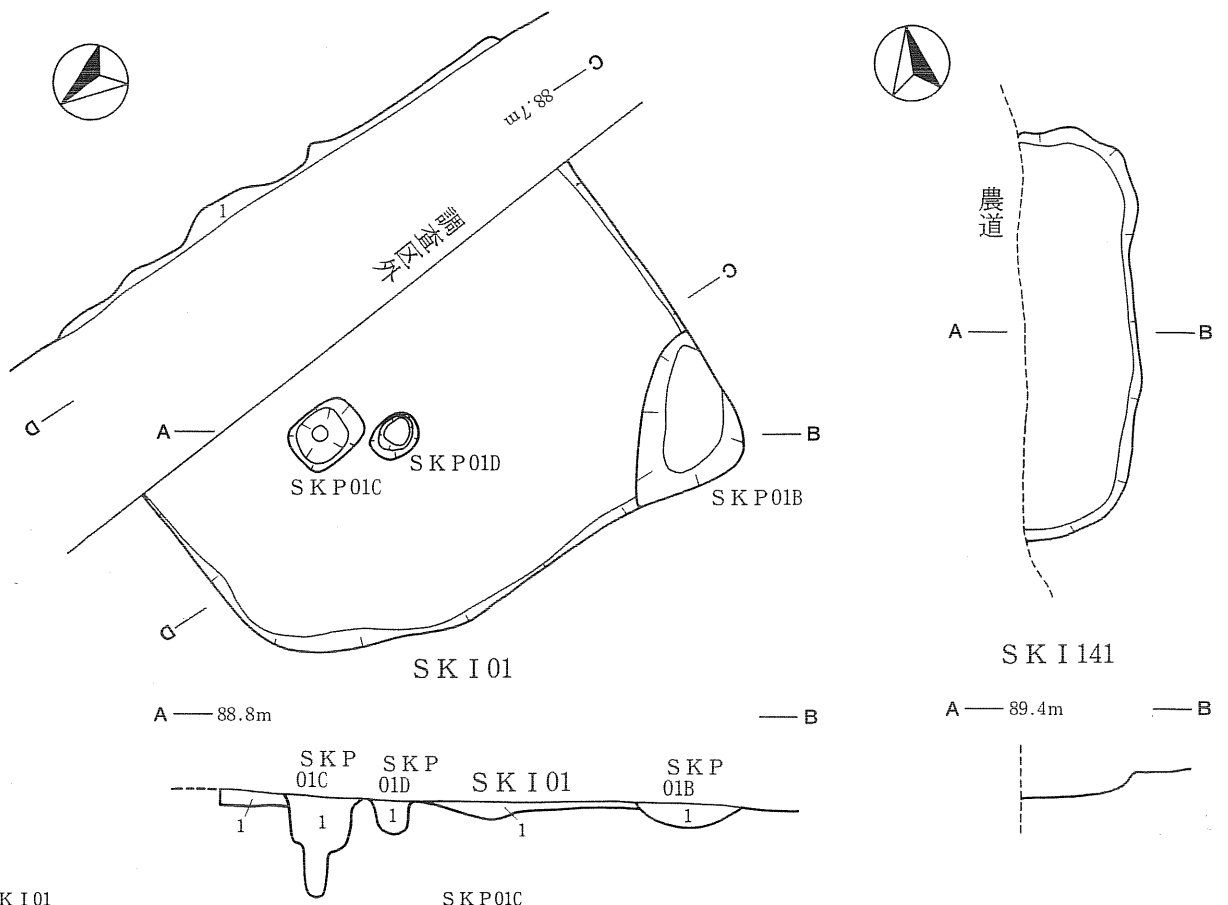
第11図 検出遺構 (3) (S J 143)



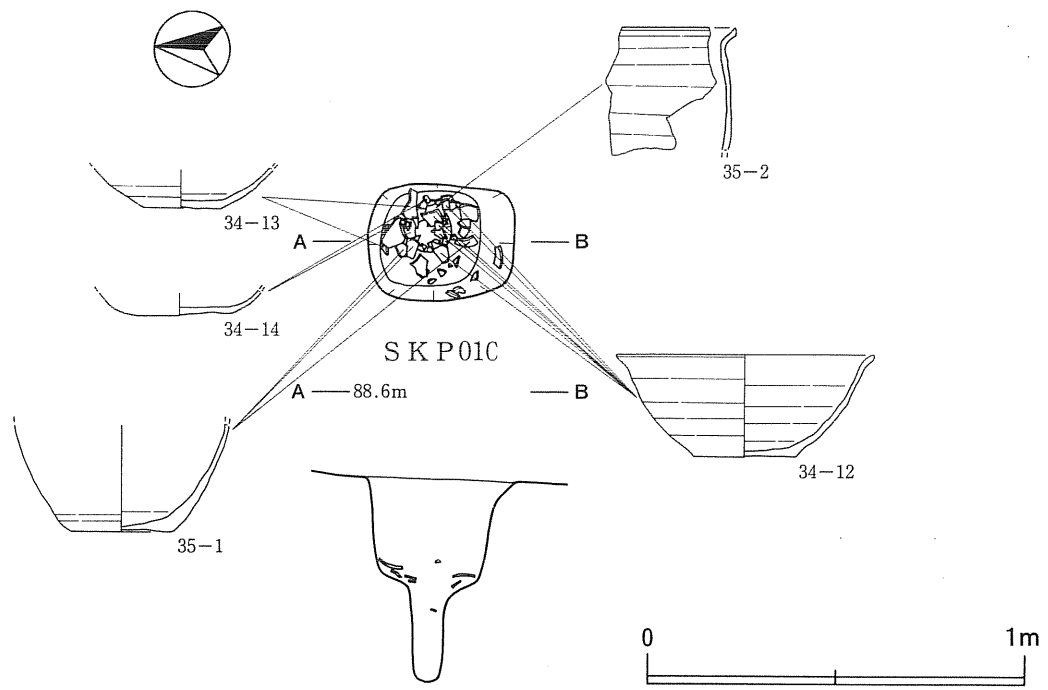
S J 240  
 1 黒褐色土(10YR2/2) 粘性中 しまり中  
 2 焼土(明赤褐色土2. 5YR5/3)固結 小礫少



第12図 検出遺構 (4) (S J 240)

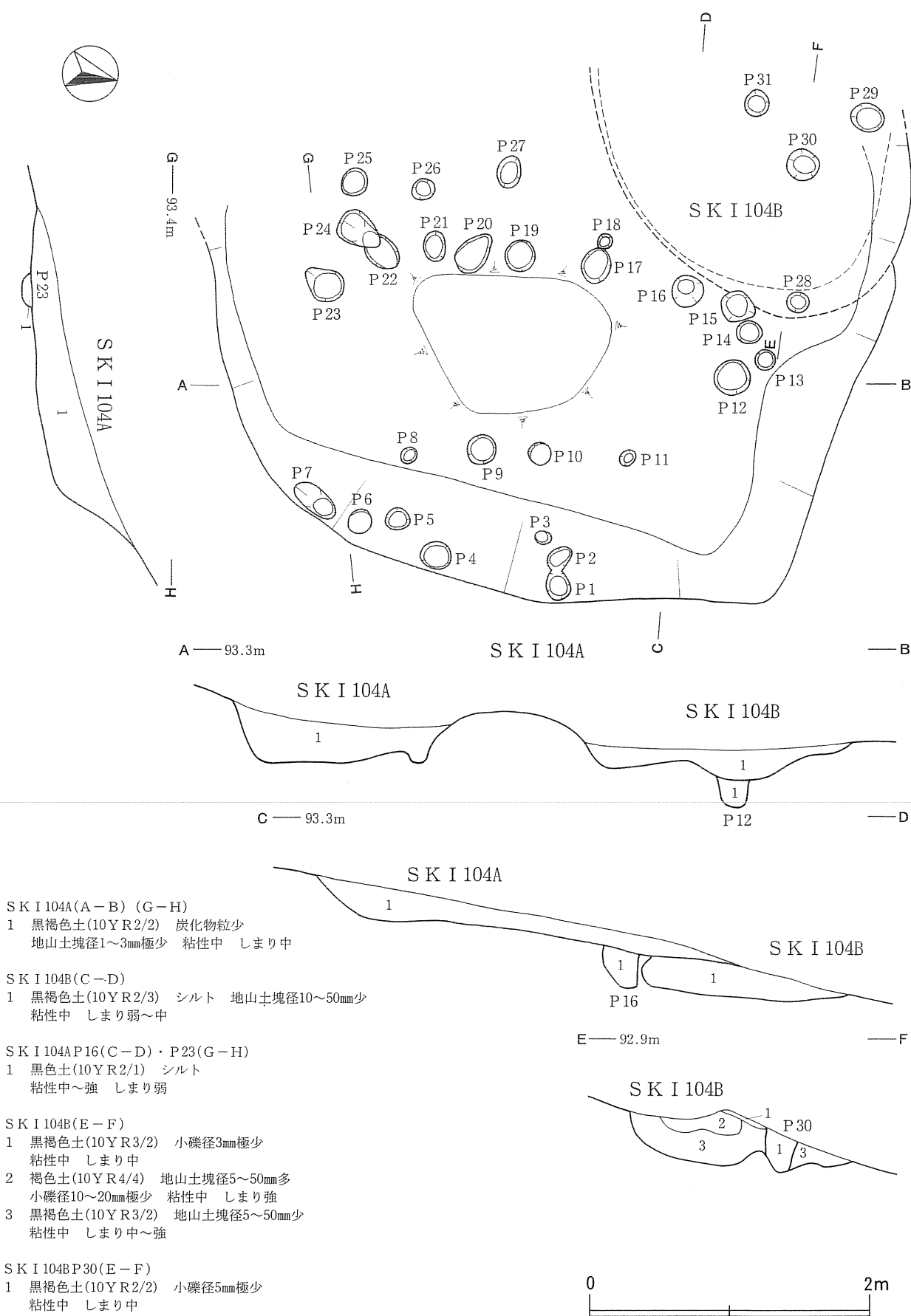


- |                              |                    |                    |                    |                               |
|------------------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------------------|
| SK I 01                      | SKP 01C            | SKP 01D            | SK I 01            | SKP 01B                       |
| 1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒径2~10mm少 | 1 黒色土(10YR2/1) 粘性中 | 1 黒色土(10YR2/1) 粘性中 | 1 黒色土(10YR2/1) 粘性中 | 1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒径5~20mm極少 |
| 粘性中~強 しまり中                   | 粘性中 しまり弱~中         | 粘性中 しまり弱~中         | 粘性中 しまり弱~中         | 粘性中~強 しまり中                    |

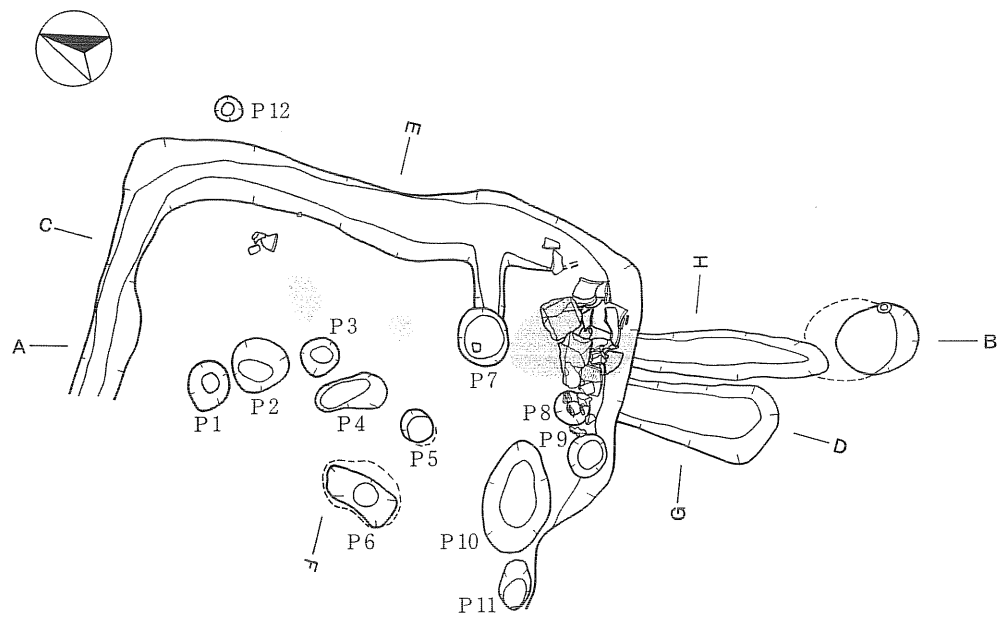


第13図 検出遺構 (5) (SK I 01, SKP 01B・C・D, SK I 141)

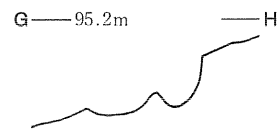
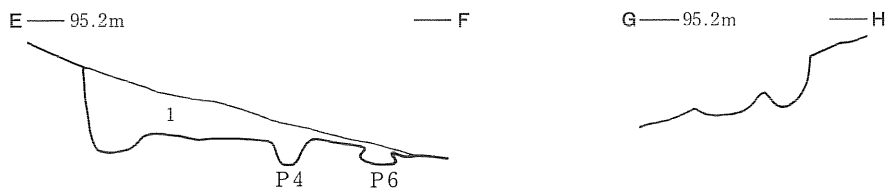
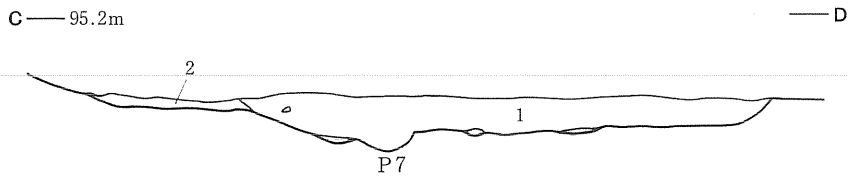
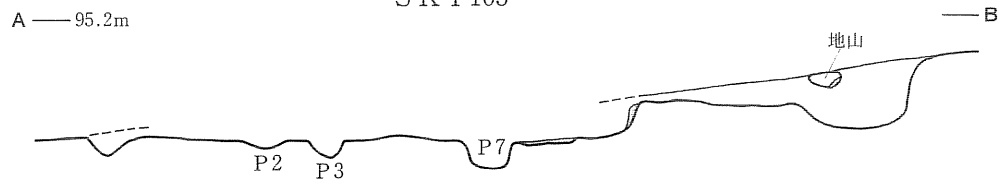




第14図 検出遺構 (6) (SK I 104A・B)

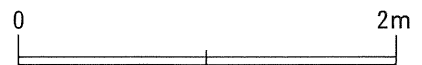


SK I 105

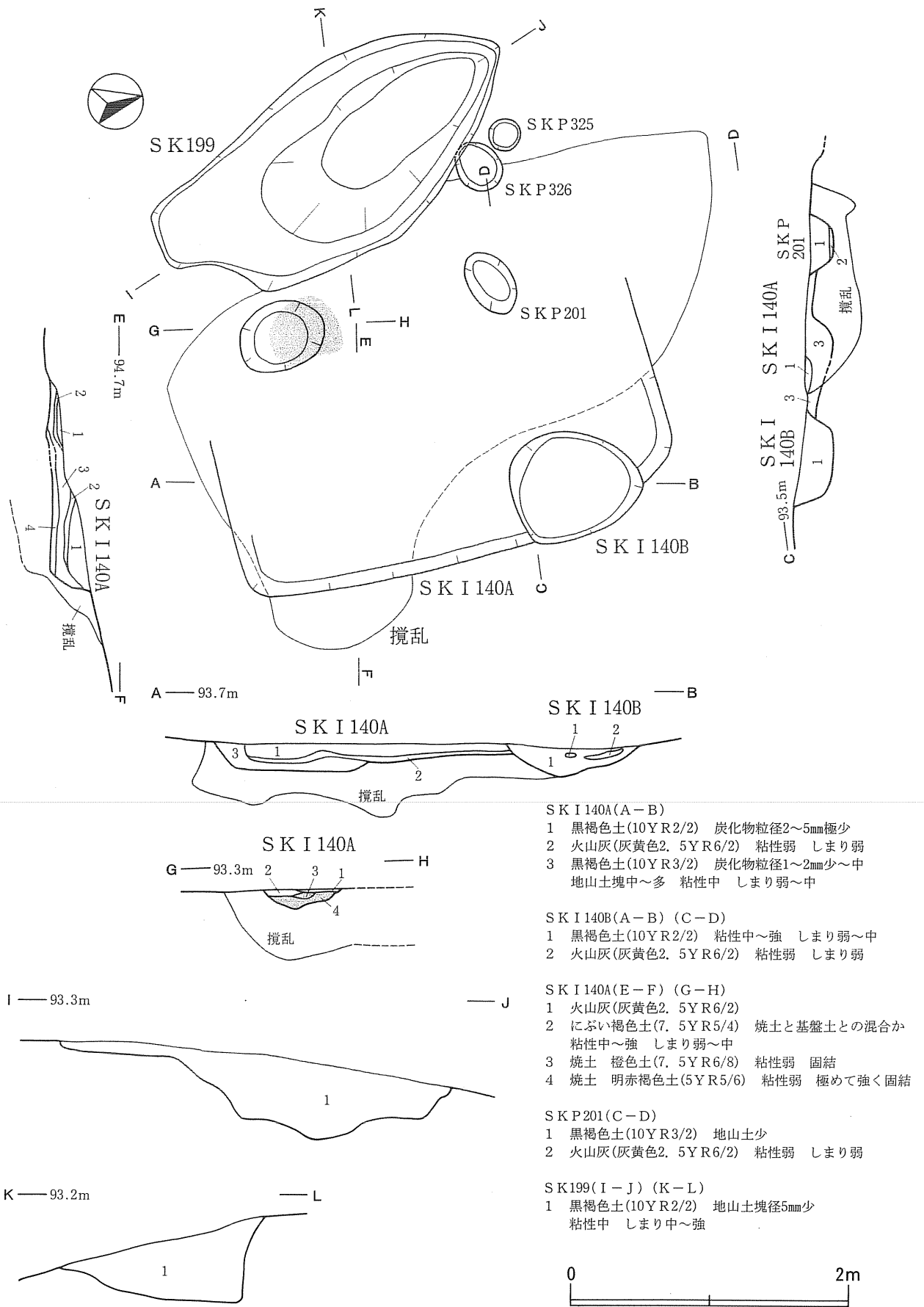


SK I 105

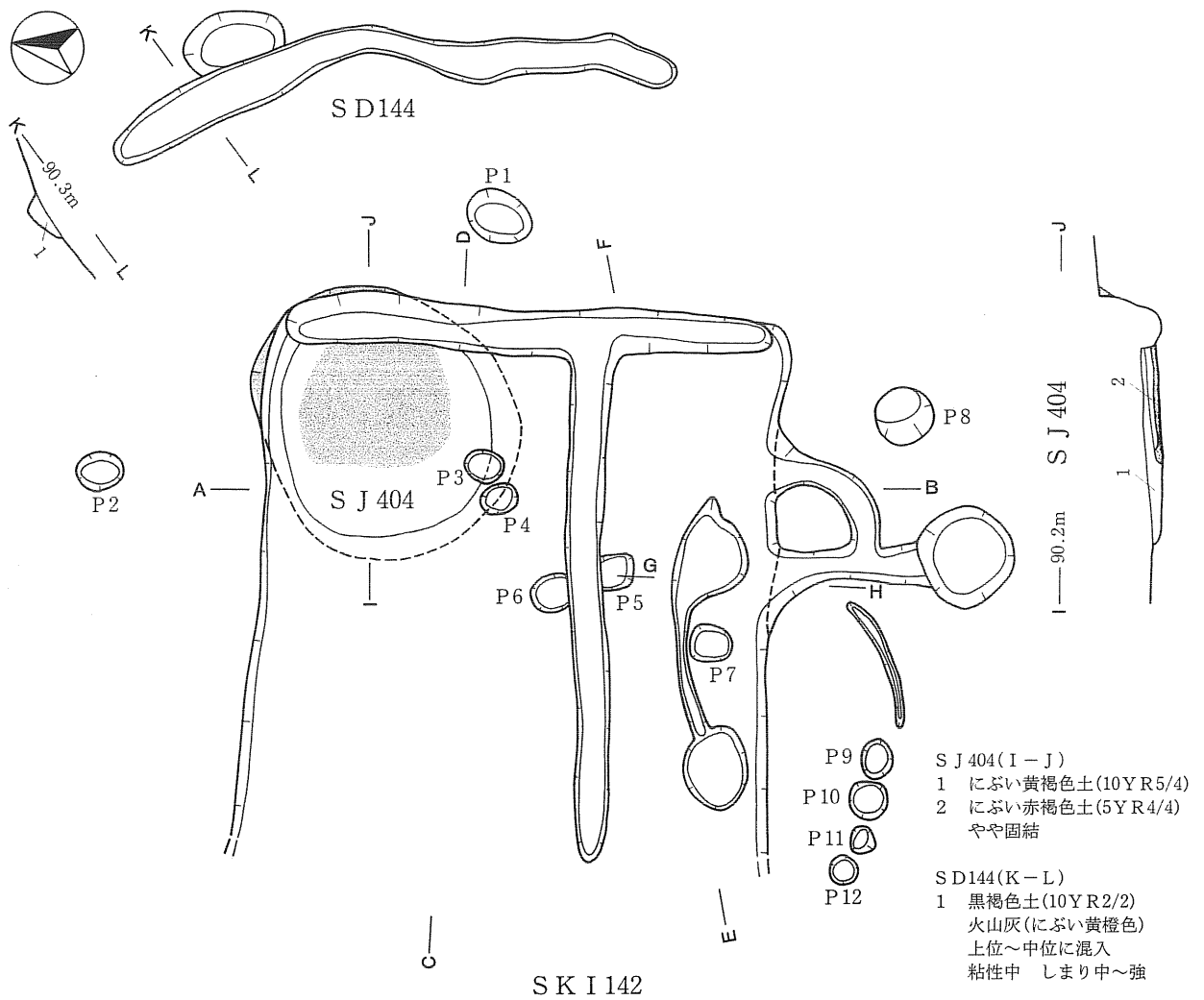
- 1 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物粒少  
地山土塊径1~3mm極少 焼土少 粘性中 しまり中
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物粒少  
地山土粒径1~3mm多



第15図 検出遺構 (7) (SK I 105)



第16図 検出遺構 (8) (SK I 140, SK 199, SK P 201)

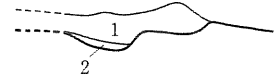
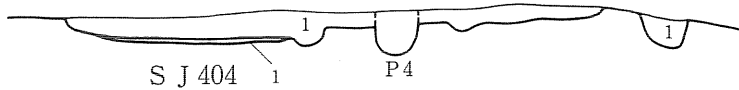


A — 90.2m

— B

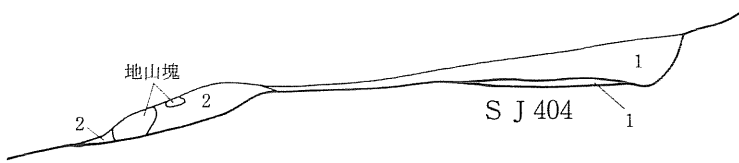
G — 90.2m

— H



C — 90.2m

— D

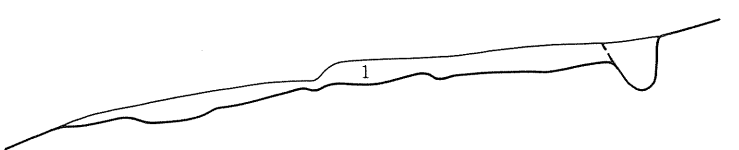


SK I 142(A - B) (C - D) (E - F)

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物粒径3~5mm極少 地山土塊径3~10mm中 粘性中~強 しまり中~強
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径1~3mm極少 粘性中 しまり中

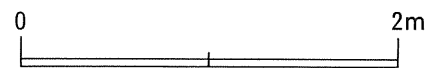
E — 90.2m

— F

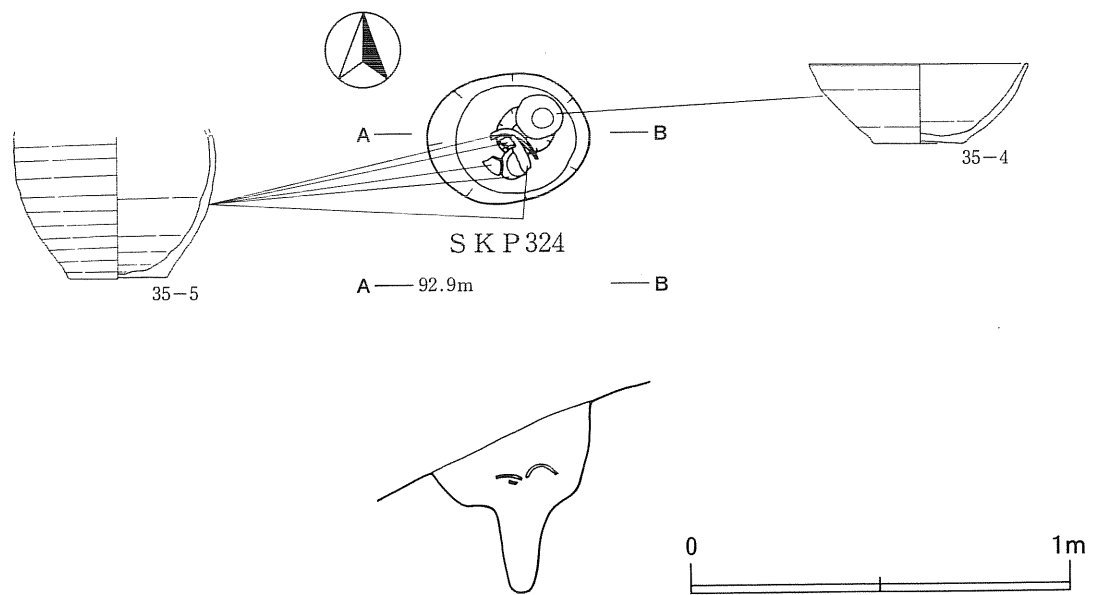
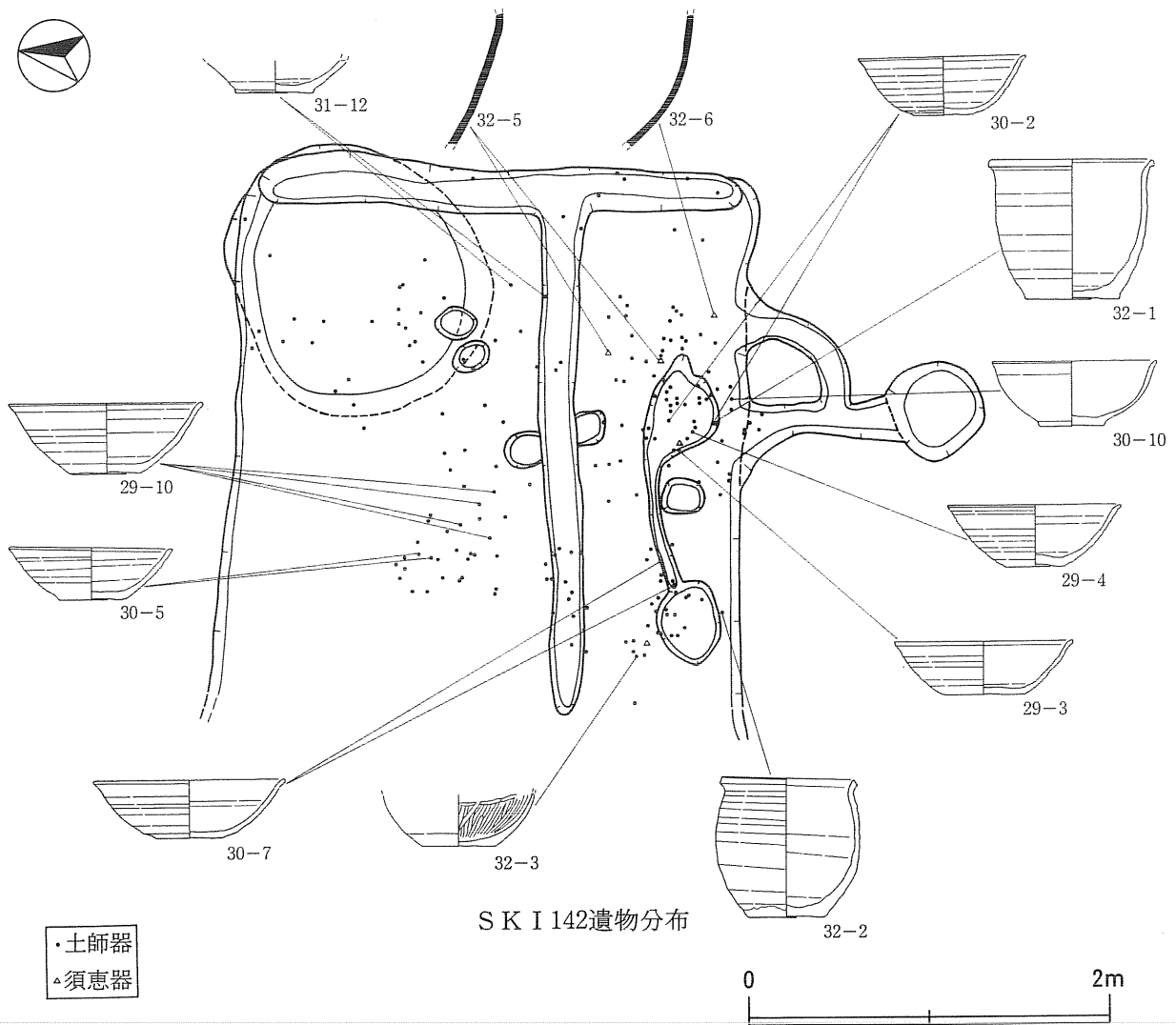


SK I 142(G - H)

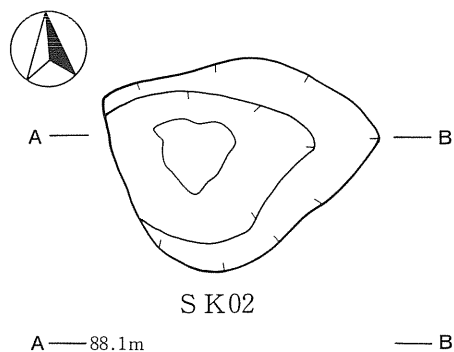
- 1 黒褐色土(10YR3/2) 粘性中 しまり中~強
- 2 焼土 明赤褐色土(5YR5/6) 固結



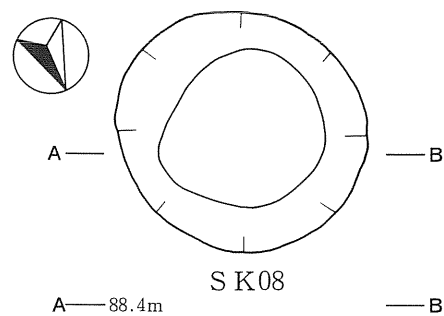
第17図 検出遺構 (9) (SK I 142, S J 404, SD144)



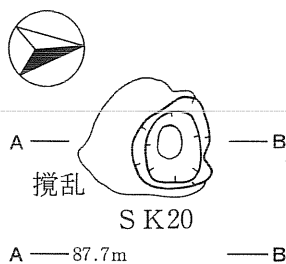
第18図 検出遺構 (10) (SK I 142, SK P 324)



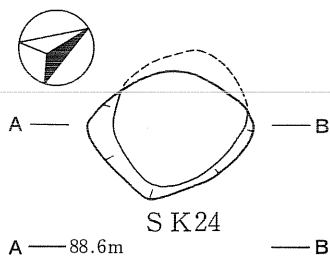
- SK02  
1 黒褐色土(10Y R2/2) 小礫径2~8mm少  
中礫径20mm下位より少~中 粘性中 しまり中~強



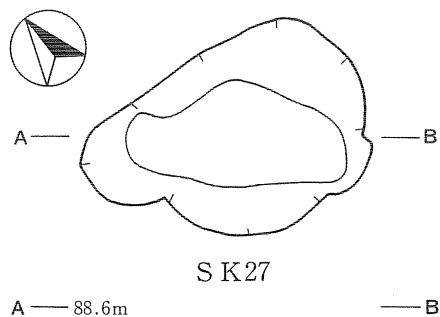
- SK08  
1 黒褐色土(10Y R2/2) 地山土粒径2~5mm少  
粘性中 しまり中  
2 黒褐色土(10Y R2/2) 地山土塊径10~50mm中~多  
粘性中 しまり弱  
3 黒褐色土(10Y R2/2) 粘性中 しまり弱



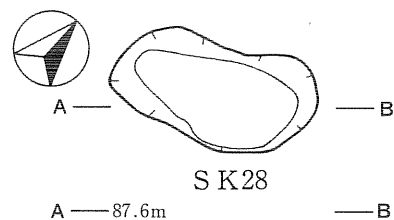
- SK20  
1 黒色土(10Y R2/1) 粘性中 しまり弱~中



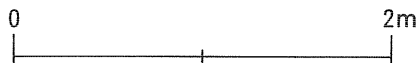
- SK24  
1 黒褐色土(10Y R2/3) 地山土粒径5~50mm多  
粘性中~強 しまり中  
2 黒褐色土(10Y R2/2) 炭化物粒極少  
地山土粒少 粘性中 しまり中



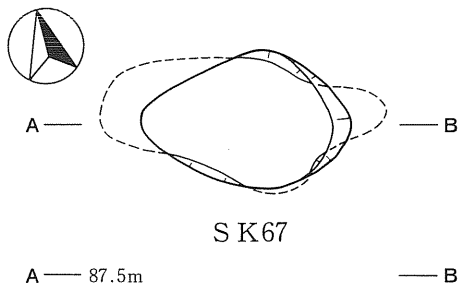
- SK27  
1 褐色土(7.5Y R4/4) 暗赤褐色土(2.5Y R3/6)極少  
小礫径2~3mm極少 粘性強 しまり中  
2 黒色土(10Y R2/1) 小礫径3~5mm少  
粘性中 しまり中~強



- SK28  
1 黒色土(10Y R2/1) 地山土粒極少  
小礫径3~5mm少 粘性中 しまり弱~中  
2 黒褐色土(10Y R2/2) 地山土塊・地山土粒径2~10mm多  
粘性中 しまり中



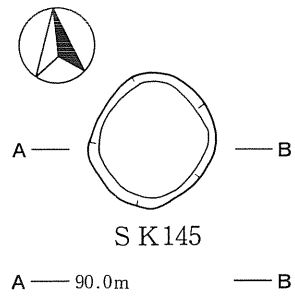
第19図 検出遺構 (11) (SK02・08・20・24・27・28)



SK67

A — 87.5m — B

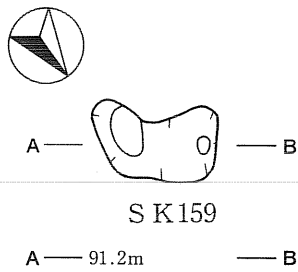
SK67  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径10~20mm中  
粘性中 しまり中



SK145

A — 90.0m — B

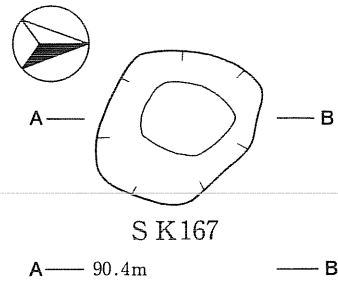
SK145  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒極少  
焼土粒少 粘性強 しまり強  
2 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径3~5mm少  
粘性強 しまり弱



SK159

A — 91.2m — B

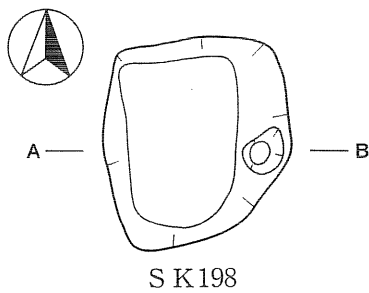
SK159  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径10~30mm多  
小礫径5mm極少 粘性中 しまり強



SK167

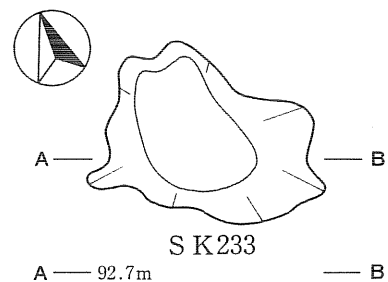
A — 90.4m — B

SK167  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒径1~5mm極少  
粘性強 しまり中  
2 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径3~10mm少  
粘性強 しまり中



SK198

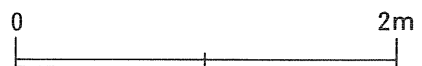
A — 93.0m — B



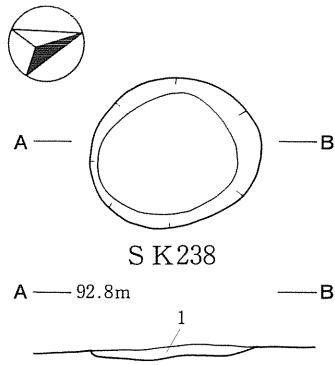
SK233

A — 92.7m — B

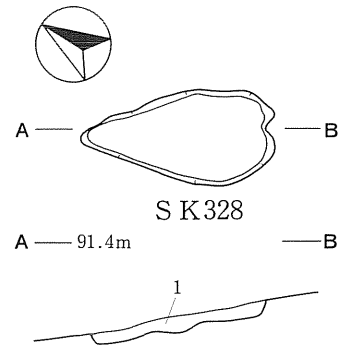
SK233  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒径1~3mm極少  
粘性強 しまり中  
2 黒褐色土(10YR3/2) 上部土師器片あり  
粘性強 しまり中



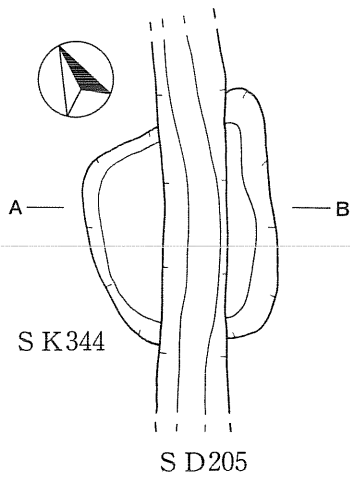
第20図 検出遺構 (12) (SK67・145・159・167・198・233)



SK238  
1 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物粒径1~5mm少  
地山土塊径2~5mm極少 上部土師器あり 粘性強 しまり中

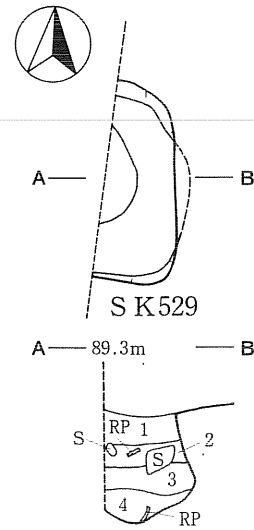


SK328  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊径2~5mm少  
粘性強 しまり中

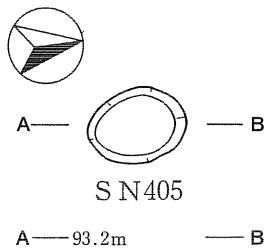


SK344  
1 地山土塊  
2 黒褐色土(10YR2/2) 地山土塊少  
粘性中 しまり中

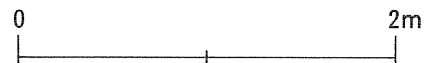
SD205  
1 黒褐色土(10YR3/2)  
粘性中 しまり中  
地山土塊多



SK529  
1 黒褐色土(10YR2/2) 下位に地山土由来の明黄褐色粘質土塊少  
粘性中~強 しまり弱  
2 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物粒径2~10mm少~中 地山土粒少~中  
焼土粒少~中 明黄褐色粘土塊中  
3 暗褐色土(10YR3/3) 粘性強 しまり中  
4 黒色土(10YR2/1) 明黄褐色粘土塊径20~30mm中~多  
粘性強 しまり弱

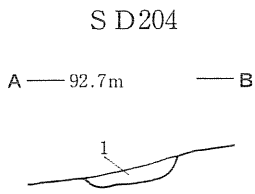
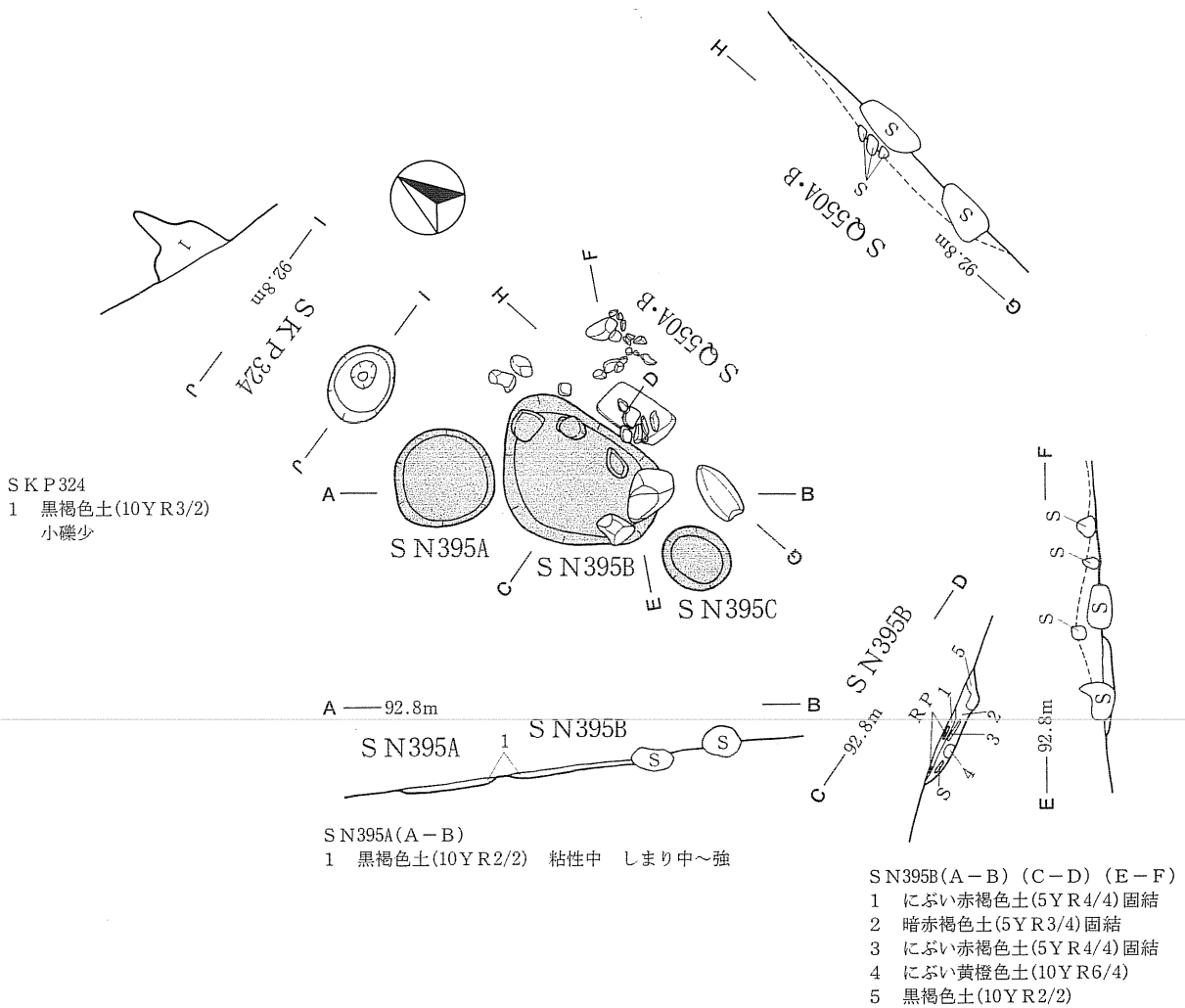


SN405  
1 にぶい赤褐色土(5YR4/4) 固結  
2 黒褐色土(10YR3/2)  
3 黒褐色土(10YR2/2)



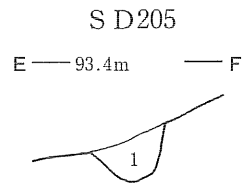
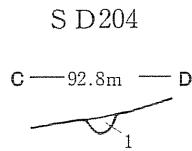
第21図 検出遺構 (13) (SK238・328・344・529, SD205, SN405)



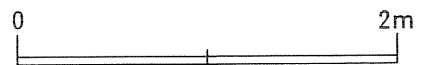


SD204(第8図A-B)  
1 黒褐色土(10YR2/3) 地山土粒径1~3mm極少  
粘性強 しまり中

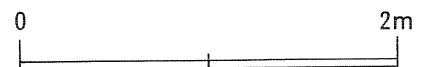
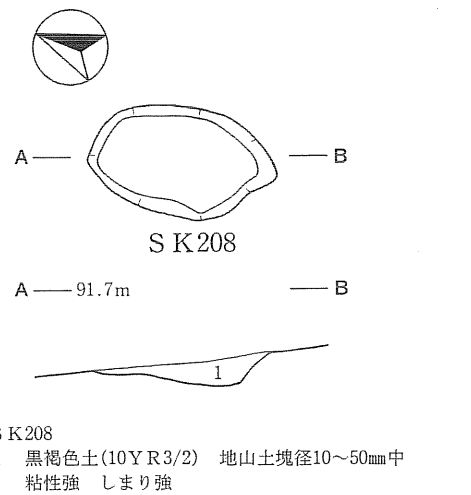
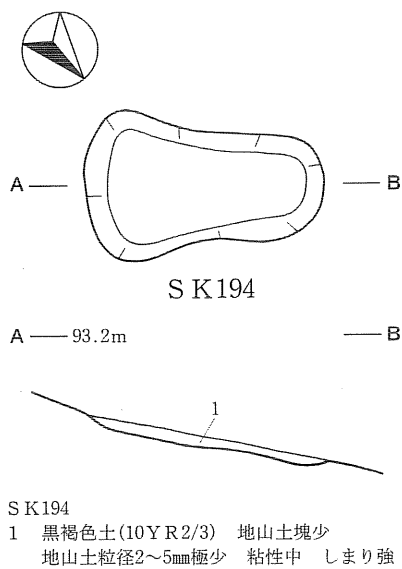
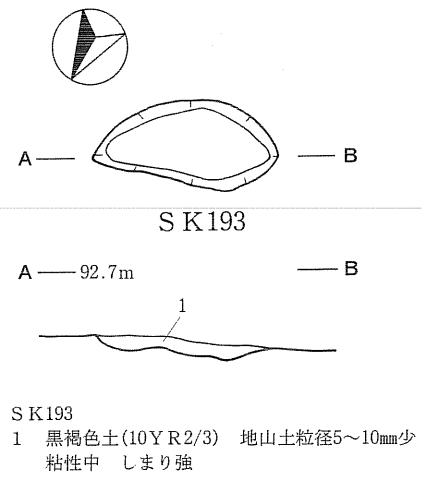
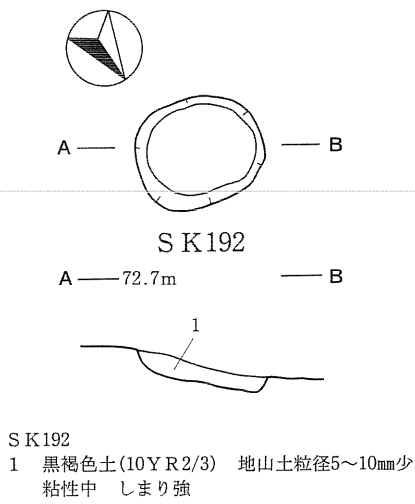
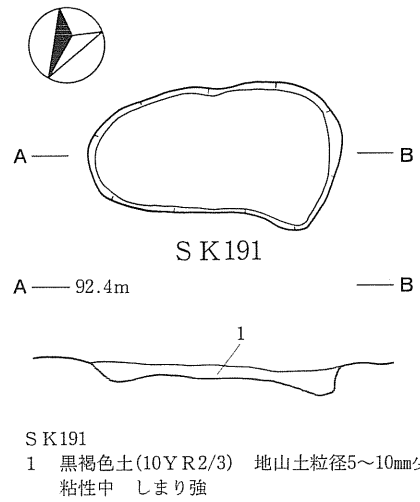
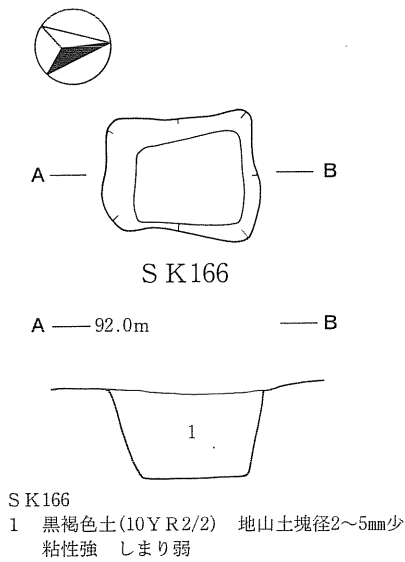
SD204(第8図C-D)  
1 黒褐色土(10YR2/2) 地山土粒径1~3mm極少  
粘性強 しまり中



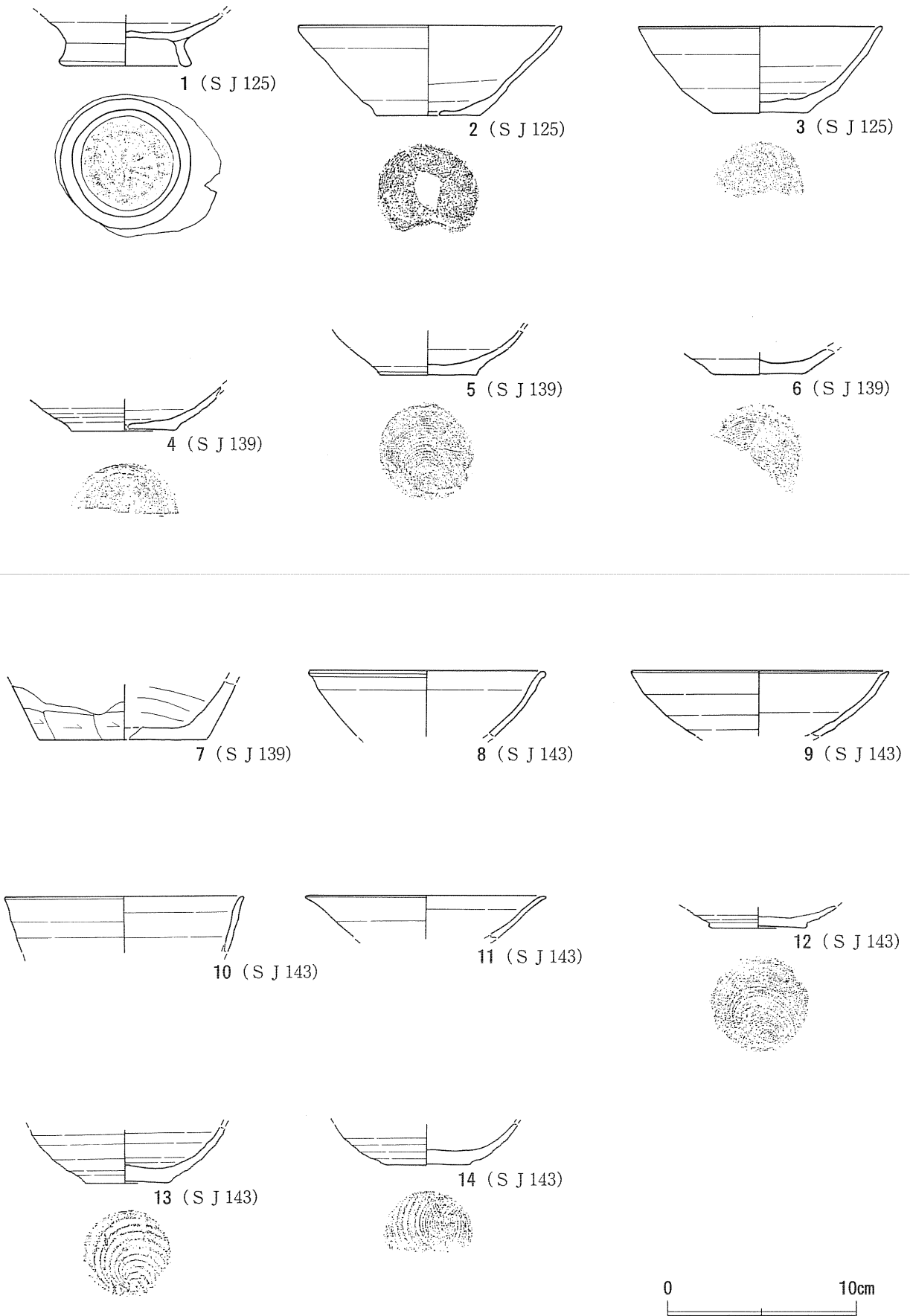
SD205(第8図E-F)  
1 黒褐色土(10YR3/2) 粘性中 しまり中



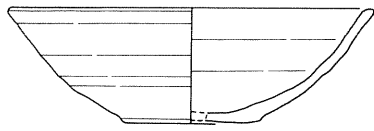
第22図 検出遺構 (14) (SN395A・B・C, SQ550A・B, SKP324, SD204・205)



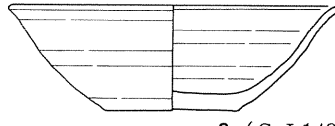
第23図 検出遺構 (15) (S K166・191・192・193・194・208)



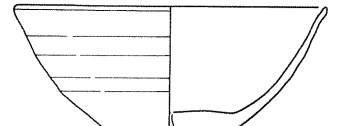
第24図 遺構内出土遺物(1) (S J 125・139・143)



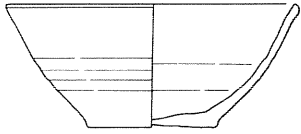
1 (S J 143)



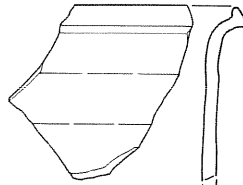
2 (S J 143)



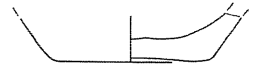
3 (S J 143)



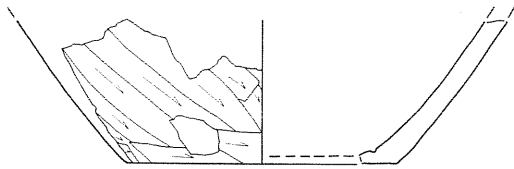
4 (S J 143)



5 (S J 143)



6 (S J 143)



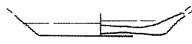
7 (S J 143)



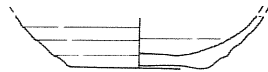
8 (S J 143)



9 (S J 143)



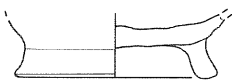
10 (S J 240)



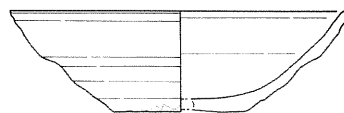
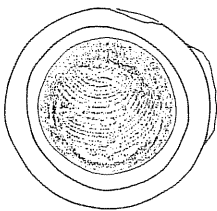
11 (S J 240)



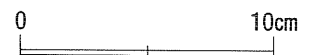
12 (S J 240)



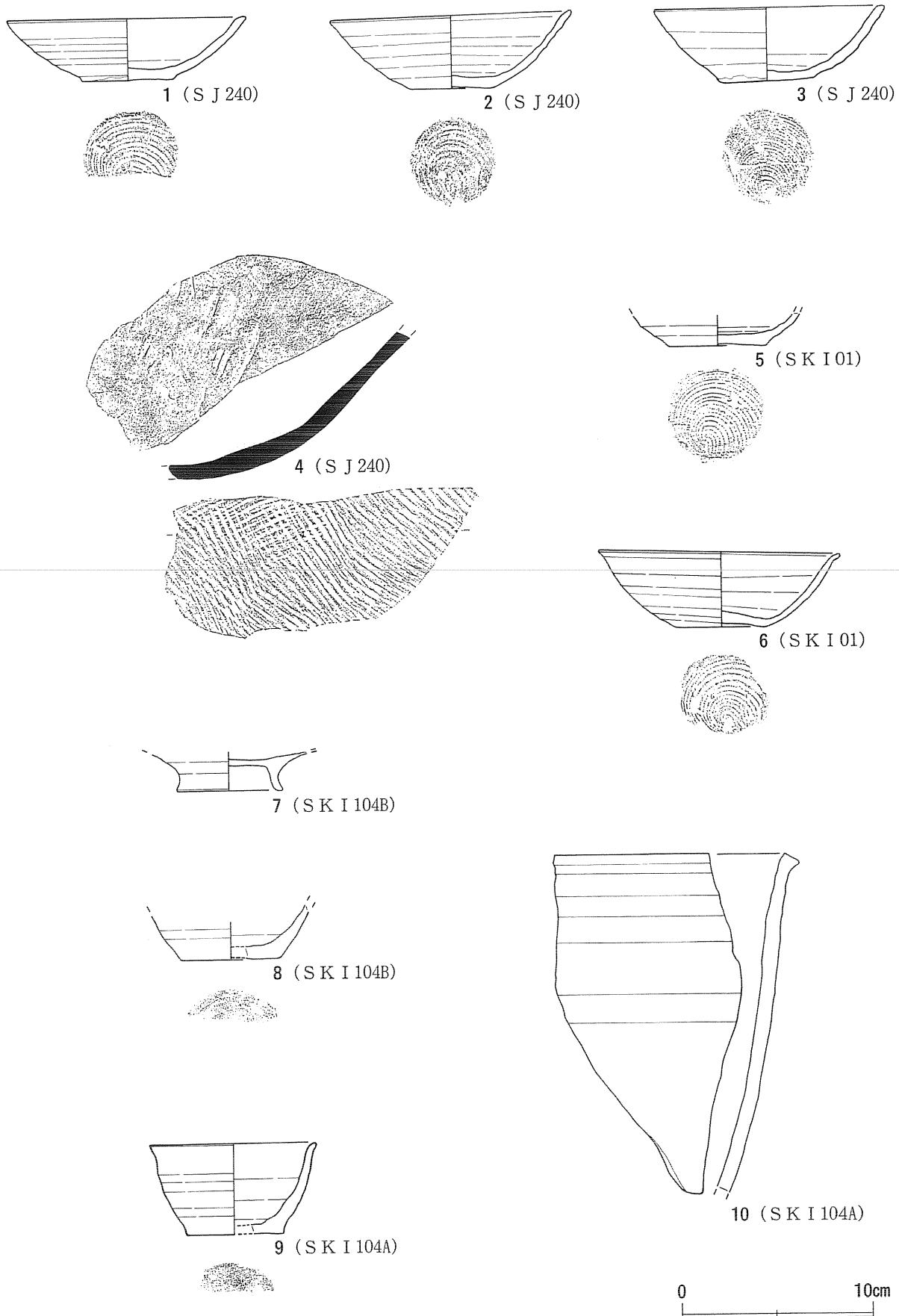
13 (S J 240)



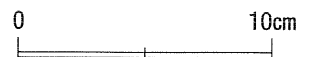
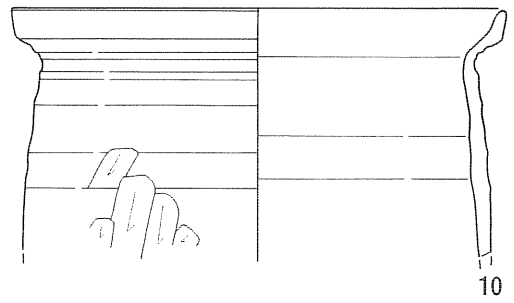
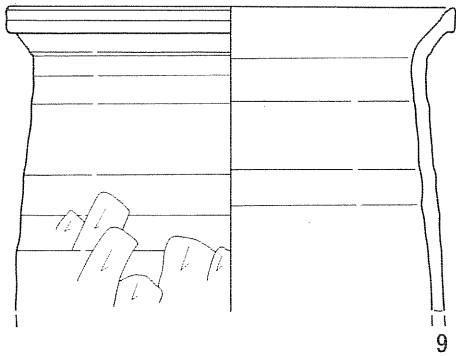
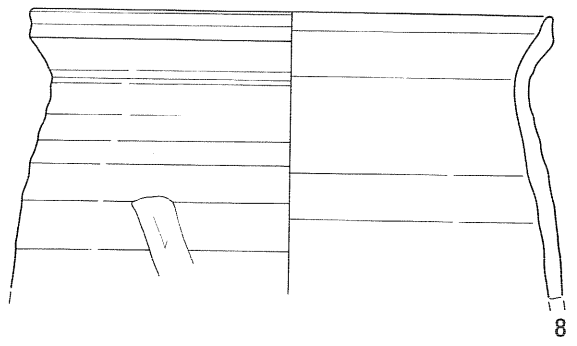
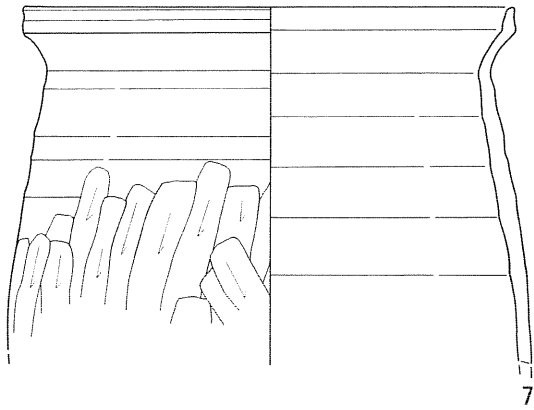
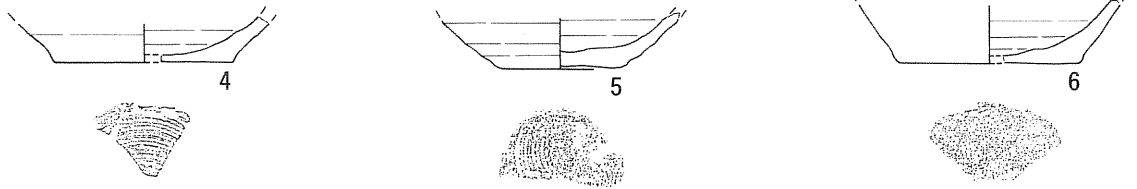
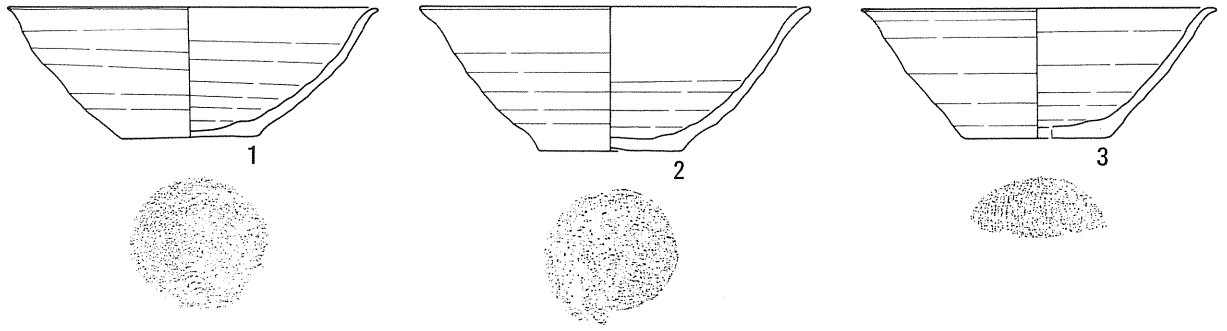
14 (S J 240)



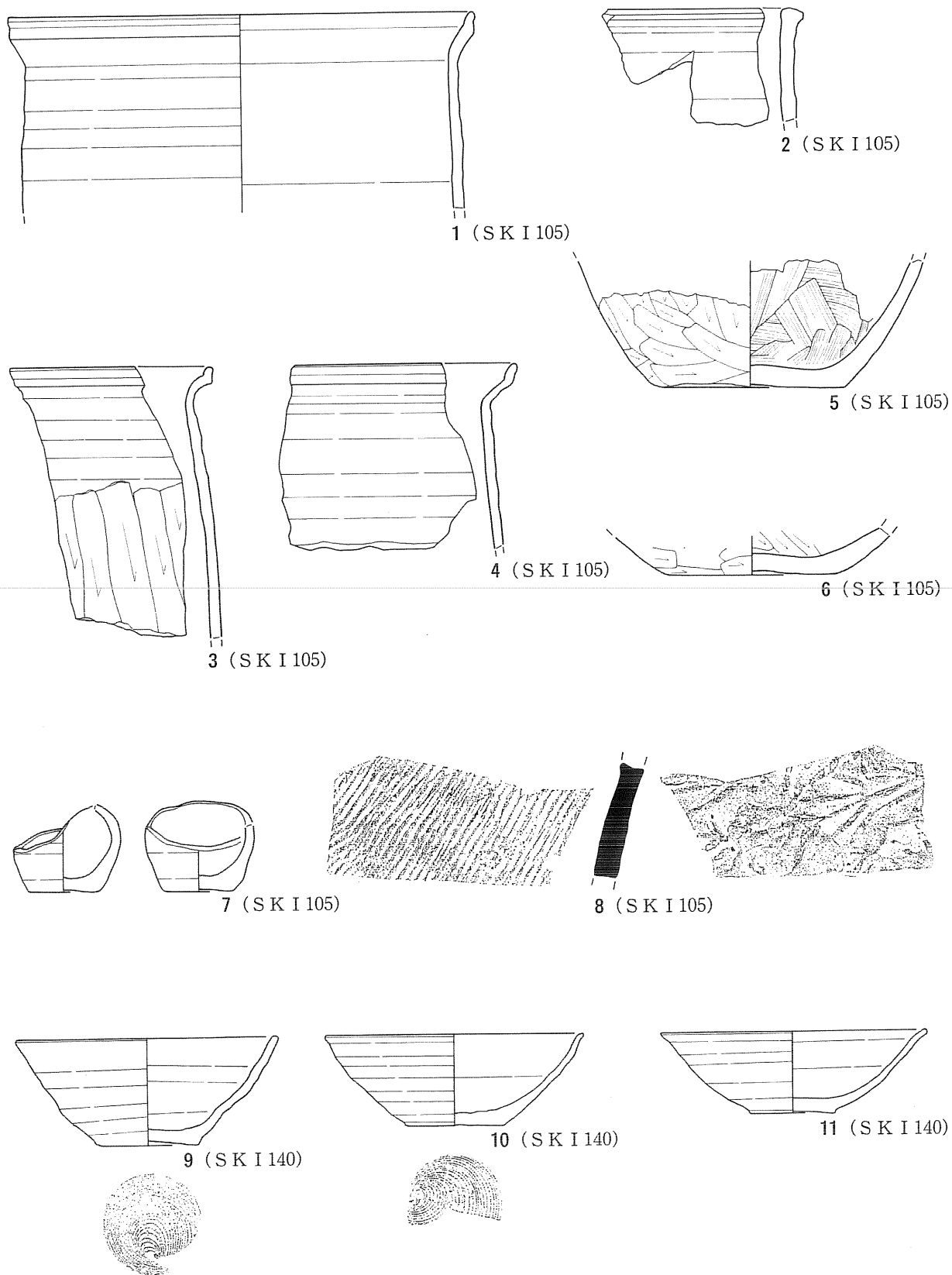
第25図 遺構内出土遺物 (2) (S J 143・240)



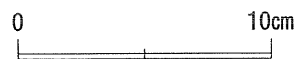
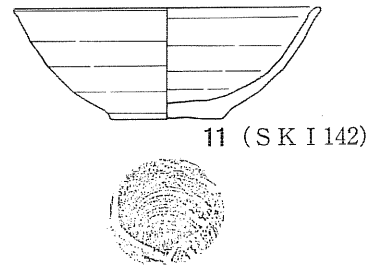
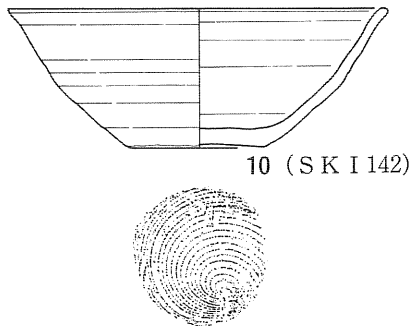
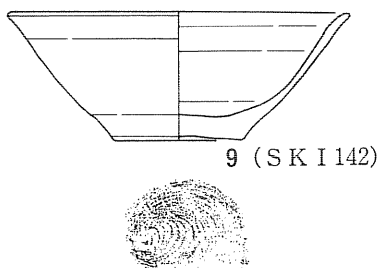
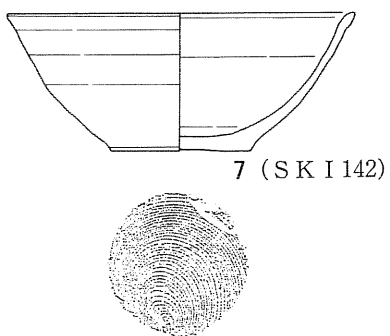
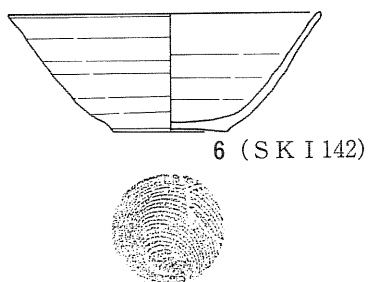
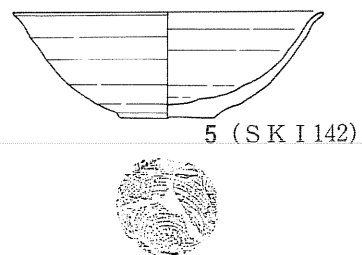
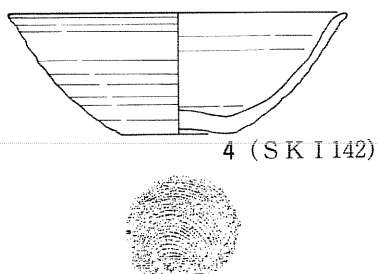
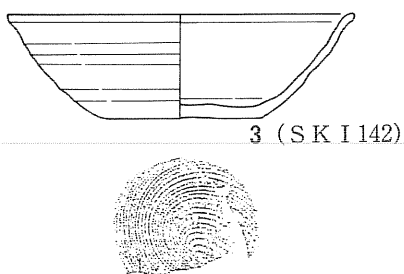
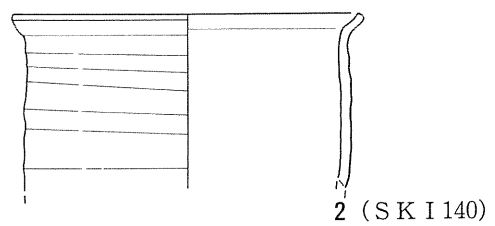
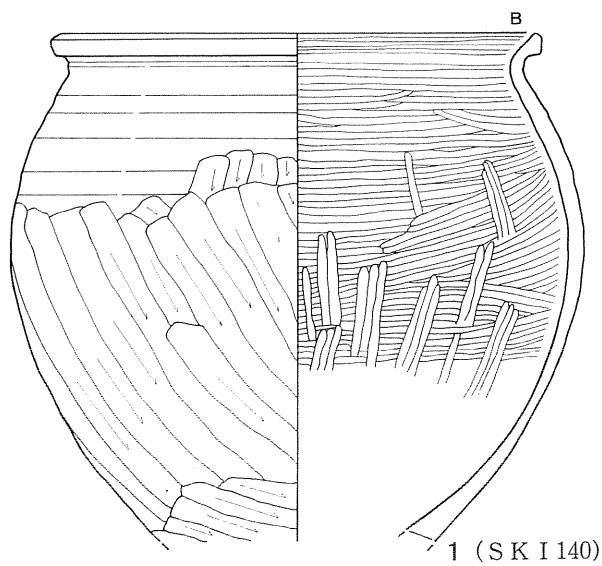
第26図 遺構内出土遺物 (3) (S J 240, SK I 01・104)



第27図 遺構内出土遺物 (4) (SK I 105)

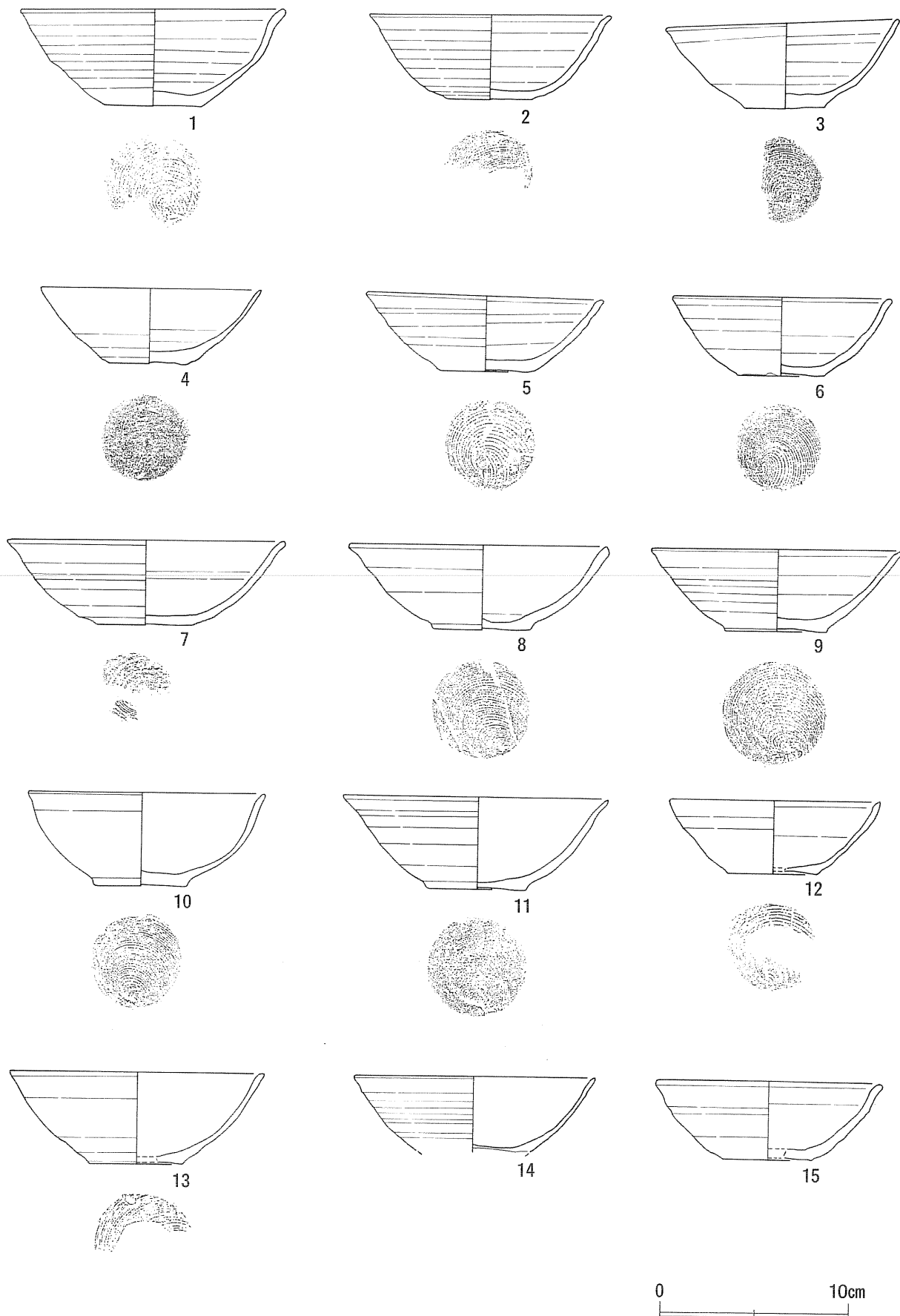


第28図 遺構内出土遺物 (5) (SK I 105・140)

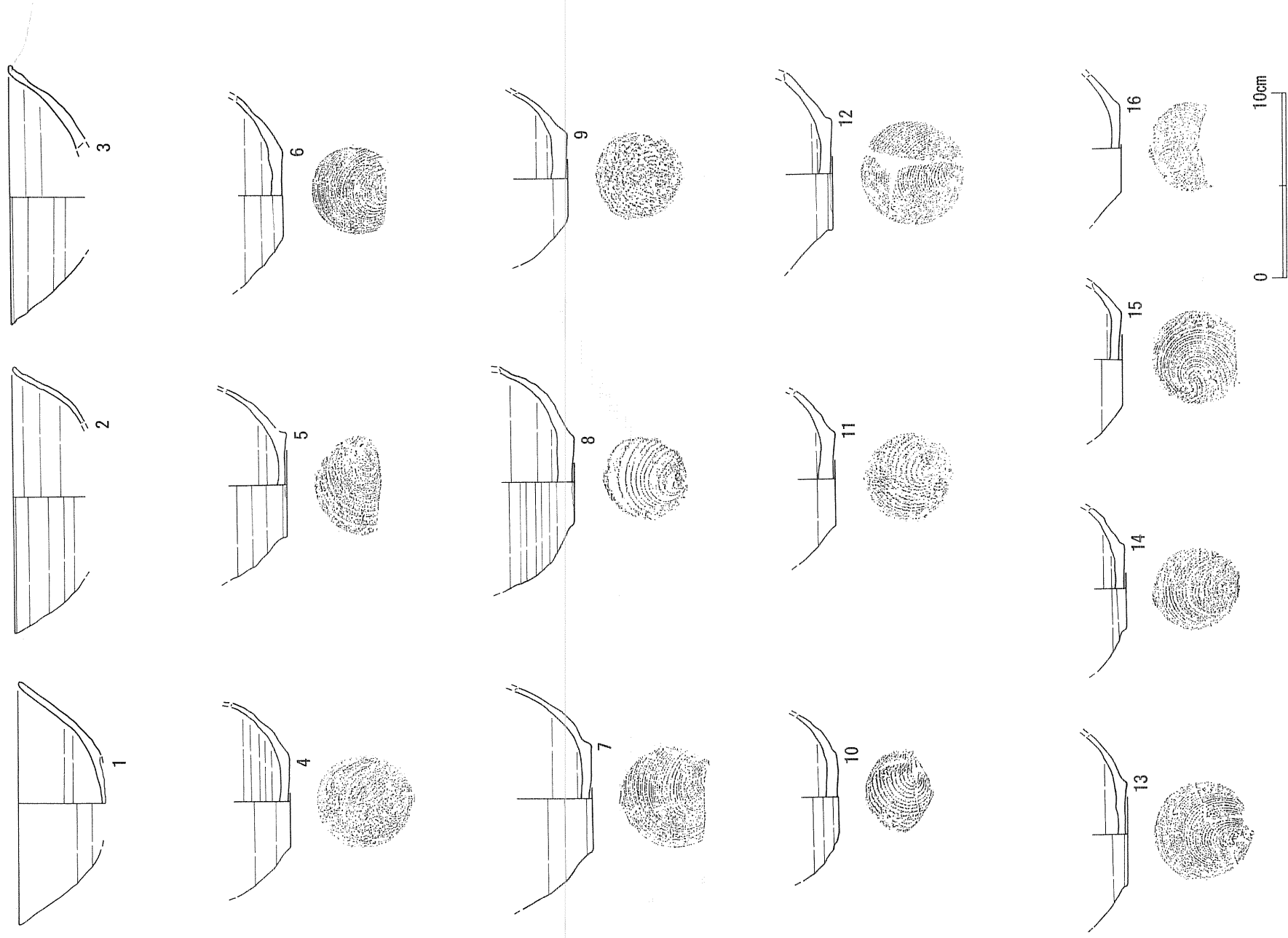


第29圖 遺構内出土遺物 (6) (SKI 140・142)



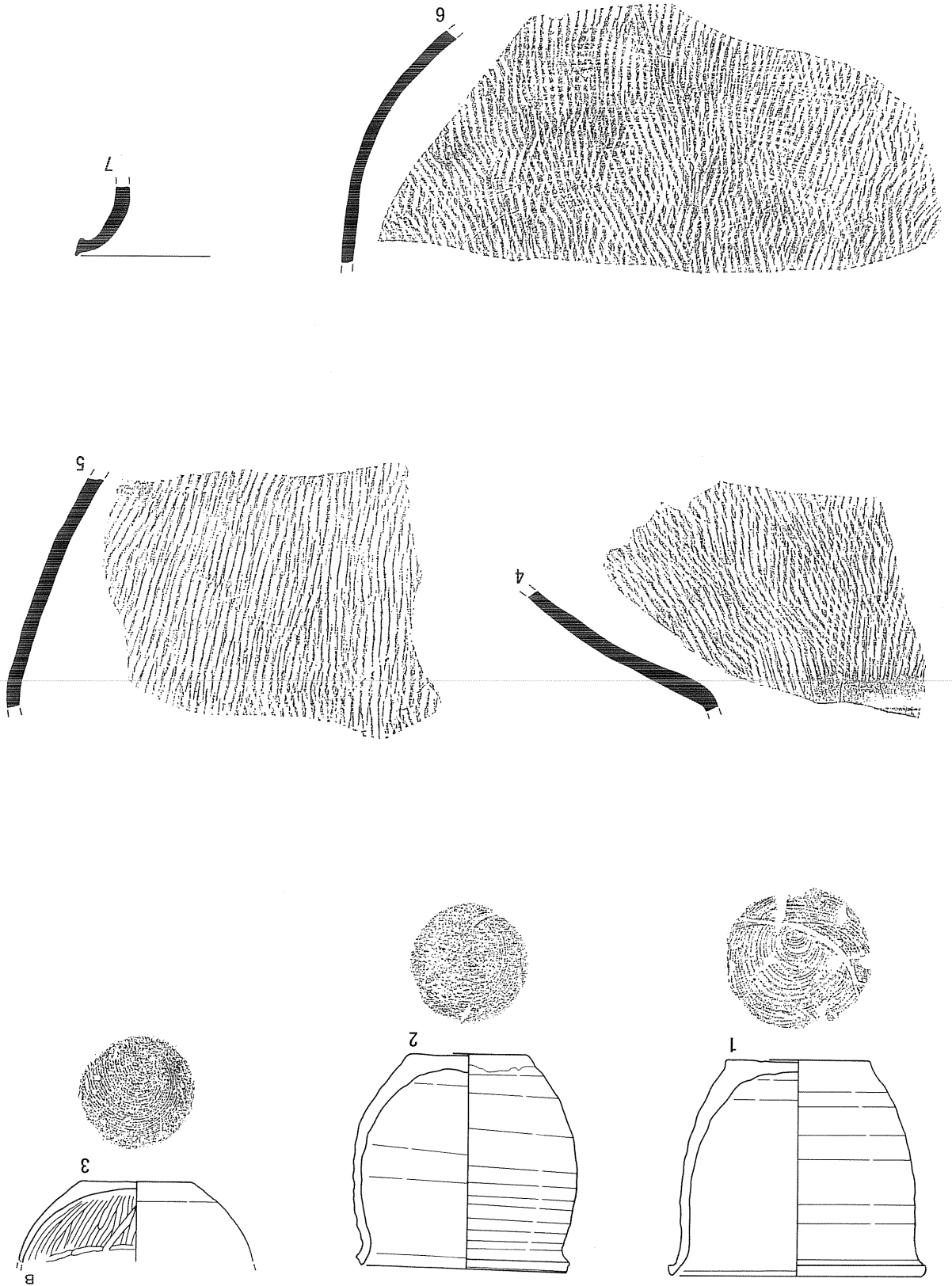


第30図 遺構内出土遺物(7)(SK I 142)



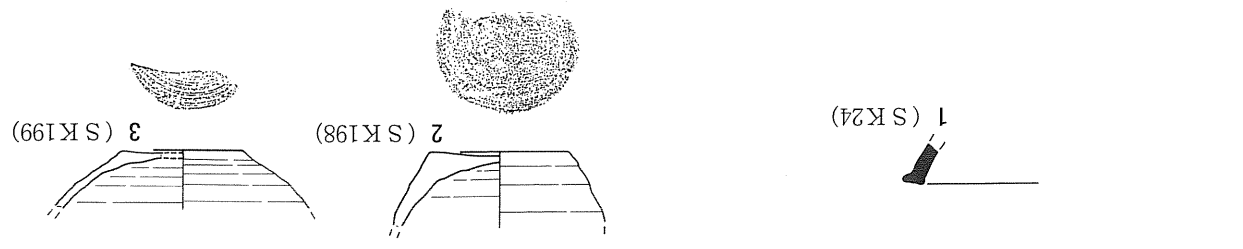
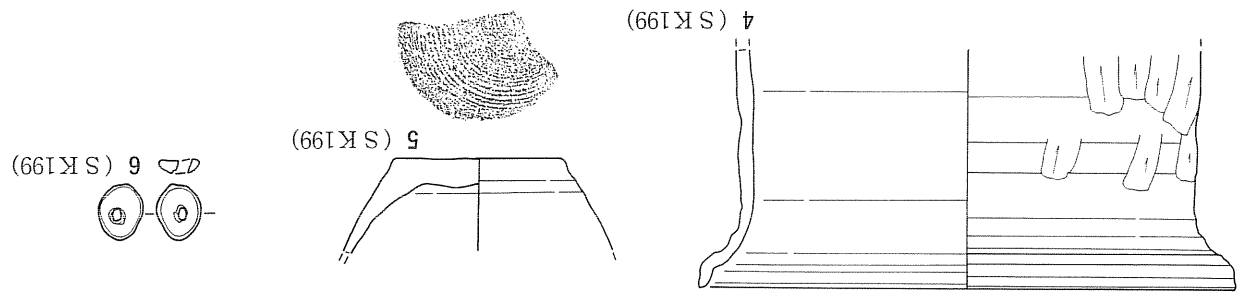
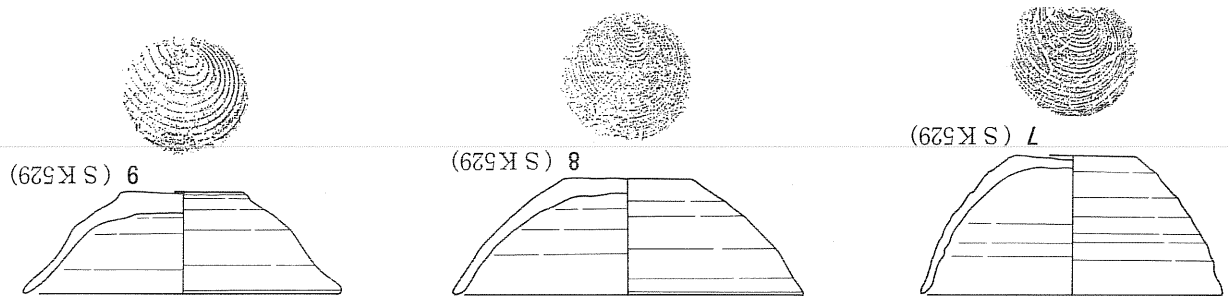
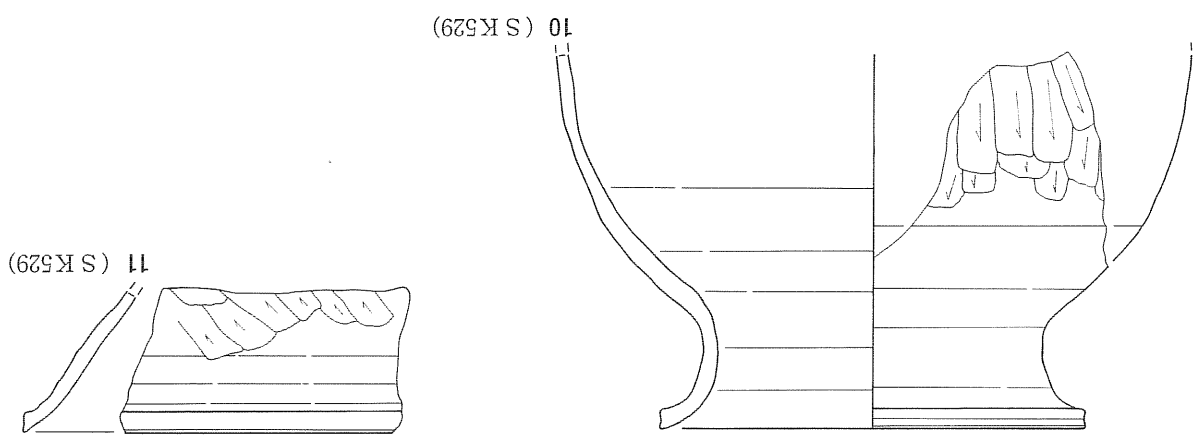
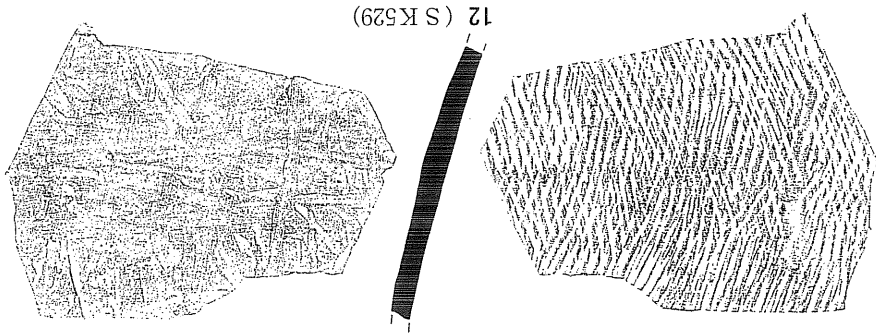
第31图 遺構内出土遺物(8) (SK I 142)

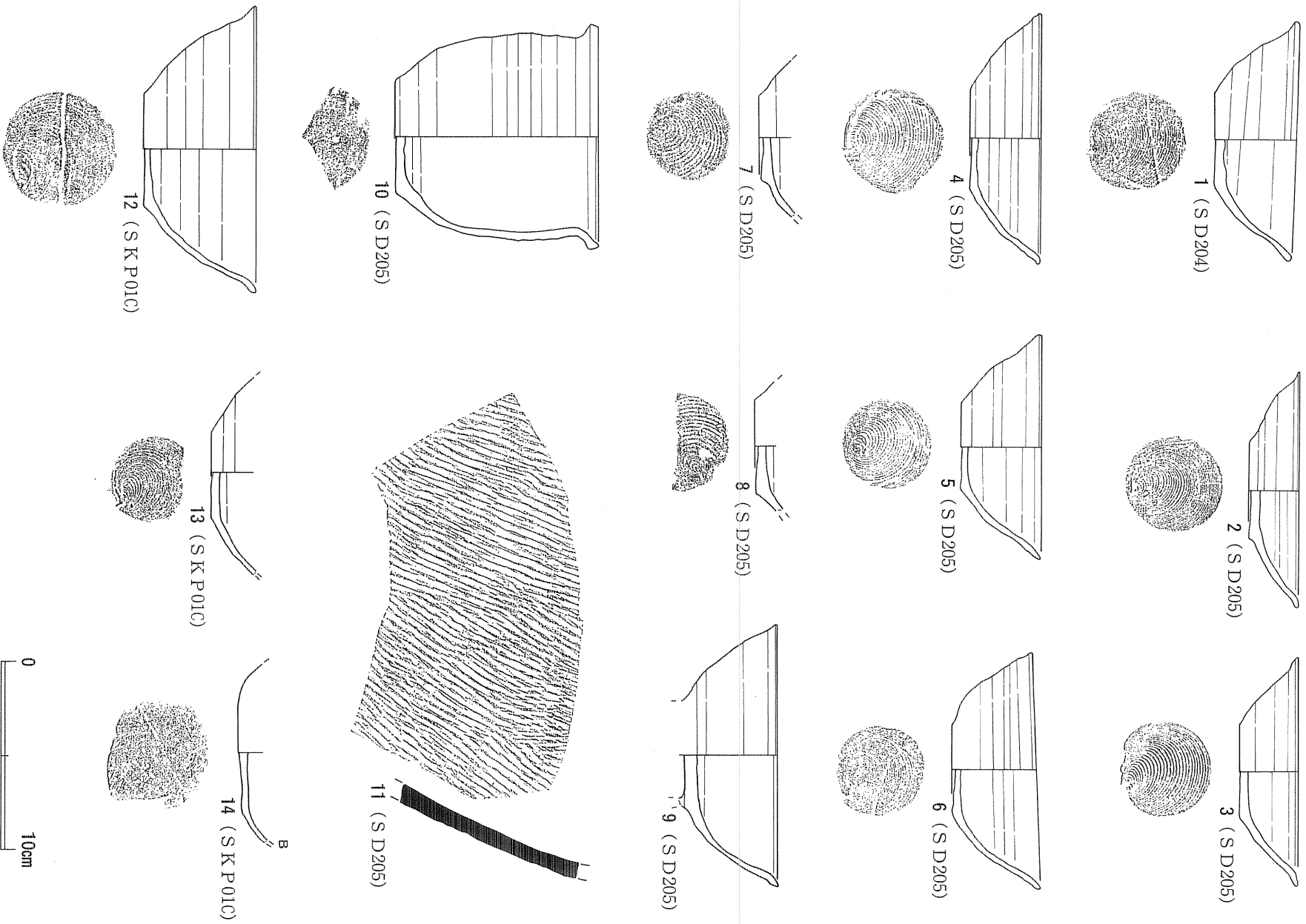
第32図 遺構内出土遺物 (9) (SK I 142)



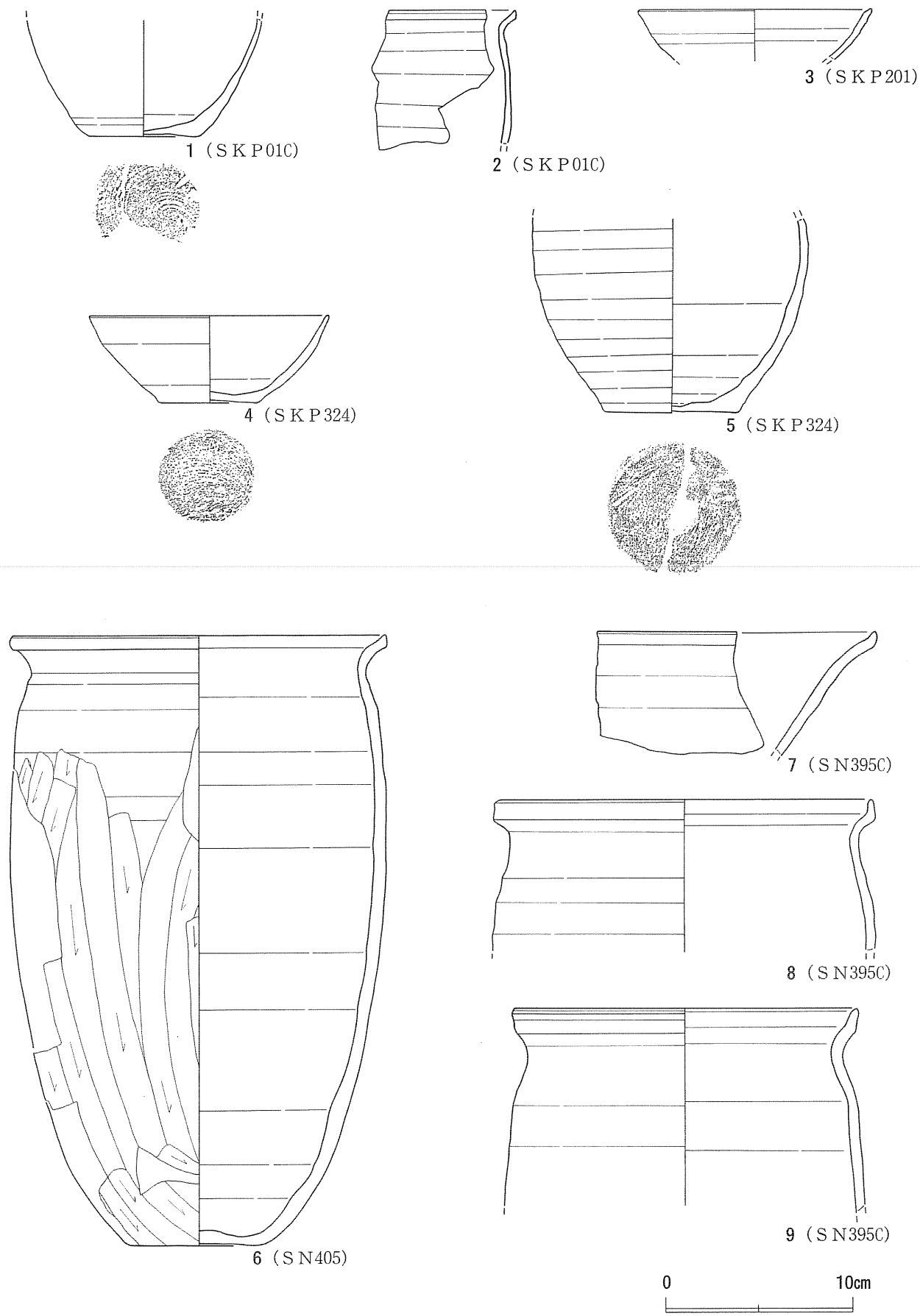
第33圖 遺構内出土遺物 (10) (S K 24 · 198 · 199 · 529)

0 10cm

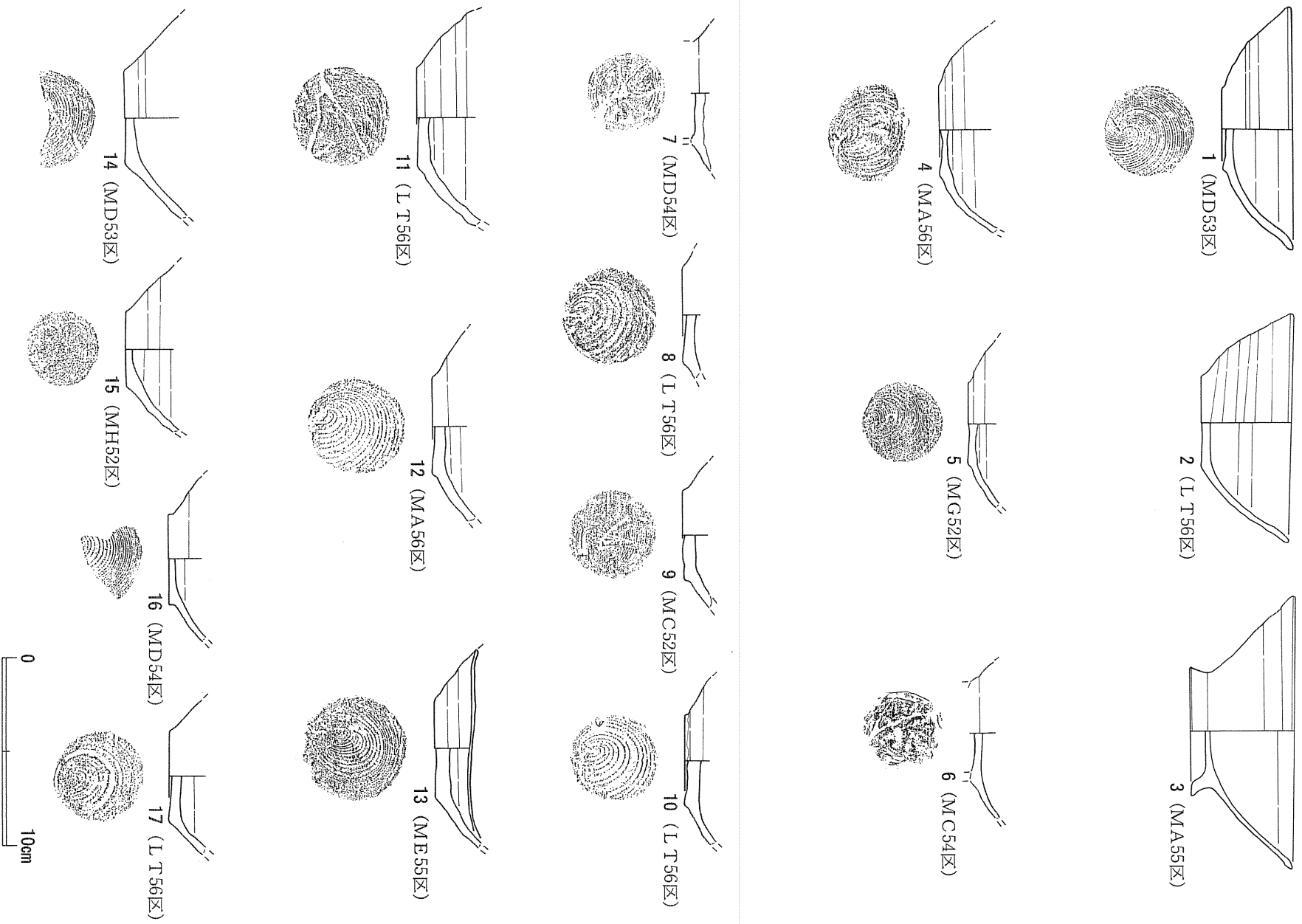




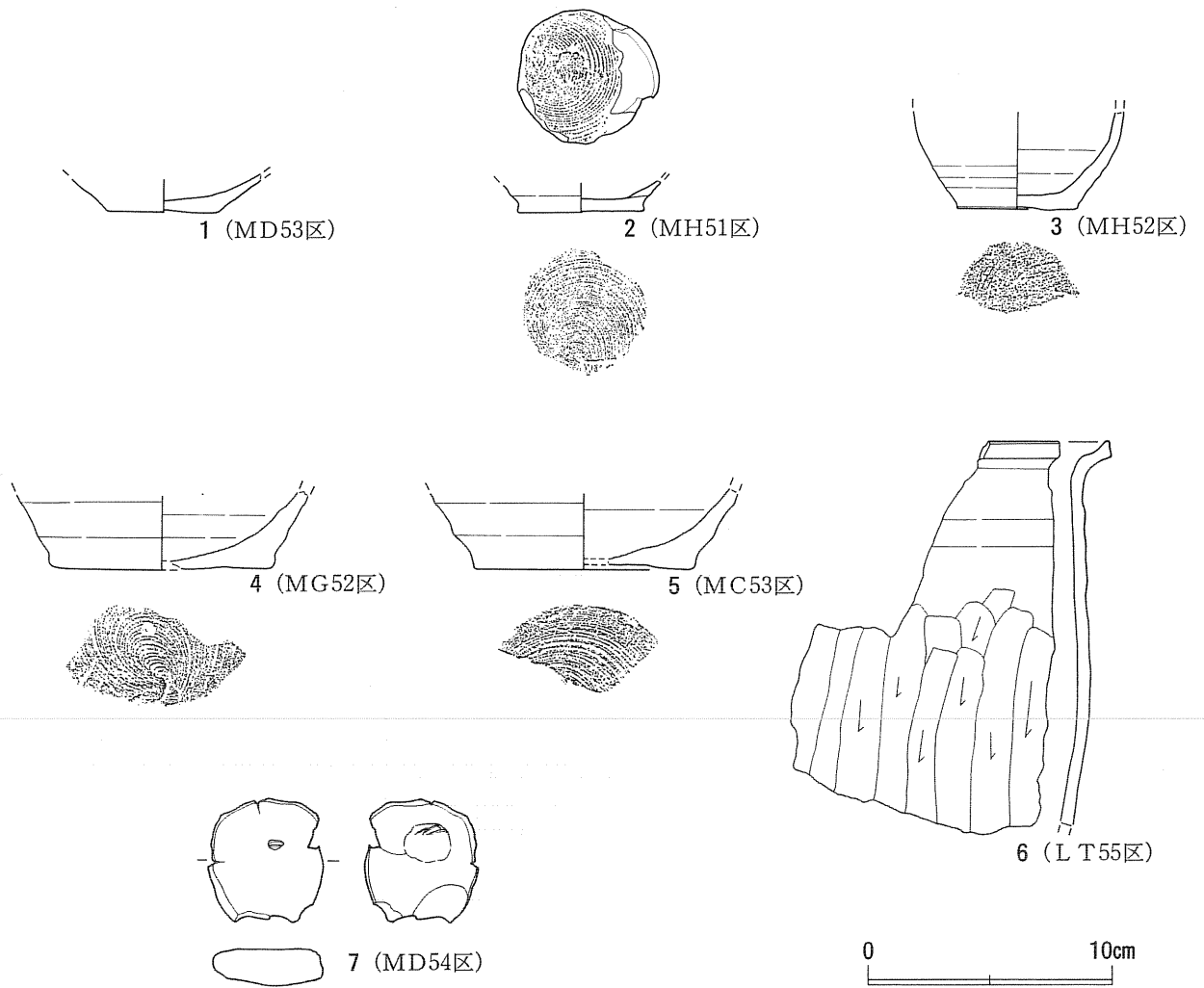
第34図 遺構内出土遺物 (11) (S D 204・205, S K P 01C)



第35図 遺構内出土遺物 (12) (SKP01C・201・324, SN395C・405)



第36図 遺構外出土遺物 (1)



第37図 遺構外出土遺物 (2)



第4章 調査の記録

遺構番号	所在区	検出面	径または辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
SKP01B	MG53	V	58×98	不整楕円形	12	88.2	断面図参照	
SKP01C	MF54	V	29×40	隅丸方形	52	87.8	断面図参照	ロクロビット 土師器・内黒(第34図12・13、第35図1・2)出土
SKP01D	MG53	V	20×27	楕円形	17	88.2	断面図参照	
SKP03	MF54	V	19×23	不整楕円形	8	88.2	黒褐色土単一層	
SKP05	MG53	V	16×26	楕円形	14	88.1	黒褐色土単一層	
SKP06	MG53	V	21×27	楕円形	17	88.0	黒褐色土単一層	
SKP07	MG53	V	19×27	楕円形	16	88.0	黒褐色土単一層	
SKP09	MH53	V	21×49	不整楕円形	25	87.7	黒褐色土単一層	
SKP10	MG53	V	18×29	楕円形	6	88.3	暗褐色土単一層	
SKP11	MH53	V	20×29	楕円形	9	87.8	黒褐色土単一層	
SKP12	MH53	V	21×23	不整形	8	87.8	暗褐色土単一層	
SKP13	MH53	V	17×21	楕円形	32	87.5	黒褐色土単一層	
SKP16	M I 53	V	16×16	不整円形	25	87.2	不明	
SKP18	M I 53	V	23×29	不整楕円形	27	87.3	黒褐色土単一層	
SKP25	MG51	V	39×55	不整楕円形	11	88.1	褐色土単一層	
SKP26	MG51	V	24×30	楕円形	22	88.0	黒褐色土単一層	
SKP29	MG52	V	29×32	不整円形	12	87.8	黒褐色土単一層	
SKP30	MH53	V	18×20	楕円形	14	87.8	黒褐色土単一層	
SKP31A	MH53	V	26×35	不整楕円形	10	87.8	黒褐色土単一層	
SKP31B	MH53	V	19×28	不整楕円形	7	87.9	黒褐色土単一層	
SKP32	MG53	V	19×20	円形	8	88.2	黒褐色土単一層	
SKP33	MH53	V	30×33	不整楕円形	12	87.8	黒褐色土単一層	
SKP34	MG52	V	22×24	楕円形	19	87.7	不明	
SKP35	MG52	V	24×27	楕円形	9	87.8	黒褐色土単一層	
SKP36	MG54	V	35×61	不整楕円形	6	88.0	黒褐色土単一層	
SKP37	MH54	V	19×34	楕円形	11	87.9	黒褐色土単一層	
SKP38	MG52	V	16×33	不整楕円形	16	87.9	暗褐色土単一層	
SKP40	MG51	V	15×24	不整楕円形	9	88.3	黒褐色土単一層	
SKP42	MH53	V	13×19	楕円形	17	87.7	黒褐色土単一層	
SKP43	MH52	V	12×16	楕円形	10	87.4	黒褐色土単一層	
SKP44	MG51	V	23×25	不整円形	13	88.4	黒褐色土単一層	
SKP45	MH50	V	46×66	不整楕円形	13	88.0	黒褐色土単一層	
SKP46	MH50	V	27×51	不整楕円形	12	88.1	暗褐色土単一層	
SKP47	MH50	V	18×20	楕円形	12	87.8	黒褐色土単一層	SKP48と重複
SKP48	MH50	V	19×37	楕円形	12	87.8	黒褐色土単一層	SKP47と重複
SKP49	MH50	V	14×21	楕円形	6	87.9	暗褐色土単一層	
SKP50	MH51	V	25×33	楕円形	10	87.8	黒褐色土単一層	
SKP51	MH51	V	14×28	不整楕円形	4	87.8	黒褐色土単一層	
SKP52	M I 51	V	09×17	楕円形	13	87.5	黒褐色土単一層	
SKP53	M I 51	V	13×18	楕円形	7	87.5	黒褐色土単一層	
SKP54	M I 51	V	24×38	不整楕円形	12	87.5	黒褐色土単一層	
SKP55	M I 51	V	27×43	不整楕円形	9	87.3	黒褐色土単一層	
SKP57	MH52	V	18×21	楕円形	13	87.7	黒褐色土単一層	
SKP58	MH52	V	25×25	円形	8	87.6	黒褐色土単一層	土師器坏・甕片出土
SKP59	MH52	V	22×23	不整円形	5	87.6	黒褐色土単一層	
SKP60	MH52	V	14×20	楕円形	6	87.5	黒褐色土単一層	
SKP61	MH52	V	15×29	楕円形	10	87.4	黒褐色土単一層	
SKP62	MH52	V	22×32	不整楕円形	19	87.5	黒褐色土単一層	
SKP63	MH52	V	18×21	楕円形	15	87.7	不明	
SKP64	MH52	V	24×33	不整楕円形	16	87.8	不明	
SKP65	M I 51	V	35×40	楕円形	13	87.6	黒褐色土単一層	
SKP66	M I 50	V	30×35	不整楕円形	22	87.5	黒褐色土単一層	
SKP68	MG54	V	17×19	不整円形	20	88.1	黒褐色土単一層	
SKP69	MH52	V	22×27	不整楕円形	25	87.4	黒褐色土単一層	
SKP70	MH51	V	14×26	楕円形	17	87.6	黒褐色土単一層	
SKP71	MH51	V	59×59	不整円形	21	87.8	黒褐色土単一層	
SKP72	MG50	V	27×28	円形	9	88.3	黒褐色土単一層	
SKP73	MH52	V	19×23	楕円形	7	87.4	黒褐色土単一層	
SKP82	L T 48	V	18×24	楕円形	4	94.2	黒褐色土単一層	
SKP83	L T 49	V	34×46	不整形	18	94.1	暗褐色土単一層	
SKP84	L T 49	V	15×16	円形	24	93.9	黒褐色土単一層	
SKP85	L T 49	V	13×16	楕円形	24	93.9	黒褐色土単一層	
SKP86	L T 48	V	23×35	不整楕円形	12	94.1	黒褐色土単一層	
SKP87	L T 48	V	27×28	円形	20	94.1	暗褐色土単一層	

第2表 柱穴様ピット観察表(1)

遺構番号	所在区	検出面	径または辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
SKP88	LT48	V	18×18	円形	12	94.2	黒褐色土単一層	
SKP89	LT48	V	18×18	円形	12	94.2	黒褐色土単一層	
SKP90	LT48	V	25×27	隅丸方形	28	93.8	黒褐色土単一層	
SKP91	LT48	V	25×30	不整形	31	93.7	黒褐色土単一層	
SKP93	MA49	II	24×33	不整楕円形	21	92.6	黒褐色土単一層	
SKP94	MA49	II	29×40	不整楕円形	12	93.0	黒褐色土単一層	
SKP95	MB49	II	23×29	楕円形	9	92.2	黒褐色土単一層	
SKP97	MD49	II	37×46	不整楕円形	15	91.4	不明	
SKP98	MD49	II	45×53	不整楕円形	26	90.9	不明	
SKP99	MC50	II	22×24	円形	35	91.5	黒褐色土単一層	
SKP100	MC50	II	36×43	楕円形	27	91.3	不明	
SKP106	LS51	V	35×49	隅丸方形	15	95.1	黒褐色土単一層	
SKP107	LS51	V	33×33	隅丸方形	12	95.3	暗褐色土単一層	
SKP108	LS51	V	25×25	円形	8	95.3	暗褐色土単一層	
SKP109	LS51	V	21×23	楕円形	19	94.7	暗褐色土単一層	
SKP110	LS51	V	20×21	円形	12	94.8	暗褐色土単一層	
SKP111	LS51	V	19×22	楕円形	14	94.4	暗褐色土単一層	
SKP112	LT51	V	25×29	楕円形	7	94.1	暗褐色土単一層	
SKP113	LS49	V	17×20	楕円形	14	94.6	黒褐色土単一層	
SKP114	LS49	V	19×20	円形	18	94.5	黒褐色土単一層	
SKP115	LS49	V	28×43	楕円形	27	94.3	黒褐色土単一層	
SKP116	LT49	V	25×35	不整楕円形	17	94.1	黒褐色土単一層	
SKP117	LS49	V	26×27	円形	19	94.2	黒褐色土単一層	
SKP118	LT49	V	16×21	楕円形	14	94.2	黒褐色土単一層	
SKP119	LT49	V	26×31	楕円形	16	94.1	黒褐色土単一層	
SKP121	MC49	II	32×36	楕円形	6	91.7	不明	
SKP122	MD49	II	35×40	楕円形	16	91.4	不明	
SKP123	MD50	II	32×40	不整楕円形	23	90.9	暗褐色土単一層	
SKP124	MD49	II	22×29	不整楕円形	12	91.3	黒褐色土単一層	
SKP126	MD48	II	26×34	楕円形	15	91.5	不明	
SKP127	MD48	II	39×45	不整楕円形	10	91.6	黒褐色土単一層	
SKP128	MD48	II	35×46	楕円形	14	91.6	黒褐色土単一層	
SKP130	MD48	II	35×37	円形	21	91.1	暗褐色土単一層	
SKP131	ME48	II	31×32	円形	19	90.5	黒褐色土単一層	
SKP132	ME48	II	35×35	不整形	11	90.7	黒褐色土単一層	
SKP133	ME48	II	25×29	隅丸方形	19	90.5	黒褐色土単一層	
SKP134	ME48	II	30×36	不整楕円形	23	90.3	黒褐色土単一層	
SKP135	ME49	II	32×32	円形	36	90.1	黒褐色土単一層	
SKP136	ME49	II	21×28	楕円形	26	90.2	黒褐色土単一層	
SKP137	ME49	II	20×20	円形	5	90.6	黒褐色土単一層	
SKP138	MD49	II	27×45	不整楕円形	14	91.0	不明	
SKP147	MD53	V	31×38	楕円形	20	9.0	黒褐色土単一層	
SKP148	MC53	V	18×22	不整楕円形	12	90.3	黒褐色土単一層	
SKP149A	MC53	V	42×46	不整形	27	90.2	黒褐色土単一層	SKP149Bを切る
SKP149B	MC53	V	32×58	不整楕円形	21	90.3	黒褐色土単一層	SKP149Aに切られる
SKP150	MC53	V	25×40	楕円形	24	90.3	暗褐色土単一層	
SKP151	MC54	V	31×41	楕円形	27	90.3	暗褐色土単一層	SKP152を切る
SKP152	MC54	V	34×50	楕円形	31	90.2	黒褐色土単一層	SKP151に切られる、SKP267を切る
SKP153	MC54	V	26×46	楕円形	30	90.2	暗褐色土単一層	SKP154と重複
SKP154	MC54	V	21×23	楕円形	12	90.3	不明	SKP153と重複
SKP155	MC54	V	25×40	不整楕円形	47	90.2	暗褐色土単一層	
SKP156	MC54	V	30×53	不整楕円形	25	90.5	黒褐色土単一層	土師器坏片出土
SKP157A	MC54	V	20×28	不整楕円形	12	90.7	黒褐色土単一層	SKP157Bと重複
SKP157B	MC54	V	20×25	楕円形	14	90.6	黒褐色土単一層	SKP157Aと重複
SKP158	MC54	V	18×21	楕円形	21	90.4	暗褐色土単一層	
SKP160	MC55	V	26×29	不整形	17	90.5	黒褐色土単一層	
SKP161	MC55	V	27×27	円形	17	90.5	暗褐色土単一層	
SKP162	MC55	V	36×43	楕円形	17	90.4	黒褐色土単一層	
SKP163	MC55	V	45×48	不整形	24	90.4	不明	
SKP169	MB49	II	35×47	不整形	19	91.9	黒褐色土単一層	
SKP170	MB49	II	22×25	楕円形	12	91.9	黒褐色土単一層	
SKP171	MB48	II	30×80	不整形	10	92.1	黒褐色土単一層	
SKP172	MB49	II	21×28	楕円形	19	91.9	黒褐色土単一層	
SKP173	MB49	II	30×35	楕円形	12	92.0	黒褐色土単一層	

第3表 柱穴様ピット観察表(2)

第4章 調査の記録

遺構番号	所在区	検出面	径または辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
SKP174	MC49	II	19×24	楕円形	6	90.8	黒褐色土単一層	
SKP175	MC49	II	24×24	円形	6	91.8	暗褐色土単一層	
SKP176	MC49	II	28×30	不整形円形	13	91.7	黒褐色土単一層	
SKP177	ME48	II	34×41	不整形楕円形	9	90.8	暗褐色土単一層	
SKP178	MD49	II	30×31	不整形方形	6	91.5	黒褐色土単一層	
SKP179	MD49	II	19×23	楕円形	22	91.0	黒褐色土単一層	
SKP181	MC51	V	25×29	楕円形	15	90.9	黒褐色土単一層	
SKP182	MB51	V	22×25	不整形楕円形	12	91.2	黒褐色土単一層	
SKP183	MC51	V	25×29	楕円形	11	90.5	黒褐色土単一層	
SKP184	MC51	V	19×20	楕円形	19	90.2	黒褐色土単一層	
SKP185	MD51	V	24×24	円形	22	90.0	黒褐色土単一層	
SKP186	MD51	V	28×28	不整形円形	26	89.9	黒褐色土単一層	
SKP187	MD51	V	23×27	楕円形	30	89.7	黒褐色土単一層	
SKP188	MD51	V	20×21	円形	14	89.7	黒褐色土単一層	
SKP189	MD51	V	34×61	不整形楕円形	18	89.7	黒褐色土単一層	
SKP190	MD51	V	29×52	楕円形	13	89.6	黒褐色土単一層	
SKP196	MD51	V	18×23	楕円形	18	89.9	不明	
SKP201	MA53	V	30×52	不整形楕円形	16	92.9	黒褐色土単一層	土師器坏(第35図3)出土
SKP207	MA51	V	30×41	楕円形	32	92.2	黒褐色土単一層	
SKP209	ME51	V	14×70	不整形	15	89.4	黒褐色土単一層	
SKP210	ME51	V	18×19	円形	11	89.5	黒褐色土単一層	
SKP211	ME51	V	25×27	楕円形	15	89.5	不明	
SKP217	MB49	II	33×35	不整形円形	18	92.3	暗赤褐色土単一層	
SKP221	MD50	II	35×37	不整形楕円形	14	91.3	黒褐色土単一層	
SKP222	MB52	V	33×43	方形	18	91.7	不明	
SKP224	MC51	V	27×29	不整形方形	11	90.4	黒褐色土単一層	
SKP225	MA50	V	25×26	円形	24	92.2	黒褐色土単一層	
SKP226	MC52	V	34×51	楕円形	11	90.6	黒褐色土単一層	
SKP227	MC52	V	46×50	不整形楕円形	19	90.4	黒褐色土単一層	
SKP228	MC52	V	24×25	円形	11	90.2	黒色土単一層	
SKP229	MD52	V	24×24	円形	20	90.1	黒色土単一層	
SKP230	MD52	V	33×37	楕円形	28	90.0	黒色土単一層	
SKP231	MD52	V	24×26	不整形円形	8	90.2	黒色土単一層	
SKP232	MC52	V	49×63	不整形楕円形	19	90.7	黒褐色土単一層	
SKP235	LS52	V	31×42	楕円形	50	94.6	不明	
SKP236	LS52	V	31×49	不整形楕円形	10	94.4	暗褐色土単一層	
SKP237	LS52	V	33×43	不整形方形	26	94.4	黒褐色土単一層	
SKP239	MA55	V	17×25	楕円形	27	92.7	黒褐色土単一層	
SKP241	MA56	V	27×29	方形	11	91.7	黒褐色土単一層	
SKP243	LS52	V	26×32	不整形楕円形	21	94.6	黒褐色土単一層	
SKP244	LS52	V	30×31	円形	19	94.8	黒褐色土単一層	
SKP245	LS52	V	26×68	不整形楕円形	5	94.7	不明	
SKP246	LS52	V	27×29	円形	14	94.8	黒褐色土単一層	
SKP247	LS52	V	27×31	楕円形	9	94.7	暗褐色土単一層	
SKP248	LS52	V	25×27	楕円形	15	94.3	黒褐色土単一層	
SKP249	LT52	V	23×27	楕円形	11	94.2	暗褐色土単一層	
SKP250	LS52	V	23×30	楕円形	12	94.3	黒褐色土単一層	
SKP251	LS52	V	19×23	楕円形	14	94.3	黒褐色土単一層	SKP252と重複
SKP252	LT52	V	18×20	楕円形	7	94.3	黒褐色土単一層	SKP251と重複
SKP253	LT52	V	26×34	楕円形	12	94.0	黒褐色土単一層	
SKP254	LT52	V	20×23	不整形方形	5	94.1	暗褐色土単一層	
SKP255	LT52	V	23×31	不整形楕円形	10	94.2	黒褐色土単一層	
SKP256	LT52	V	48×60	隅丸方形	13	93.9	黒褐色土単一層	
SKP257	LT52	V	36×48	楕円形	8	93.8	黒褐色土単一層	
SKP258	LT52	V	32×52	不整形楕円形	9	93.8	黒褐色土単一層	
SKP259	LT52	V	26×37	不整形楕円形	12	93.7	黒褐色土単一層	
SKP260	MD52	V	28×31	楕円形	13	89.6	黒色土単一層	
SKP261	ME51	V	30×31	不整形楕円形	14	89.5	黒色土単一層	
SKP262	MB51	V	23×23	円形	27	91.9	黒褐色土単一層	
SKP263	MA51	V	17×23	楕円形	11	92.0	黒褐色土単一層	
SKP264	MA51	V	30×52	楕円形	16	92.1	暗褐色土単一層	
SKP265	MA51	V	27×28	不整形円形	28	92.2	黒褐色土単一層	
SKP266	LT51	V	35×37	不整形楕円形	18	93.7	黒褐色土単一層	
SKP267	MC54	V	38×51	楕円形	22	90.3	黒色土単一層	SKP152に切られる

第4表 柱穴様ピット観察表(3)

遺構番号	所在区	検出面	径または 辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
SKP268	LT51	V	18×32	楕円形	10	93.6	暗褐色土単一層	
SKP269	LT53	V	27×30	不整形	7	93.8	黒褐色土単一層	
SKP271	LT53	V	30×40	不整形	16	93.0	黒褐色土単一層	
SKP272	LS53	V	17×20	楕円形	20	94.3	黒褐色土単一層	
SKP273	LS53	V	30×35	楕円形	10	94.3	黒褐色土単一層	
SKP274	LS53	V	20×20	円形	18	94.4	黒褐色土単一層	
SKP275	LT53	V	13×25	不整楕円形	7	93.9	黒褐色土単一層	
SKP276	LT53	V	45×68	不整楕円形	35	93.8	黒褐色土単一層	
SKP277	LT53	V	20×23	楕円形	13	93.5	黒褐色土単一層	
SKP278	LT54	V	24×30	楕円形	25	93.5	黒褐色土単一層	
SKP279	MD52	V	33×35	円形	29	89.7	黒褐色土単一層	
SKP280	MC52	V	13×21	楕円形	11	90.2	不明	
SKP281	MC52	V	23×33	楕円形	34	90.1	黒褐色土単一層	
SKP282	MC53	V	17×21	楕円形	22	90.5	黒褐色土単一層	
SKP283	MC53	V	19×33	楕円形	10	90.5	黒褐色土単一層	
SKP284	MC53	V	16×20	楕円形	15	90.5	黒褐色土単一層	
SKP285	MC53	V	16×16	円形	10	90.9	黒褐色土単一層	
SKP286	MC53	V	18×20	楕円形	9	90.8	黒褐色土単一層	
SKP287	MC54	V	18×21	楕円形	23	90.4	黒褐色土単一層	
SKP288	MC54	V	15×20	楕円形	8	90.6	黒褐色土単一層	土師器坏片出土
SKP290	MC54	V	18×20	楕円形	19	90.5	黒褐色土単一層	
SKP291	LT54	V	20×28	楕円形	14	93.9	黒褐色土単一層	
SKP292	LS54	V	23×26	楕円形	15	94.1	暗褐色土単一層	
SKP293	LT54	V	24×29	楕円形	13	93.9	黒褐色土単一層	
SKP294	LT54	V	18×22	楕円形	11	93.8	黒褐色土単一層	
SKP295	LT54	V	20×26	楕円形	12	93.5	黒褐色土単一層	
SKP296	LT54	V	20×29	楕円形	10	93.6	黒褐色土単一層	
SKP297	LT54	V	18×21	楕円形	13	93.4	黒褐色土単一層	
SKP298	LT54	V	27×43	楕円形	16	93.7	黒褐色土単一層	
SKP299	LS54	V	33×45	隅丸方形	12	94.0	黒褐色土単一層	
SKP300	LT54	V	17×20	楕円形	19	93.8	黒褐色土単一層	
SKP301	LT54	V	21×24	不整楕円形	27	93.6	黒褐色土単一層	
SKP302	LT54	V	21×25	不整楕円形	18	93.7	黒褐色土単一層	
SKP303	LT54	V	21×27	楕円形	21	93.5	黒褐色土単一層	
SKP304	MD54	V	14×29	楕円形	22	90.0	黒褐色土単一層	土師器坏片出土
SKP305	MD54	V	21×25	楕円形	9	90.1	黒褐色土単一層	
SKP306	MD55	V	15×18	楕円形	9	90.0	黒褐色土単一層	
SKP307	MD55	V	20×25	楕円形	15	89.9	黒褐色土単一層	
SKP308	LT54	V	30×58	不整楕円形	12	93.6	黒褐色土単一層	
SKP309	LT54	V	29×34	不整楕円形	18	93.4	黒褐色土単一層	
SKP310	LT54	V	25×39	楕円形	10	93.4	黒褐色土単一層	
SKP311	LT55	V	21×32	楕円形	11	93.3	暗褐色土単一層	
SKP312	LT55	V	12×18	楕円形	6	93.3	黒褐色土単一層	
SKP313	LT55	V	19×34	不整楕円形	12	93.3	黒褐色土単一層	
SKP314	LT55	V	21×27	楕円形	19	93.2	暗褐色土単一層	
SKP315	MD55	V	22×28	楕円形	12	89.8	黒色土単一層	
SKP316	MD55	V	20×22	円形	5	89.8	黒色土単一層	
SKP317	MD55	V	26×31	楕円形	13	89.8	黒色土単一層	
SKP318	MB・MC54	V	29×35	不整楕円形	7	90.9	黒褐色土単一層	
SKP320	MA55	V	22×25	不整楕円形	10	92.2	黒褐色土単一層	
SKP321	MA54	V	22×24	方形	15	92.1	黒褐色土単一層	SKP374と重複
SKP322	MB54	V	23×25	不整形	22	91.9	暗褐色土単一層	
SKP324	MA53	V	38×43	楕円形	15	92.2	黒褐色土単一層	クロビット 土師器坏・甕(第35図4,5)出土
SKP325	MA53	V	22×26	楕円形	8	92.8	黒褐色土単一層	
SKP326	MA53	V	30×36	楕円形	12	92.8	暗褐色土単一層	
SKP329	LT51	V	25×28	楕円形	14	93.5	黒褐色土単一層	
SKP331	MD53	V	39×56	楕円形	21	90.1	黒褐色土単一層	SD144に切られる
SKP332	MD52	V	17×26	楕円形	2	89.9	黒褐色土単一層	
SKP333	MD52	V	21×27	楕円形	13	89.8	黒褐色土単一層	
SKP334	MB53	V	60×71	不整楕円形	31	91.3	黒褐色土単一層	須恵器甕、土師器甕片出土
SKP335	MA55	V	19×23	不整楕円形	16	92.4	黒褐色土単一層	
SKP336	MA55	V	17×29	楕円形	20	92.2	黒褐色土単一層	
SKP337	MA55	V	15×18	不整楕円形	15	92.2	黒褐色土単一層	
SKP338	MA55	V	18×21	不整楕円形	15	92.4	黒褐色土単一層	

第5表 柱穴様ピット観察表(4)

第4章 調査の記録

遺構番号	所在区	検出面	径または辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
SKP339	MA55	V	21×21	円形	11	92.0	黒褐色土単一層	
SKP341	MA56	V	22×29	楕円形	8	91.8	黒色土単一層	
SKP342	MA56	V	22×29	楕円形	17	91.7	黒色土単一層	
SKP345	MA54	V	34×74	不整楕円形	18	92.2	黒褐色土単一層	
SKP346	MA54	V	16×22	楕円形	6	92.2	黒褐色土単一層	
SKP347	MA54	V	23×33	楕円形	17	92.1	黒色土単一層	
SKP348	MA54	V	19×19	不整円形	29	91.8	黒色土単一層	
SKP349	MA54	V	21×21	円形	14	92.1	黒色土単一層	
SKP350	MA54	V	16×19	楕円形	10	92.2	黒褐色土単一層	
SKP351	MA55	V	14×22	楕円形	17	91.9	不明	
SKP352	MA55	V	18×23	不整楕円形	12	92.0	黒色土単一層	
SKP353	MA54	V	29×55	楕円形	21	92.5	黒色土単一層	
SKP354	LT54	V	25×43	楕円形	9	93.0	黒色土単一層	
SKP355	ME54	V	22×28	楕円形	22	89.2	黒褐色土単一層	SB549に帰属
SKP356	MD54	V	15×18	楕円形	9	89.4	黒褐色土単一層	
SKP357	MD54	V	21×27	楕円形	7	89.4	不明	
SKP358	MD54	V	17×24	楕円形	7	89.5	暗褐色土単一層	
SKP359	MD54	V	18×21	楕円形	8	89.6	不明	
SKP360	MD54	V	20×24	不整楕円形	13	89.6	暗褐色土単一層	SB549に帰属
SKP361	MD54	V	15×31	楕円形	8	89.7	黒褐色土単一層	
SKP362	MD54	V	20×22	楕円形	11	89.8	黒褐色土単一層	SB549に帰属
SKP363	MD54	V	21×33	楕円形	22	89.7	暗褐色土単一層	
SKP364	MD54	V	21×28	楕円形	10	89.9	黒褐色土単一層	
SKP365	LT54	V	22×28	楕円形	18	93.3	黒色土単一層	
SKP366	LS54	V	36×36	不整円形	20	94.2	黒褐色土単一層	
SKP367	LT52	V	21×25	楕円形	16	93.3	黒色土単一層	
SKP368	LT53	V	26×28	不整楕円形	10	93.4	黒色土単一層	
SKP369	LT53	V	34×40	楕円形	12	93.3	黒色土単一層	
SKP370	MA53	V	10×30	不整楕円形	11	92.8	不明	
SKP371	MA53	V	13×21	楕円形	25	92.5	黒褐色土単一層	土師器残片出土
SKP372	MA53	V	20×23	隅丸方形	17	95.0	黒色土単一層	
SKP373	MA53	V	20×24	隅丸方形	13	92.9	黒色土単一層	
SKP374	MA54	V	47×47	不整方形	18	92.2	黒褐色土単一層	SKP321と重複
SKP375	MA54	V	18×28	楕円形	8	92.9	不明	
SKP376	LT55	V	30×31	円形	24	92.5	黒褐色土単一層	
SKP377	LT56	V	18×23	楕円形	17	92.6	黒褐色土単一層	
SKP378	LT56	V	18×29	楕円形	22	92.6	黒褐色土単一層	
SKP379	LT56	V	20×35	楕円形	16	92.7	黒褐色土単一層	
SKP380	LT56	V	35×50	不整楕円形	14	91.5	黒褐色土単一層	
SKP381A	MD54	V	16×23	楕円形	11	89.9	黒褐色土単一層	SB549に帰属
SKP381B	LT56	V	21×25	楕円形	16	92.4	不明	
SKP382	MD53	V	22×28	楕円形	14	89.6	黒褐色土単一層	SB549に帰属
SKP383	ME54	V	18×20	不整円形	8	89.4	不明	
SKP384	ME54	V	20×22	不整円形	8	89.3	黒褐色土単一層	
SKP385	MB56	V	25×38	楕円形	20	90.9	黒褐色土単一層	
SKP386	MA54	V	19×20	円形	15	92.0	黒褐色土単一層	
SKP387	MB54	V	25×26	円形	38	91.6	黒褐色土単一層	
SKP388	LT54	V	22×26	不整楕円形	14	93.6	黒褐色土単一層	
SKP389	MA56	V	14×32	不整楕円形	14	91.6	黒褐色土単一層	
SKP390	MB56	V	18×26	楕円形	6	91.1	黒褐色土単一層	
SKP391	MC56	V	14×16	楕円形	5	90.4	黒褐色土単一層	
SKP392	MB53	V	13×17	不整楕円形	13	92.1	黒褐色土単一層	
SKP393	MB53	V	15×24	楕円形	6	92.1	黒褐色土単一層	
SKP394	MB53	V	18×20	円形	31	92.0	黒褐色土単一層	
SKP396	MA54	V	24×33	不整楕円形	28	92.0	黒褐色土単一層	
SKP397	MC56	V	16×20	楕円形	11	90.4	黒褐色土単一層	
SKP398	MC55	V	17×20	楕円形	10	90.2	黒褐色土単一層	
SKP399	MC53	V	17×23	不整楕円形	6	90.4	黒褐色土単一層	
SKP400	MC54	V	16×18	楕円形	16	90.2	黒褐色土単一層	
SKP401	MC54	V	18×21	楕円形	13	90.2	黒褐色土単一層	
SKP402	MD54	V	25×26	円形	24	90.0	黒褐色土単一層	
SKP403	MD54	V	22×23	不整円形	12	90.0	黒褐色土単一層	
SKP408	MD51	V	25×28	楕円形	21	89.7	黒褐色土単一層	
SKP409	MD52	V	30×48	楕円形	21	89.6	黒褐色土単一層	

第6表 柱穴様ピット観察表(5)

遺構番号	所在区	検出面	径または辺長 (cm)	平面形状	深さ (cm)	底面標高 (m)	覆土	備考
S K P 501	L T 55	V	17×30	楕円形	10	89.5	黒褐色土単一層	
S K P 502	L T 55	V	33×41	楕円形	15	92.8	黒褐色土単一層	
S K P 503	L T 55	V	15×25	楕円形	10	92.7	黒褐色土単一層	
S K P 504	L T 55	V	26×27	円形	28	92.5	黒褐色土単一層	
S K P 505	ME51	V	14×16	楕円形	8	89.6	黒褐色土単一層	
S K P 506	ME51	V	17×22	楕円形	11	89.5	黒褐色土単一層	
S K P 507	ME51	V	19×26	楕円形	15	89.5	黒褐色土単一層	
S K P 508	MD51	V	27×29	円形	13	89.7	黒褐色土単一層	
S K P 509	MD51	V	22×23	円形	4	89.8	黒褐色土単一層	
S K P 510	MD51	V	13×19	楕円形	9	89.8	黒褐色土単一層	
S K P 511	MD51	V	13×22	楕円形	7	89.9	黒褐色土単一層	
S K P 512	MD51	V	17×22	楕円形	31	89.8	黒褐色土単一層	
S K P 513	MD51	V	23×26	楕円形	13	89.9	黒褐色土単一層	
S K P 514	MD51	V	15×20	楕円形	8	90.0	黒褐色土単一層	
S K P 515	MD51	V	19×24	楕円形	15	90.0	黒褐色土単一層	
S K P 516	MD52	V	24×28	楕円形	23	89.9	黒褐色土単一層	
S K P 517	MD52	V	21×25	楕円形	15	90.0	黒褐色土単一層	
S K P 518	MD52	V	18×20	円形	15	90.0	黒褐色土単一層	
S K P 519	MD52	V	20×21	円形	12	90.0	黒褐色土単一層	
S K P 520	MD52	V	20×24	楕円形	9	89.9	黒褐色土単一層	
S K P 521	MD52	V	17×19	楕円形	18	89.7	黒褐色土単一層	
S K P 522	MD52	V	21×25	楕円形	13	89.7	黒褐色土単一層	
S K P 523	MD52	V	19×19	円形	24	89.4	黒褐色土単一層	
S K P 524	MD52	V	19×32	楕円形	25	89.7	黒褐色土単一層	
S K P 525	MD52	V	18×19	円形	15	89.8	黒褐色土単一層	
S K P 526	ME54	V	24×28	楕円形	10	89.3	不明	
S K P 527	ME54	V	32×46	不整楕円形	12	89.2	黒褐色土単一層	
S K P 528	ME54	V	36×44	楕円形	10	89.2	黒褐色土単一層	土師器甕片出土
S K P 530	MC52	V	18×21	楕円形	19	90.3	不明	
S K P 531	MC52	V	18×22	楕円形	17	90.3	黒色土単一層	S K P 532と重複
S K P 532	MC52	V	19×24	楕円形	17	90.3	黒色土単一層	S K P 531と重複
S K P 533	MC52	V	18×19	円形	8	90.6	黒色土単一層	
S K P 534	MC52	V	13×15	楕円形	10	90.8	黒色土単一層	
S K P 535	MC52	V	23×28	楕円形	30	90.3	黒色土単一層	
S K P 536	MC52	V	18×30	楕円形	11	90.4	黒色土単一層	
S K P 538	MC52	V	24×44	不整楕円形	20	90.3	黒色土単一層	
S K P 539	MC52	V	20×25	楕円形	9	90.3	黒褐色土単一層	S K P 540と重複
S K P 540	MC52	V	22×26	楕円形	18	90.3	黒色土単一層	S K P 539と重複
S K P 541	MC52	V	20×20	円形	15	90.3	黒色土単一層	
S K P 542	MC52	V	19×32	楕円形	36	90.2	黒色土単一層	S K P 543と重複
S K P 543	MC52	V	17×29	楕円形	36	90.2	黒色土単一層	S K P 542と重複
S K P 544	MC52	V	25×25	円形	34	90.4	黒色土単一層	
S K P 545	MC52	V	13×16	不整円形	28	90.5	黒色土単一層	
S K P 546	MC51	V	15×23	楕円形	12	90.5	黒褐色土単一層	
S K P 548	MD・ME54	V	21×22	不整円形	9	89.4	不明	S B 549に帰属

第7表 柱穴様ピット観察表 (6)

第4章 調査の記録

挿入	番号	出土地点	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外底部/ 台部特徴	器面特徴	色調		備考
													内面	外面	
24	1	S J 125	土師器	有台坏	底	—	6.1	—	—	—	切離不明→付高台 (放射状痕跡)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	台径6.5cm、台高1.5cm
24	2	S J 125	土師器	坏	口~底	13.6	5.4	4.7	0.40	0.35	回糸(右?)摩滅	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	底部に穿孔。(2.2cm×1.5cm)
24	3	S J 125	土師器	坏	口~底	12.5	5.0	4.6	0.40	0.37	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	内外面黒色付着物
24	4	S J 139	土師器	坏	胴~底	—	5.6	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	切り難しやや失敗か?
24	5	S J 139	土師器	坏	胴~底	—	5.0	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	外底面黒斑
24	6	S J 139	土師器	坏	底	—	5.2	—	—	—	回糸	内外面摩滅	にぶい黄橙 浅黄橙	にぶい黄橙 浅黄橙	外底面黒斑
24	7	S J 139	土師器	甕	胴下~底	—	9.0	—	—	—	摩滅	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	
24	8	S J 143	土師器	坏	口~胴	12.3	—	—	—	—	—	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	
24	9	S J 143	土師器	坏	口~胴	13.5	—	—	—	—	—	内外面クロコナデ	橙	灰白	
24	10	S J 143	土師器	坏	口~胴	12.6	—	—	—	—	—	内外面クロコナデ	橙	橙	
24	11	S J 143	土師器	坏	口~胴	12.5	—	—	—	—	—	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	
24	12	S J 143	土師器	坏	底	—	5.3	—	—	—	回糸(右)	外面クロコナデ 内面剥落	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外底黒斑
24	13	S J 143	土師器	坏	胴~底	—	4.5	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄	灰黄	外面黒斑、外底スノコ状圧痕
24	14	S J 143	土師器	坏	胴~底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	内外底面黒斑
25	1	S J 143	土師器	坏	口~底	14.4	5.4	4.6	0.38	0.32	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	
25	2	S J 143	土師器	坏	口~底	13.0	5.2	4.2	0.40	0.32	回糸(右)=二重溝	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙 橙	外側面2次被熱痕
25	3	S J 143	土師器	坏	口~底	12.3	4.6	5.0	0.37	0.41	回糸	内外面摩滅	橙	にぶい橙	
25	4	S J 143	土師器	坏	口~底	11.6	5.2	4.9	0.45	0.42	回糸(右)	内外面クロコナデ	黄橙	浅黄橙	外側面黒斑
25	5	S J 143	土師器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	内外面摩滅	浅黄橙	にぶい黄橙	内外面黒斑
25	6	S J 143	土師器	甕?	底	—	6.4	—	—	—	回糸	内外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	
25	7	S J 143	土師器	甕	胴~底	—	10.6	—	—	—	切離不明	内面摩滅 外面ヘラケズリ	橙	橙	外側面すず状炭化物
25	8	S J 143	須恵器	壺?	口	—	—	—	—	—	—	内外面クロコナデ	灰	灰	
25	9	S J 143	須恵器	甕?壺?	胴上	—	—	—	—	—	—	外面タタキ	灰	オリーブ黒	
25	10	S J 240	土師器	坏	底	—	5.0	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
25	11	S J 240	土師器	坏	胴~底	—	5.6	—	—	—	回糸(右)=乱れあり	内外面クロコナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	内側から割ったあとあり
25	12	S J 240	土師器	坏	胴~底	—	5.6	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	灰黄褐	灰黄褐	外底面スノコ状圧痕orヘラ?
25	13	S J 240	土師器	有台坏	底	—	7.1	—	—	—	回糸(右)→付高台 (放射状痕跡)	内外面クロコナデ	にぶい橙	にぶい橙	台径8.0cm、台高1.2cm
25	14	S J 240	土師器	坏	口~底	13.4	5.4	4.0	0.40	0.30	摩滅	内外面クロコナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	内面黒斑
26	1	S J 240	土師器	坏	口~底	12.6	5.0	3.3	0.40	0.26	回糸(右)	内外面クロコナデ	灰黄褐	灰黄褐	外底面スノコ状圧痕
26	2	S J 240	土師器	坏	口~底	12.6	4.6	3.9	0.37	0.31	回糸(右)	内外面クロコナデ	オリーブ黄	灰オリーブ	内外面広範囲に黒斑
26	3	S J 240	土師器	坏	口~底	11.9	5.0	4.0	0.42	0.34	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	外底面スノコ状圧痕、口縁部黒斑 外側面豆粒大粘土塊
26	4	S J 240	須恵器	甕	底	—	—	—	—	—	—	外面タタキ 内面タタキ→当て具痕	灰オリーブ	灰	丸底甕 内底一部ヘラナデ
26	5	S K 1 01	土師器	坏	底	—	5.2	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	橙	にぶい橙	外底スノコ状圧痕
26	6	S K 1 01	土師器	坏	口~底	12.6	4.6	4.2	0.37	0.33	回糸(右)	内外面クロコナデ	橙	にぶい橙	外底スノコ状圧痕
26	7	S K 1 104B	土師器	有台坏	底	—	5.6	—	—	—	切離不明→ナデ→付 高台	内面剥落、外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	台径5.6cm、台高1.4cm
26	8	S K 1 104B	土師器	坏	胴~底	—	5.4	—	—	—	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	
26	9	S K 1 104A	土師器	坏	口~底	8.5	5.1	4.8	0.60	0.56	回糸	内面クロコナデ 外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	外側面に豆粒大粘土塊
26	10	S K 1 104A	土師器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	内外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	
27	1	S K 1 105	土師器	坏	口~底	14.1	5.3	5.3	0.38	0.38	回糸(右)	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	外底面スノコ状圧痕、外側面黒斑
27	2	S K 1 105	土師器	坏	胴~底	15.3	5.6	5.2	0.37	0.34	回糸	内外面クロコナデ	浅黄橙	浅黄橙	外側面上位2次被熱痕
27	3	S K 1 105	土師器	坏	口~底	13.6	6.0	5.1	0.44	0.38	回糸(右)	内外面摩滅	橙	橙	
27	4	S K 1 105	土師器	坏	胴~底	—	7.0	—	—	—	回糸	内外面クロコナデ	にぶい橙	にぶい橙	
27	5	S K 1 105	土師器	坏	胴~底	—	4.8	—	—	—	回糸(右?)	内外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	外側面スタレ状圧痕

第8表 遺物観察表(1)

種図	番号	出土地点	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	口径 指数	外底部/ 台部特徴	器面特徴	色調		備考
													内面	外面	
27	6	SK I 105	土師器	甕	胴下~底	—	7.1	—	—	—	摩滅	内外面摩滅	浅黄橙	にぶい黄褐	外底面周縁2次的被熱痕と黒斑
27	7	SK I 105	土師器	甕	口~胴	19.4	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ、外面ロクロナデ→ヘラケズリ	浅黄橙	浅黄橙	外側面2次的被熱痕、内外側面スジ状のすず状炭化物
27	8	SK I 105	土師器	甕	口~胴	21.0	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ→ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	
27	9	SK I 105	土師器	甕	口~胴	17.6	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ→ケズリ	にぶい褐	にぶい褐	外側面黒斑
27	10	SK I 105	土師器	甕	口~胴	19.6	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ、外面 タロー胴部ヘラナデ	橙	橙 にぶい橙	外側面すず状炭化物
28	1	SK I 105	土師器	甕	口~胴	23.6	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	浅黄橙	浅黄橙	
28	2	SK I 105	土師器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	
28	3	SK I 105	土師器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ 外面ロクロナデ→ケズリ	橙	橙	
28	4	SK I 105	土師器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	浅黄橙	にぶい橙	外面すず状炭化物
28	5	SK I 105	土師器	甕	底	—	9.8	—	—	—	ロクロ→ヘラ	内面ナデ、外面ケズリ	橙	浅黄橙	内外底面付近一部黒斑
28	6	SK I 105	土師器	甕	胴~底	—	8.8	—	—	—	ロクロ→ヘラ	内面ナデ、外面ミガキ	褐灰	灰褐	外底面中央に指頭大オサエ痕
28	7	SK I 105	土師器	小壺	胴上~底	—	3.6	4.5	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄橙	浅黄橙	割れ口に擦り痕、2次的に被熱= 転用痕か?
28	8	SK I 105	須恵器	甕	胴	—	—	—	—	—	—	内外面タタキ	褐灰	灰	
28	9	SK I 140	土師器	坏	口~底	13.4	5.2	4.6	0.39	0.34	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	内面2次被熱痕 内外面すず状炭化物
28	10	SK I 140	土師器	坏	口~底	13.1	5.0	4.7	0.38	0.36	回糸(右)=乱れあり	内外面ロクロナデ	橙	橙	内外面2次被熱痕
28	11	SK I 140	土師器	坏	ほぼ完	13.5	4.4	4.2	0.33	0.31	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	橙	外底スノコ状圧痕 内外面2次被熱痕
29	1	SK I 140	内黒	甕	口~胴下	19.0	—	—	—	—	—	内面ミガキ 外面ロクロ→ヘラケズリ	黒色処理	橙	内面胴下位被熱痕? 外側下位黒斑
29	2	SK I 140	土師器	甕	口~胴	13.6	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	浅黄橙	浅黄橙	内外面口縁付近すず状炭化物
29	3	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.8	6.0	4.1	0.43	0.30	回糸(右)	内外面ロクロナデ	灰褐	にぶい黄褐	内面すず状炭化物 外底スノコ状圧痕
29	4	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.2	4.6	4.8	0.35	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	内面すず状炭化物 外底スノコ状圧痕
29	5	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.2	3.8	4.2	0.31	0.34	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	橙	外底スノコ状圧痕 外面2次被熱痕
29	6	SK I 142	土師器	坏	完	12.4	4.4	4.7	0.35	0.38	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	浅黄橙	内外面タール付着
29	7	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.8	5.6	4.5	0.41	0.33	回糸(右)	内外面ロクロナデ	灰褐	灰褐	内外面タールorウルシ付着
29	8	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.5	4.8	4.6	0.38	0.37	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙 にぶい橙	にぶい橙	外底スノコ状圧痕
29	9	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.4	5.2	5.1	0.39	0.38	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	外底スノコ状圧痕
29	10	SK I 142	土師器	坏	口~底	15.2	5.2	5.5	0.34	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙	内面口縁付近すず状炭化物 内外面2次被熱痕
29	11	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.2	4.4	4.4	0.36	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい橙	浅黄橙 にぶい橙	外側面~底面黒斑
30	1	SK I 142	土師器	坏	口~底	14.2	5.2	5.3	0.37	0.37	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙 にぶい褐	外底面タールorウルシ付着、外側 面黒斑
30	2	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.0	4.4	4.5	0.34	0.35	回糸(右)	内外面ロクロナデ	明黄褐	明黄褐	内面一部ウルシ付着 外側面黒斑
30	3	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.4	4.2	5.0	0.34	0.40	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	橙	外側面黒斑、底面砂粒付着
30	4	SK I 142	土師器	坏	口~底	11.8	4.2	4.0	0.36	0.34	摩滅	内外面摩滅	橙	にぶい橙	
30	5	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.7	5.0	4.1	0.39	0.32	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	浅黄橙	外底面黒斑
30	6	SK I 142	土師器	坏	口~底	11.8	4.8	4.2	0.41	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	橙 にぶい橙	内面線刻、外側面黒斑
30	7	SK I 142	土師器	坏	口~底	14.8	5.0	4.5	0.34	0.30	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄橙 橙	浅黄橙 にぶい橙	内面線刻、底面被熱痕
30	8	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.9	5.2	4.5	0.37	0.32	回糸(右)	内外面ロクロナデ	灰褐	灰褐	内面タールorウルシ付着
30	9	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.2	5.6	5.4	0.42	0.41	回糸(右)	内外面ロクロナデ	橙	橙 にぶい橙	内面口縁付近2次被熱痕
30	10	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.6	5.0	5.0	0.40	0.40	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	内外面2次被熱痕
30	11	SK I 142	土師器	坏	口~底	14.2	5.4	4.9	0.38	0.35	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外底黒斑
30	12	SK I 142	土師器	坏	口~底	11.2	4.8	3.9	0.43	0.35	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい橙	にぶい褐	内外面すず状炭化物
30	13	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.6	5.0	4.9	0.37	0.36	回糸	内外面ロクロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	底部に径3cm円形穿孔、内外面す ず状炭化物
30	14	SK I 142	土師器	坏	口~底	12.8	—	—	—	—	摩滅	内外面ロクロナデ	浅黄橙	浅黄橙	
30	15	SK I 142	土師器	坏	口~底	11.8	4.8	4.2	0.41	0.36	回糸	内外面ロクロナデ 外側面一部剥落	灰褐	にぶい橙 灰褐	内外面・割れ口すず状炭化物
31	1	SK I 142	土師器	坏	口~底	13.0	—	—	—	—	切離不明	内面不明 外面ロクロナデ	淡橙	にぶい黄橙	内面2次被熱痕

第9表 遺物観察表(2)



第4章 調査の記録

棟号	番号	出土地点	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	高径 指数	外底部/ 台部特徴	器面特徴	色調		備考
													内面	外面	
31	2	SK I 142	土師器	坏	口~胴	14.2	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	灰褐色	にぶい褐色	外側面黒斑 内外面ウレシ附着
31	3	SK I 142	土師器	坏	口~胴	14.0	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	灰黄褐色	にぶい褐色	内外面黒斑
31	4	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.9	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄褐色	浅黄褐色	
31	5	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	5.6	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	褐色	浅黄褐色	
31	6	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.7	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	内外面黒斑
31	7	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	5.7	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外面黒斑
31	8	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.6	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外側面豆粒大粘土塊附着
31	9	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面すず状炭化物
31	10	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.4	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	褐色	褐色	
31	11	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.9	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄褐色	浅黄褐色	
31	12	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	5.8	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
31	13	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	5.5	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面すず状炭化物
31	14	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.4	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	褐色	浅黄褐色	
31	15	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.9	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	褐色	褐色	
31	16	SK I 142	土師器	坏	胴~底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	にぶい褐色	内外面黒斑
32	1	SK I 142	土師器	甕	口~底	12.6	7.2	10.8	—	—	回糸(右)・一部静止切刃	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	外面すず状炭化物
32	2	SK I 142	土師器	甕	口~底	10.2	6.0	10.9	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	外面すず状炭化物
32	3	SK I 142	内黒	坏	胴~底	—	5.6	4.0	—	—	回糸(右)	内面ミカキ 外面ナデ	黒褐色	褐色	外側面黒斑
32	4	SK I 142	須恵器	甕	口~胴	—	—	—	—	—	—	外面タタキ	灰	灰	
32	5	SK I 142	須恵器	甕	胴	—	—	—	—	—	—	外面タタキ	灰	灰	
32	6	SK I 142	須恵器	甕	胴	—	—	—	—	—	—	外面タタキ	灰	灰	
32	7	SK I 142	須恵器	壺	口	—	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	灰	灰	
33	1	SK 24	須恵器	壺?	口	—	—	—	—	—	—	内外面ロクロナデ	オリーブ黒	灰	
33	2	SK 198	土師器	小壺?	胴下~底	—	5.5	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄褐色	浅黄褐色	内面2次被熱痕
33	3	SK 199	土師器	坏	胴~底	—	4.8	—	—	—	回糸	内外面ロクロナデ	褐灰 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	内外面黒斑
33	4	SK 199	土師器	壺	口~胴	21.0	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ、外面ロ クロナデーヘラケズリ	灰黄褐色	褐灰	外面黒斑
33	5	SK 199	土師器	甕	胴~底	—	6.6	—	—	—	回糸(右)	内外面摩滅	浅黄褐色	浅黄褐色	
33	6	SK 199	土製品			—	—	—	—	—	—		にぶい黄褐色	淡黄	径1.7cm×2.2cm 厚さ0.6cm 有孔
33	7	SK 529	土師器	坏	口~底	11.8	5.0	5.5	0.42	0.47	回糸(右)	内外面ロクロナデ	褐色	にぶい褐色	外底面スノコ状圧痕 内外底面・内外側面黒斑
33	8	SK 529	土師器	坏	口~底	13.8	5.6	4.6	0.41	0.33	回糸(右)	内外面摩滅	にぶい褐色	浅黄褐色	内面すず状炭化物 2次の被熱痕? スノコ状圧痕?
33	9	SK 529	土師器	坏	口~底	12.6	4.8	4.1	0.38	0.33	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい褐色	にぶい赤褐色	外底面スノコ状圧痕 内外面すず状炭化物
33	10	SK 529	土師器	甕	口~胴	16.8	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ 外面クロローヘラケズリ	にぶい褐色	にぶい褐色	
33	11	SK 529	土師器	鍋	口~胴	—	—	—	—	—	—	内面ロクロナデ 外面クロローヘラケズリ	にぶい褐色	浅黄褐色	
33	12	SK 529	須恵器	甕	胴	—	—	—	—	—	—	内面ヘラナデ 外面タタキ	灰黄褐色	灰	内面黒色付着物
34	1	SD 204	土師器	坏	ほぼ完	12.8	5.2	4.6	0.41	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	内外面一部黒斑、外底面スノコ状 圧痕
34	2	SD 205	土師器	皿	口~底	12.7	5.2	2.7	0.41	0.21	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	外側面2次被熱痕
34	3	SD 205	土師器	坏	口~底	12.2	5.0	3.1	0.41	0.25	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	黄褐色	内外面すず状炭化物?
34	4	SD 205	土師器	坏	口~底	13.4	5.4	3.8	0.40	0.28	回糸(右)	内外面ロクロナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	
34	5	SD 205	土師器	坏	口~底	12.0	4.8	4.3	0.40	0.36	回糸(右)	内外面ロクロナデ	明黄褐色	黄褐色	内外面すず状炭化物
34	6	SD 205	土師器	坏	口~底	12.6	4.8	4.8	0.38	0.38	回糸(右)	内外面ロクロナデ	褐色	にぶい褐色	外底面黒斑 内面2次被熱痕
34	7	SD 205	土師器	坏	底	—	4.6	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	
34	8	SD 205	土師器	坏	底	—	5.0	—	—	—	回糸(右)	内外面ロクロナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	外底面痕?
34	9	SD 205	土師器	有台坏	口~底	14.0	5.8	—	0.41	—	切離不明一付高台	内外面摩滅	褐灰	浅黄褐色	内面および外底面黒斑

第10表 遺物観察表(3)

挿図	番号	出土地点	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 指数	口径 指数	外底部/ 台部特徴	器面特徴	色調		備考
													内面	外面	
34	10	S D 205	土師器	甕	口～底	11.6	5.8	10.9	—	—	切離不明	内外面クロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 にぶい橙	内面すず状炭化物、内面2次被熱痕
34	11	S D 205	須恵器	甕	胴	—	—	—	—	—	—	外面タタキ	灰	灰	
34	12	S K P 01C	土師器	坏	口～胴	15.1	6.1	6.0	0.40	0.40	回糸(右)	内外面クロナデ	浅黄橙	浅黄橙	内面2次被熱痕
34	13	S K P 01C	土師器	坏	底	—	4.6	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	にぶい橙	明褐色	外底面黒斑
34	14	S K P 01C	内黒	坏	胴～底	—	6.6	—	—	—	切離不明→ヘラナデ	内面ミカキ 外面クロナデ	内黒	にぶい橙	外底面黒斑
35	1	S K P 01C	土師器	甕	胴下～底	—	6.0	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	橙	橙	外面すず状炭化物
35	2	S K P 01C	土師器	甕	口～胴上	—	—	—	—	—	—	内外面クロナデ	橙	にぶい橙	内口縁・外側面すず状炭化物
35	3	S K P 201	土師器	坏	口～胴上	12.4	—	—	—	—	—	内外面クロナデ	橙	糖	口縁付近2次被熱痕
35	4	S K P 324	土師器	坏	完	12.8	5.1	4.7	0.40	0.37	回糸(右)	内外面厚減	浅黄橙	橙	
35	5	S K P 324	土師器	甕	胴上～底	—	7.2	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	浅黄橙	にぶい橙	底面スノコ状片痕 内外側面黒斑
35	6	S N 405	土師器	甕 (長胴甕)	口～底	20.0	7.0	33.0	—	—	ヘラケズリ	内外面クロナデ 外胴部ケズリ痕	橙 にぶい赤褐	橙	胎土径3mmの小石多混入、内底・ 胴部にすず状炭化物付着
35	7	S N 395C	土師器	鍋	口～胴	—	—	—	—	—	—	内外面クロナデ	浅黄橙	浅黄橙	
35	8	S N 395C	土師器	甕	口～胴	20.0	—	—	—	—	—	内外面厚減	浅黄橙	浅黄橙	
35	9	S N 395C	土師器	甕	口～胴	18.6	—	—	—	—	—	内面クロナデ 外面クロローヘラケズリ	にぶい橙	にぶい黄橙	
36	1	MD 53区	土師器	坏	口～底	12.8	4.4	3.8	0.34	0.30	回糸(右)	内外面クロナデ	橙	にぶい橙	内外面2次被熱痕
36	2	L T 56区	土師器	坏	完	12.2	5.0	5.0	0.41	0.41	切離不明	内外面クロナデ	浅黄橙	浅黄橙	内外面2次被熱痕
36	3	MA 55区	土師器	坏	口～底	14.5	6.2	5.6	0.43	0.39	切離不明→付高台	内外面厚減	浅黄橙	浅黄橙	台径6.8cm、台高1.0cm
36	4	MA 56区	土師器	坏	胴～底	—	4.9	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	外側面黒斑、外底面凸あり
36	5	MG 52区	土師器	坏	胴～底	—	4.4	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	
36	6	MC 54区	土師器	有台坏	胴～底	—	—	—	—	—	切離不明→付高台 (放射状痕跡)	内外面厚減	浅黄橙	浅黄橙	高台打ち欠き再利用、外底面状の もので調整か?
36	7	MD 54区	土師器	有台坏	底	—	6.3	—	—	—	切離不明→付高台 (放射状痕跡)	内面割落 外面クロナデ	浅黄橙	浅黄橙	高台打ち欠き再利用
36	8	L T 56区	土師器	坏	底	—	5.0	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ?	灰褐	灰褐	
36	9	MC 52区	土師器	坏	胴下～底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	にぶい橙	にぶい黄橙	外底面を桶のタキのようなもので 刷書
36	10	L T 56区	土師器	坏	胴～底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	浅黄橙	浅黄橙	
36	11	L T 56区	土師器	坏	胴～底	—	5.4	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	にぶい褐	にぶい橙 灰褐	内外側面黒斑、外底面スノコ状 痕跡
36	12	MA 56区	土師器	坏	胴～底	—	6.2	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	外側面黒斑
36	13	ME 55区	土師器	坏 (転用皿?)	口～底	—	5.2	4.4	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	橙	浅黄橙	坏転用皿?
36	14	MD 53区	土師器	坏	胴～底	—	5.2	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	浅黄橙	にぶい黄橙	
36	15	MH 52区	土師器	坏	胴～底	—	4.0	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	橙	にぶい橙	
36	16	MD 54区	土師器	坏	胴～底	—	4.9	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	浅黄橙	浅黄橙	
36	17	L T 56区	土師器	坏	胴～底	—	4.8	—	—	—	回糸(右)	内外面厚減	にぶい橙	浅黄橙	
37	1	MD 53区	土師器	坏	胴～底	—	4.6	—	—	—	回糸	内外面厚減	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内面黒斑
37	2	MH 51区	土師器	坏	底	—	5.2	—	—	—	回糸(右)	内底左回り回転糸切り痕 底部と体部の間に接合痕	浅黄橙	浅黄橙	「底部円柱づくり」の痕跡か? 内底指頭夫粘土塊付着
37	3	MH 53区	土師器	坏	甕	—	5.0	—	—	—	回糸	内外面クロナデ	にぶい橙	にぶい橙	外側面黒斑
37	4	MG 52区	土師器	甕	胴～底	—	9.2	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰褐	側面・底部周縁すず状炭化物
37	5	MC 53区	土師器	甕	胴～底	—	9.0	—	—	—	回糸(右)	内外面クロナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	内外面すず状炭化物
37	6	L T 55区	土師器	甕	口～胴	—	—	—	—	—	—	内面クロナデ 外面クロローケズリ	橙	浅黄橙 にぶい褐	外面すず状炭化物
37	7	MD 54区	焼粘土塊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	にぶい黄橙	淡黄	径4.5cm×5.0cm 厚さ1.5cm 初痕 あり、指頭圧痕あり

第11表 遺物観察表(4)

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

当窯跡は、横手市金沢中野に所在し、標高50~90mの斜面に立地する。10~11世紀頃の土師器が生産されていた遺構である。ここでは、工房跡と考えられる竪穴状遺構や土師器焼成遺構などから出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

横手盆地には奈良時代末から平安時代の窯跡が多く分布している。窯の構築に必要な木材の伐採、焼成に必要な大量の燃料材の確保、窯設當地の森林の伐採など、人々は周辺の森林と様々な関わりを営んできた。当窯跡での樹種同定は、今まではあまり調査されていない生産・産業に関わる木材利用の情報を知り、その資料の蓄積に役立つものと思われる。

なお試料8・9を除いた同一遺構の試料を用いて、放射性炭素年代測定も実施されている(本章第2節)。各試料には接合しない複数の炭化材があり、また異なる樹種の破片が含まれていた。従って放射性炭素年代測定用の炭化材は、同一破片で樹種同定と年代測定用の試料が得られるものを選んだ。樹種同定は、採取された炭化材のすべての破片について実施した。

#### 2. 樹種同定の方法

炭化材の樹種同定は、材の3方向破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し行った。横断面(木口)は炭化材を手で割り新鮮な平滑面を出し、接線断面(板目)と放射断面(柾目)は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り面を出す。この3断面の試料を直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

#### 3. 結果

当窯跡からは、落葉広葉樹のブナ属・クリ・ナシ亜科・ヌルデ、そして常緑広葉樹のサカキの合計5分類群が検出された。第12表に各試料から検出された分類群を示した。

以下に樹種同定の根拠とした材組織の観察結果を分類配列順に記載する。

##### (1) ブナ属 *Fagus* ブナ科 1a-1c (試料2)

小型の管孔が年輪内に多数分布し、年輪界では極めて小型となり、分布数も減る散孔材。道管の壁孔は主に交互状であるが階段状になる部分も見られ、穿孔は単穿孔が多く横棒数が10~20本の階段穿孔も混じる。放射組織は異性、1~3細胞幅のものとは細胞幅が広く細胞高も高い広放射組織があり、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

試料番号	検出遺構	破片数	検出樹種	備考(横断面の形状など)	AMS 試料
1	SK I 104	1片	クリ	r:0.8cm 3年輪 破片	○
2	SK I 105	2片	ブナ属	r:2.0cm 24年輪 破片	○
			ブナ属	r:1.2cm 11年輪 破片	
3	S J 125	3片	ブナ属	r:1.6cm 19年輪 破片	○
			ブナ属	r:2.2cm 20年輪 破片	
			ブナ属	r:0.9cm 7年輪 節部破片	
4	S J 139	3片	クリ	r:1.0cm 4年輪 破片	○
			クリ	r:1.0cm 4年輪 破片	
			クリ	r:0.5cm 4年輪 破片	
5	SK I 142	2片	ブナ属	r:1.2cm 8年輪 破片	○
			ブナ属	r:2.5cm 12年輪 破片	
6	S J 143	2片	ブナ属	φ:2.1cm 15年輪 丸木	○
			クリ	r:0.8cm 4年輪 破片	
7	S D 205	3片	クリ	r:1.0cm 11年輪 破片	○
			ブナ属	r:0.5cm 3年輪 破片	
			ナシ亜科	r:0.4cm 微破片	
8	S J 404	2片	ブナ属	r:0.5cm 破片	
			サカキ	r:0.3cm 5年輪 微破片	
9	S N 395B	3片	ブナ属	r:0.5cm 破片	
			ブナ属	r:0.5cm 破片	
			ブナ属	r:0.6cm 7年輪 破片	
10	SK 529	3片	ヌルデ	r:0.5cm 2年輪 破片	○
			ブナ属	r:0.7cm 17年輪 破片	
			ブナ属	r:1.6cm 19年輪 破片	

第12表 出土炭化材樹種道定結果

ブナ属は温帯域の極相林を構成する主要な樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより標高の低い所から生育しているイヌブナの2種があるが、材組織から2種を識別はできない。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 2a-2c (試料4)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密接に配列し除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく開き交互状や柵状に配置する。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

(3) ナシ亜科 *Rosaceae* subfam. *Maloideae* バラ科 3a-3c (試料7)

小型の管孔が密に分布し、年輪界では極めて小型の管孔となる散孔材。管孔は主に単独で散在する。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に2細胞幅、上

下端に方形細胞があり、道管との壁孔は小型で交互状である。柔組織の分布はあまり目立たなかった。ナシ亜科には、カナメモチ属・ナナカマド属・カマツカ属・リンゴ属・ナシ属など多くの属と種類が含まれる。小破片であり、被熱によりやや圧縮しているようなので、属レベルまで識別する特徴はつかめなかった。

(4) ヌルデ *Rhus javanica* L. ウルシ科 4a-4c (試料10)

年輪の始めに中型の管孔が配列し晩材部に向かい徐々に径を減じて行き、晩材部では非常に小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状でその孔口は大きく開き、穿孔は単一である。放射組織は異性、1～3細胞幅、輪郭はやや不齊、道管との壁孔は大きく孔口もレンズ状に大きく開き交互状配列である。小道管のらせん肥厚が確認できなかったが、らせん肥厚の特徴以外はヌルデの材と類似するので、ヌルデと同定した。炭化材では稀にらせん肥厚が見られない事もある。

ヌルデは北海道以南の温帯から熱帯にまで広く分布し、山野に普通の落葉小木である。

(5) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 5a-5c (試料8)

非常に小型で多角形の管孔が多数分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が約30本ほどの階段穿孔で、一部でかすかならせん肥厚が見られた。放射組織は明瞭な単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。

#### 4. まとめ

採取された炭化材は、元の形状が不明な破片がほとんどであるが、窯跡という遺跡の性格から類推すると、燃料材や道具類などであったと考えられる。樹種同定の結果はブナ属とクリが工房跡と思われる遺構や土器焼成遺構などのほとんどの試料から圧倒的に多く検出された。従って、当窯跡ではブナ属とクリが多く使用されていたと推測され、またこの2分類群が入手容易な環境であったとも考えられる。

横手盆地に分布する窯跡で炭化材樹種が報告されている遺跡には、8・9世紀(奈良時代末～平安時代)の竹原窯跡、そして平安時代の富ヶ沢A窯跡・富ヶ沢B窯跡・田久保下遺跡がある<sup>(註1)</sup>。いずれも須恵器窯跡である。竹原窯跡では、クヌギが圧倒的に多く、このほかにクリ・ノリウツギ・散孔材も検出された<sup>(註1)(註2)</sup>。富ヶ沢A窯跡・富ヶ沢B窯跡・田久保下遺跡で調査対象となった材の多くは窯跡の架構材と土坑の逆茂木で、コナラ節が多くこのほかにクリとトネリコ属も検出され、富ヶ沢B窯跡の燃料材1点もコナラ節であった<sup>(註3)</sup>。これらの窯跡ではクヌギまたはコナラ節が圧倒的に多く、ブナ属とクリが多く出土した当窯跡とは樹種構成が異なっていた。この違いの要因については、窯跡の時期差、立地環境、調査炭化材の性格などを含め検討してゆく必要があると思われ、今後の調査事例の蓄積が待たれる。

土坑SK529(試料10)の3破片は、2片がブナ属で1片がヌルデであった。ブナ属は人手の干渉が少ない自然林に優占する樹種であり、ヌルデは林縁や伐採跡地などの陽光地に多い樹種である。異なる環境下で生育する樹種が同一の遺構から検出されたので、試料10では敢えてヌルデの炭化材が年代測定されたが、測定値はほかの遺構の測定値と大きく異なる値ではなかった(本章第2節参照)。

土器焼成遺構S J 404（試料8）からは、常緑広葉樹のサカキが検出された。しかしサカキは、当地域に自然分布はしていない樹種である。サカキと類似した材組織を持つ樹種にヒサカキがあり、秋田県以南には分布している。サカキの放射組織は単列であるが、ヒサカキは2細胞幅である点が異なる。そこで当炭化材の異なる位置で接線断面を作成して観察したが、すべて単列の放射組織しか観察されなかった。ただし、当炭化材は中心部に近い可能性もあり、そのような部位では放射組織の細胞幅は少ないこともある。

ヒサカキの可能性も考えられるが、サカキの材は道具類や柄などに使われるので、ほかの地域から製品として持ち込まれた可能性も考えられる。

註1 嶋倉巳三郎「竹原窯跡出土炭化材の樹種」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』

秋田県文化財調査報告書第209集 秋田県教育委員会 1991（平成3）年

註2 パリノ・サーヴェイ株式会社「炭化材同定」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI－竹原窯跡－』

秋田県文化財調査報告書第209集 秋田県教育委員会 1991（平成3）年

註3 パリノ・サーヴェイ株式会社「材同定」『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－富ヶ沢

A・B・C窯跡 田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚－』秋田県文化財調査報告書第220集 秋田県教育委員会

1992（平成4）年

## 第2節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

### 1. 放射性炭素年代測定について

姥ヶ沢窯跡から出土した炭化材試料8点の放射性炭素年代をAMS法にて測定した。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析器（AMS）にて測定した。測定された $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別の補正を行ったあと、補正した $^{14}\text{C}$ 濃度を用いて $^{14}\text{C}$ 年代値（yrBP：AD1950年から何年前かを示した値）を算出した。

なお、年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用して年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 $\sigma$ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料の $^{14}\text{C}$ 計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の $^{14}\text{C}$ 計数率の比が $^{14}\text{C}(\text{Sample})/^{14}\text{C}(\text{Modern}) \geq 1$ の時は、Modernと表示する<sup>(註1)</sup>。

### 2. 同位体分別の補正について

表示した同位体比（‰）は標準値からのずれを示し、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて、 $\delta^{13}\text{C} = [ \{ (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{(\text{sample})} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{(\text{PDB})} \} / (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{(\text{PDB})} ] \times 1000$ によって算出された値である。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25.0\text{‰}$ に規格化することにより、測定された $\delta^{13}\text{C}$ の値

測定番号 (測定方法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ PDB (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代値 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	較正暦年代値	
				交点年代値	1 $\sigma$ 年代幅
PLD-783 (AMS)	炭化材 No.1 (クリ) S K I 104	-26.9	1155 $\pm 40$	cal AD 890	cal AD 785 to 790 cal AD 830 to 840 cal AD 865 to 900 cal AD 920 to 960
PLD-784 (AMS)	炭化材 No.2 (ブナ属) S K I 105	-26.2	1240 $\pm 40$	cal AD 775	cal AD 690 to 700 cal AD 715 to 750 cal AD 765 to 780 cal AD 790 to 825 cal AD 840 to 860
PLD-785 (AMS)	炭化材 No.3 (ブナ属) S J 125	-25.4	1245 $\pm 45$	cal AD 775	cal AD 690 to 705 cal AD 710 to 755 cal AD 760 to 780 cal AD 790 to 825 cal AD 840 to 860
PLD-786 (AMS)	炭化材 No.4 (クリ) S J 139	-25.5	1235 $\pm 35$	cal AD 775	cal AD 695 to 695 cal AD 720 to 745 cal AD 765 to 780 cal AD 790 to 825 cal AD 840 to 860
PLD-787 (AMS)	炭化材 No.5 (ブナ属) S K I 142	-26.8	1335 $\pm 40$	cal AD 670	cal AD 660 to 690 cal AD 705 to 705 cal AD 755 to 755
PLD-788 (AMS)	炭化材 No.6 (ブナ属) S J 143	-25.9	1040 $\pm 35$	cal AD 1000	cal AD 980 to 1020
PLD-789 (AMS)	炭化材 No.7 (クリ) S D 205	-26.1	1210 $\pm 60$	cal AD 780 cal AD 795 cal AD 800	cal AD 695 to 695 cal AD 720 to 745 cal AD 765 to 890
PLD-790 (AMS)	炭化材 No.8 (ヌルデ) S K 529	-26.4	1035 $\pm 40$	cal AD 1000 cal AD 1015	cal AD 980 to 1020

第13表 放射性炭素年代測定結果

引用文献

中村俊夫「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代』 2000(平成12)年

Stuiver, M. and Reimer, P. J. 「Extended $^{14}\text{C}$  Database and Revised CALIB3.0 $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program」『Radiocarbon, 35』 1993(平成5)年

試料 番号	遺構名	検出層位	スコリア	火山ガラス		軽石			由来する テフラ
				量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	
1	S D 205	-	-	++	cl・pm>cl・bw	++++	Cl~W・sb~b	1.5	To-a, B-Tm
2	S D 144	-	-	++	cl・pm>cl・bw	++++	Cl~W・sb~b	1.5	To-a, B-Tm
3	S K I 140	覆土2層	-	++	cl・pm>cl・bw	++++	Cl~W・sb~b	1.5	To-a, B-Tm
4	S K I 140	覆土4層	-	++	cl・pm>cl・bw	++++	Cl~W・sb~b	1.5	To-a, B-Tm

凡例 -:含まれない. +:微量. ++:少量. +++:中量. ++++:多量.

Cl:無色透明. W:白色. g:良好. sg:やや良好. sb:やや不良. b:不良. 最大粒径はmm.

cl:無色透明. br:褐色. bw:バブル型. pm:軽石型.

第14表 テフラ分析結果

を用いて<sup>14</sup>C濃度を補正し、これを用いて<sup>14</sup>C年代値を算出した。したがって、表示した<sup>14</sup>C年代値は同位体分別効果による測定誤差を補正した年代値である。

### 3. 暦年代較正について

暦年代較正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代値 (yrBP) に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動および半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を補正し、より正確な年代を求めるために<sup>14</sup>C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の<sup>14</sup>C年代の詳細な測定値を用い、さらに、珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較により、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代値を算出する。較正暦年代値の算出にRadiocarbon Calibration Program\* CALIB rev. 4.3 {Reference for datasets used : Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 : Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40 : 1041-1083} を使用した<sup>(註1)</sup>。なお、交点年代値は<sup>14</sup>C年代値に相当する較正曲線上の年代値であり、1  $\sigma$  年代幅は<sup>14</sup>C年代誤差に相当する較正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1  $\sigma$  年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代への較正は約二万年前からAD1950年までが有効であり、該当しないものについては較正暦年代値を\*\*\*\*\*またはModernと表示する。また、AD1955\*はModernを意味する。但し、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。

較正暦年代値に関しては、<sup>14</sup>C年代値の参考として記載しているものである。

註1 Stuiver, M. and Reimer, P. J. 『Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program』  
『Radiocarbon, 35』 1993 (平成5) 年

## 第3節 出土試料のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

秋田県横手市に所在する姥ヶ沢窯跡は、真昼山地から横手盆地に流れる杉沢川の谷口北側の山麓付近に位置している。姥ヶ沢窯跡の発掘調査では、数多くの土坑や溝などの遺構が検出されている。これらの遺構の覆土中には、火山灰と推定される黄褐色ブロックが混入している。そこで今回の自然科学分析調査では、火山灰と推定されるブロックを含む土層から採取された試料中に火山噴出物(テフラ)が含まれているかどうかを確認し、テフラが含まれていればその特定を行う(テフラ分析)。

本遺跡の地理的位置および遺構の推定年代を考慮すれば、含まれているテフラは白頭山・苦小牧テフラ(B-Tm:町田ほか, 1981)と十和田aテフラ(To-a:町田ほか, 1981)である可能性がある。これらのテフラに含まれる火山ガラスの特徴は類似しており、形態の観察のみでは両テフラの識別は



困難である。今回は火山ガラスの屈折率を測定することにより、両テフラの識別を行う<sup>(註1)</sup>。

これらの結果から、遺構の構築や廃棄の年代に関するデータを得ることとする。

## 1. 試料

テフラ分析および屈折率測定を行う試料は、試料番号1～4の合計4点である。試料番号1はSD 205、試料番号2はSD144よりそれぞれ採取されている。これらの溝は、土器焼成遺構と同時に存在した可能性のある溝である。どちらも、試料を採取した層位の詳細は不明である。各試料の状態は、試料番号1は試料全体が黄灰色を呈しており、径3～4cmのブロックも認められる。試料番号2は黄灰色ブロックと褐灰色の砂質土が混在しており、黄灰色ブロックは最大径5cmである。

テフラ分析には、どちらの試料も黄灰色ブロックを用いた。

試料番号3・4は、どちらもSKI140より採取されている。SKI140の東西ベルト(E-F)では、覆土は上位より1～4層に分層されている。覆土の2層と4層は黄灰色を呈する薄層であり、火山灰層と推定される。試料は、2層から試料番号3、4層から試料番号4がそれぞれ採取されている。各試料の状態は、試料番号3は径2～3mmの細粒な黄灰色ブロックが混在する褐灰色の砂質土であり、試料番号4は黄灰色ブロックと褐灰色の砂質土が混在しており、黄灰色ブロックは最大径5cmである。テフラ分析には、試料番号3は黄灰色ブロックが混在した褐灰色の砂質土を、試料番号4は黄灰色のブロックを用いた<sup>(註2)</sup>。

## 2. 分析方法

### (1) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### (2) 屈折率測定

テフラ分析用に洗い出された試料から細粒な砂分を採取し、この中に含まれる火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置“MAIOT”(古澤, 1995)を用いて、火山ガラス30片程度を目標として計測する。

## 3. 結果

### (1) テフラ分析

各試料の観察結果を第14表に示す。全ての試料に火山ガラスと軽石が含まれ、スコリアは認められない。火山ガラスは全ての試料に少量含まれ、無色透明の軽石型が最も多く、次いで無色透明のバブル型が多く認められる。

軽石は、すべての試料に多量に含まれている。これらの試料に含まれる軽石は同様の特徴を有しており、透明がかった白色を呈し、発泡がやや不良～不良であるものが認められる。

また、試料番号1および2には火山ガラスと軽石以外の砂分がほとんど含まれないが、試料番号3・4には長石や斜方輝石などの鉱物粒や石質岩片が認められる。とくに試料番号3には多く認められる。

#### (2) 屈折率測定

試料番号1に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.5004-1.5143である。そのほとんどは1.503-1.507にまとまって認められ、1.510-1.514に認められる高い屈折率はわずかである。

試料番号2に含まれる火山ガラスの屈折率は1.5012-1.5124であり、ほとんどは1.505-1.508にまとまって認められる。1.512付近にも、わずかであるが認められる。

試料番号3に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.5031-1.5118である。1.505付近と1.510付近にピークが認められる。

試料番号4に含まれる火山ガラスの屈折率は1.5015-1.5124であり、ほとんどは1.505-1.508にまとまって認められる。1.512付近にも、わずかであるが認められる。

#### 4. 考察

今回認められた軽石と、火山ガラスで屈折率が1.500-1.508の範囲にあるものは、形態と屈折率および町田ほか(1981)、町田・新井(1992)等の記載から、前述のT o - aに由来すると考えられる。T o - aは西暦915年に十和田カルデラより噴出したとされ、給源から南方の東北地方一帯に広く分布している。T o - aに含まれる火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)では1.499-1.508、町田・新井(1992)では1.496-1.504と記載されている<sup>(註1)(註3)</sup>。

1.508-1.515の範囲に認められる火山ガラスは、形態および屈折率、町田ほか(1981)、町田・新井(1992)等の記載から、前述のB-T mに由来すると考えられる。B-T mの給源は朝鮮半島北部に位置する白頭山(長白山)であり、テフラは白頭山頂上部にある径4 kmのカルデラ湖の天池より噴出したとされている(町田・新井, 1992)<sup>(註3)</sup>。噴出年代は西暦947年と考えられている(早川・小山, 1998)。B-T mの火山ガラスの屈折率は、町田ほか(1981)では1.508-1.517、町田・新井(1992)では1.511-1.522とされている。B-T mは、日本では東北地方北部から北海道にかけて分布しており、東北地方北部ではT o - aの直上に薄層として確認されることが多い。

今回分析した全ての試料には、T o - aに由来する火山碎屑物が含まれているが、試料によってB-T mの火山ガラスの含有量に違いが認められる。試料番号3と比較して、試料番号1・2・4にはわずかしかB-T mの火山ガラスが含まれないことから、試料番号1・2・4に含まれるB-T mは黄灰色ブロックに付着していた褐灰色の土に由来するものと推察され、後世の攪乱によるものであると考えられる。これらの試料に含まれる黄灰色ブロックの粒径が大きいことを考慮すれば、試料番号1・2・4の採取された層は、T o - aが降下したものがそのまま保存されたものと推定される。したがって、SD205、SD144およびSKI140は、T o - aが降下した西暦915年には既に構築されていたと考えられる。

また、試料番号3にはB-T mの火山ガラスが含まれていること、火山碎屑物に由来しない岩片なども含まれていること、黄灰色ブロックが細粒であることから、SKI140の覆土2層は遺構の周囲に一

且降下堆積したT o-aが、周囲の土壌とともに流入した二次的な堆積物である可能性がある。また、試料番号3には比較的多くのB-T mの火山ガラスが含まれていることから、2層堆積時にはB-T mも降灰していたと考えられる。以上のことから、B-T mが降灰した西暦947年にはS K I 140は放棄され、埋積が進んでいたと考えられる。

註1 町田 洋・新井房夫・森脇 広「日本海を渡ってきたテフラ」『科学51』 1981（昭和56）年

註2 古澤 明「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」 『地質学雑誌101』  
1995（平成7）年

註3 町田 洋・新井房夫『火山灰アトラス』東京大学出版会 1992（平成4）年

註4 早川由紀夫・小山真人「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—和田湖と白頭山—」  
『火山43』 1998（平成10）年

## 第6章 まとめ

本遺跡を、平安時代における丘陵斜面を利用した生産遺跡として位置づけることについては問題ないであろう。むしろ、本遺跡において特筆すべきことは、粘土採掘—土器成形—土器焼成という土器製作の一連の流れを想定しうるということであって、以下それに絡めて論を展開させたい。

今回の調査では、粘土採掘坑そのものの検出は見られなかった。しかし、第4章第1節「調査区の地形と層序」で述べたように、基盤層下1.4~1.7mにおいて土器原料と目される白色粘土を確認している。したがって、調査区周囲には粘土採掘坑が存在した可能性が高く、また、そうでなくても、本遺跡が比較的急傾斜を呈する斜面に立地することを考慮すると、当該期にあつて粘土層の露出している箇所が存在していたことを想定することは決して不自然ではない。むしろ、その可能性はきわめて高いと言うべきであろう。

また、土器焼成の前段階の工程を裏付けるものとしてロクロピットも加えることができよう。本遺跡では2基、二段構造の掘り込みを伴うピットを検出し、県内外の類例から判断してロクロピットとした。秋田県内で今まで検出されたロクロピットを第15表に掲げる<sup>(註1)</sup>。

本遺跡のロクロピットの場合は、掘方覆土底面付近より土師器坏・甕がまとまって出土しており、ともに意図的な埋納と考えられ、ここに廃絶儀礼の存在を伺うことができる。

焼成段階を示す遺構として土器焼成遺構を計5基検出した。標高の高い東側の2基と西側の3基とでは、平面形状における若干の差異はあるものの、いずれも長軸が等高線に平行となるような立地状況を呈しており、規模的にも第4章第2節でみたように斉一的である。したがって、標高の高い東側が傾斜もより急であることを考慮すると、時期差を想定するよりはむしろ地形上の差異が平面形状の差異に反映したと考えるべきで、むしろ、ある計画的な意図をもって営まれたほぼ同時代の遺構群と捉えた方がよいのではないかと思う。出土遺物においても明瞭な時期差を認めることができない。

本遺跡の出土遺物は、大略9世紀後半から10世紀に帰属する。遺構相互の重複も少なく、また、それも古い遺構の壁が新しい遺構の壁としてそのまま転用されていることを考えると、ほぼ同時代と見

遺跡名	所在	遺構名	平面形状	堀方 (cm)			ロクロ径 (cm)	ロクロ深 (cm)	出土土器	文献
				縦	横	深				
十二林遺跡	能代市	S I 95	円形	20	20	21	10	11	土師器坏	1
		S I 108	円形	23	23	21	9	19	土師器	
古開Ⅱ遺跡	飯田川町	S K P 16	円形	45	37	26	18	7	土師器坏、内黒坏	2
		S K P 17	円形	38	36	28	8	—	土師器	
姥ヶ沢竊跡	横手市	S K P 01C	隅丸方形	38	30	29	12	27	土師器坏・甕、内黒	本書
		S K P 324	楕円形	43	35	27	15	25	土師器坏・甕	
郷土館竊跡	横手市	S I 36中央	円形	29	28	(40)	—	—	土師器甕	3
		S I 36中央	円形	28	25	(36)	—	—	土師器甕	
十二牲B遺跡	横手市	S K 32	円形	40	40	2	6	12	土師器片、炭化物	4
富ヶ沢D遺跡	横手市	S I 01	—	—	—	—	—	—	—	5
田久保下遺跡	横手市	S I 319 P 5	円形	58	50	28	12	25	土師器坏他	6

第15表 県内ロクロピット集成

なしてよい。S J 139のみ出土遺物の面で、他の土器焼成遺構より新しい要素を含むとはいえ、それも大幅な年代差を指摘できるほどではない。

本遺跡は、歴史的環境のうえでは後三年合戦における「金沢柵」攻防戦の故地の一面に立地するが、同様にこの地域に立地する他の遺跡と出土遺物の面で比較すると、十二牲B遺跡<sup>(註2)</sup>よりはやや新しい要素を有し、物見窯跡<sup>(註3)</sup>よりはやや古い諸特徴を有する。上台A遺跡<sup>(註4)</sup>と比較すると、本遺跡は、ほぼ並行する時期か、もしくは若干新しい要素を付加することが可能かもしれない。いずれにしても、年代的には10世紀を下るものではない。それに対し、「金沢柵」の守り手である出羽清原氏が「山北三郡」を本拠として歴史書に登場するのは11世紀後半である<sup>(註5)</sup>。

興味深いのは、十二牲B遺跡では現在のところ東北地方において、それまで出土例のなかった突帯付須恵器壺が出土しており<sup>(註3)</sup>、上台A遺跡にあっても底部が大きく張り出す形態の甑が県内で初めて確認されているということであり、同報告書では、この形態の甑は北関東地方の9～10世紀の遺跡からの出土が多いと報告している<sup>(註4)</sup>。

本遺跡にあってもS K I 142 (S J 404) から採取した炭化物のなかにサカキと思われる試料がある。第5章第1節「出土炭化材の樹種同定」にあるように、この試料はヒサカキの可能性もないわけではないが、サカキである可能性がきわめて高い。サカキは茨城県以南および石川県以西に自生する種であり、分析者による「道具類や柄などとして他地域から持ち込まれたものの可能性が高い」との所見は注目に値する。

これらを総合すると、10世紀代のこれら「金沢柵」周辺の各遺跡の出土遺物が、ただちに「出羽清原氏」と結びつくかどうかについてはなお十全なる検討を要するとはいえ、在地ではない、東北地方以外の何らかの外部的な集団の存在について、今後はより考察されるべきであろう。

県内で土器焼成遺構を検出した遺跡を第16表に掲げる。また、各遺跡検出の土器焼成遺構について

遺跡名	所在	立地	遺跡種類	基数	遺跡内立地	時期	焼成器種	備考
山王台遺跡	大館市	丘陵	集落跡	1	丘陵裾部	10C	土師器坏	黒色処理有
山王岱遺跡	大館市	丘陵	集落跡	2	丘陵裾部	10C	土師器坏・甕	黒色処理有
サントリ台遺跡	能代市	台地	集落跡	1	平坦面	10C	土師器坏	
寒川II遺跡	能代市	台地	集落跡	2	緩斜面	10C	土師器片	
十二林遺跡	能代市	台地斜面	集落跡	14	緩斜面	10C	土師器坏・甕	須恵器窯跡10C
福田遺跡	能代市	台地斜面	集落跡	1	緩斜面	10C	土師器坏	
扇田谷地遺跡	山本郡八竜町	台地	集落跡	3	緩斜面等	9～10C	土師器坏・甕・土鍾	鉄精錬・鍛冶遺構併設
大平遺跡	秋田市	丘陵	集落跡	2	緩斜面	10C		
野形遺跡	秋田市	台地	集落跡	18	丘陵裾部	10C	土師器坏・鉢	内面黒色土師器
上台A遺跡	横手市	丘陵	集落跡	4	緩斜面			
姥ヶ沢窯跡	横手市	丘陵	生産遺跡	5	斜面	9～10C	土師器	沢向かい斜面に須恵器窯跡 黒色処理有
郷土館窯跡	横手市	丘陵	生産遺跡	8	緩斜面	10C	土師器坏	須恵器窯跡9C
郷土館D遺跡	横手市	丘陵	集落跡	12	緩斜面	10C	土師器坏	郷土館窯跡と近接
十二牲B遺跡	横手市	残丘隣接の沖積地	生産遺跡	1	平坦面	10C	土師器坏・甕	残丘斜面に須恵器窯跡
田久保下遺跡	横手市	丘陵	生産遺跡	5	緩斜面	9C	土師器・須恵器	須恵器窯跡9C
富ヶ沢A窯跡	横手市	丘陵	生産遺跡	2	緩斜面	9C	土師器甕	須恵器窯跡9C
下田遺跡	平鹿郡大森町	丘陵	集落跡	1	丘陵裾部	10C	土師器坏	
宝竜堂II遺跡	平鹿郡十文字町	沖積地	生産遺跡	(1)	平坦面	9C	土師器甕	焼き台として須恵器を利用
広沢山遺跡	湯沢市	台地	生産遺跡	(1)	緩斜面	9C?	土師器坏・甕	
岩城II窯跡	雄勝郡羽後町	台地	集落跡	1	丘陵裾部	10C	土師器	
七窪遺跡	雄勝郡羽後町	丘陵	生産遺跡	1	緩斜面	10C	土師器坏・甕	須恵器窯跡と近接

第16表 土器焼成遺構を検出した遺跡（県内）

遺跡名	遺構番号	形態	縦軸長 (cm)	横軸長 (cm)	深さ (cm)	文献	遺跡名	遺構番号	形態	縦軸長 (cm)	横軸長 (cm)	深さ (cm)	文献		
山王台遺跡	S X01	略長方	135	120	10	7	姥ヶ沢窯跡	S J 125	楕円	150	110	25	本書		
山王岱遺跡	S K08A	楕円	150	100	10	8		S J 139	隅丸方形	130	180	20			
	S K08B	略台	200	180	20			S J 143	不整楕円形	146	160	23			
	S N112	楕円	128	100	10			S J 240	隅丸方形	140	158	28			
サントリ台遺跡	5号竪穴遺構	楕円	200	180	30	9		S J 404	—	142	156	23			
寒川Ⅱ遺跡	第27号土坑	略三角	201	174	37	10	上台A遺跡	S N04	楕円	200	170	30	15		
	第31号土坑	楕円?	126	—	33			S N05	楕円	140	90	20			
十二林遺跡	S N09	略円	152	128	19	1		S N07	楕円	210	170	20			
	S N46	略円	138	(118)	15			S N08	楕円	(300)	—	—			
	S N48	楕円	80	68	8		郷土館窯跡	S U17	五角	228	208	—	3		
	S N51	楕円?	—	—	—			S U21	五角	188	160	—			
	S N66	楕円	180	122	26			S U23	五角	160	142	—			
	S N78	—	118	108	11			S U25	長方	216	194	—			
	S N79	楕円?	116	104	6			S U29	長方	240	184	—			
	S N81	楕円	128	(104)	14			S U30	五角	246	182	—			
	S N85	略円	114	100	24			S U32	略円	200	200	—			
	S N124	楕円	158	96	12			S U39	五角	158	182	—			
	S N139	略円	131	114	14			郷土館D窯跡	S U02	五角	—	—		—	16
	S N148	略円	145	126	15				S U03	五角	—	—		—	
	S N149	楕円	—	—	—		S U07		五角	224	162	—			
	S N152	楕円	145	135	25		S U08		長方	314	180	—			
福田遺跡	S K44	略円	120	120	20	1	S U10	五角	244	188	—				
扇田谷地遺跡	S N135	円形	132	132	24	11	S U11	五角	330	210	—				
	S N136	楕円形	131	108	20		S U12	五角	210	160	—				
	S N142	楕円形	154	125	28		S U14	五角	212	104	—				
大平遺跡	S K41	円形	77	76	16	12	S U15	五角	244	220	—				
	S K47	円形	106	106	22		S U17	五角	234	170	—				
野形遺跡 (1次)	1号窯跡	楕円	300	240	60	13	S U18	五角	216	164	—				
	2号窯跡	楕円	200	160	30		S U19	五角	—	—	—				
	3号窯跡	—	(140)	—	45		十二牲B遺跡	S J 18	円形	176	176	22	4		
	4号窯跡	楕円?	(140)	—	30			田久保下遺跡	S J 322	楕円	182	100		15	6
	5号窯跡	—	(130)	—	—				S J 323	楕円	225	150		40	
	6号窯跡	楕円	300	250	60				S J 325	不整	225以上	230		30	
野形遺跡 (2次)	1号窯跡	略三角	290	220	50	14	S J 327		—	160	160	24			
	2号窯跡	略方	170	140	35		S J 329	隅丸長方	220	175	20				
	3号窯跡	略方	160	150	5		富ヶ沢A窯跡	S J 04	略方	237	136	37	6		
	4号窯跡	略楕円	80	80	—			S J 14	略三角	138	112	16			
	5号窯跡	楕円	140	100	10		下田遺跡	S K87	略台	146	104	15	17		
	6号窯跡	—	140	140	—		宝竜堂I遺跡	—	—	—	—	—	18		
	7号窯跡	略方	300以上	220	55		広沢山遺跡	—	—	—	—	—	19		
	8号窯跡	—	—	180	18		岩城Ⅱ遺跡	—	楕円	(200)	(130)	(20)	20		
	9号窯跡	隅丸長方	190	110	—		七窪遺跡	S J 01	羽子板状	175	130	60	21		
	10号窯跡	隅丸長方	150	120	—										
	11号窯跡	隅丸長方	230	120	—										
	12号窯跡	略楕円	75	75	—										

第17表 県内土器焼成遺構集成

は第17表で別掲した。

本遺跡で検出した土器焼成遺構のなかには下方に張り出しを伴い、全体で柄鏡状（無花果形）を呈するものがある。横手市郷土館窯跡および大館市山王台遺跡に類例がある。防水・防湿に供したのか、あるいは通風口の役割を果たしたもののいずれかであろう。今後の出土例を待ちたい。

本遺跡出土の土師器坏類は摩滅等により不明なものを除くと、ほとんどすべてと言ってよいほど切り離しは回転糸切り技法が採用されており、ロクロ使用との因果関係が明白である。

先に述べたロクロピット2基の検出は、土器焼成遺構の検出に近接してのことであり、ここでは土器成形と焼成とが一貫しておこなわれたことを明瞭に示しているのである。

いっぽう、土器焼成遺構と須恵器窯跡との関わりについては利部修氏が「各地域の土師器生産と土師器焼成遺構・東北西部」<sup>(註6)</sup>のなかで、横手市中山丘陵窯跡群における田久保下遺跡、富ヶ沢A遺跡、郷土館窯跡・郷土館D遺跡、および能代市十二林遺跡などを例に、須恵器工人と土師器工人与人との強い結びつきを指摘している。

この論考ののち、前掲十二牲B遺跡の調査がおこなわれた。当遺跡は「後三年美入野丘阜群」のなかの十二牲山と湯森山という2つの小残丘に挟まれた沖積地に立地し、土師器生産に関わる遺構としては土器焼成遺構1基、ロクロピット1基を検出している。そして、それに隣接して十二牲山斜面に未発掘ながら須恵器窯跡の存在することが確実視されており、『秋田県遺跡地図 県南版』では「十二牲A窯跡（2基）」および「十二牲B窯跡（3基）」として遺跡登録もなされている<sup>(註7)</sup>。

本遺跡の場合も状況が似ており、同『遺跡地図』に窯跡1基確認と記されている。ここで言う「窯跡」とは須恵器窯であり、調査区とは沢を隔てた向かい側の東向き斜面に位置するとされている。十二牲地区の場合が残丘斜面に須恵器窯、残丘裾部の平坦面に土器（土師器）焼成遺構という配置関係であったのに対し、本遺跡ではともに斜面上に立地するという点が異なるとはいえ、一応は須恵器生産と土師器生産とは互いに近接しながらも混在には至らず、ある程度「棲み分け」的な空間利用が看取できるのである。

いずれにせよ、本遺跡の調査成果は利部氏の指摘の正鵠さを裏付ける傍証の一例たりうるであろう。

最後に、工房址の可能性が高い7基の堅穴状遺構について述べる。そこで、数的にも堅穴状遺構と土器焼成遺構とは遺構数が近いことから、両者の対応関係もしくはセット関係が言えそうであるが、明瞭な物的証拠は残念ながら得られていない。また、各堅穴状遺構が工程上の諸段階を示すということを主張する積極的根拠にも欠けている。

むしろ、ここではカマドの有無によって、カマドをともなうSK I 105・SK I 142とそれ以外とに大別した場合、前者が土器焼成遺構の集中するエリアのほぼ両外端に位置することに注目したい。両遺構においては甕・壺などの貯蔵器種も出土することから、居住とまでは言えなくとも飲食等生活の痕跡が伺われるのである。一方、ロクロピットの出土した地点付近では相対的にカマドを有する堅穴状遺構の分布が希薄であり、これらカマドを有しない堅穴状遺構においては、より土師器生産の諸工程に近い営み（成形や整形、調整、採掘粘土の貯蔵など）がなされていたであろうと推測できる。

堅穴状遺構の出土遺物で、いわゆるロクロ土師器以外の遺物としては、少量の須恵器甕の破片程度であるため、どのような道具を用いて、どの段階の作業がそこでなされたかは不明な点が多い。

しかしながらそのことは、本遺跡が、粘土採掘および貯蔵にはじまって成整形および調整を経て焼

成に至るまでの一連の工程が、近接した箇所で一貫してなされた例として掲げうる遺跡であることを決して妨げるものではないのである。

註1 第15表「県内ロクロピット集成」の「掘方深」にはロクロ軸の深さを含めない。詳細は凡例8を参照されたい。

註2 秋田県教育委員会『十二牲B遺跡－県営ほ場整備事業（金沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第304集 2000（平成12）年

註3 杉渕 馨「物見窯跡について」『秋田地方史論集』 1981（昭和56）年

註4 秋田県教育委員会『上台A遺跡－農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書Ⅰ－』 秋田県文化財調査報告書第301集 2000（平成12）年

註5 『陸奥話記』康平五（1062）年七月条に次の記載がある。

「而常以甘言、設出羽山北俘囚主清原真人光頼舎弟武則等、令與力官軍」

註6 利部 修「第2章各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第4節東西北部－秋田県の事例と検討－」 窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』 1997（平成9）年

註7 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』 1987（昭和62）年

（第15表・第17表関係参考文献）

- 1 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第178集 1989（平成元）年
- 2 秋田県教育委員会『日本海沿岸東北自動車道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－古開Ⅱ遺跡－』 秋田県文化財調査報告書第317集 2001（平成13）年
- 3 横手市教育委員会『郷土館窯跡第3次』 横手市埋蔵文化財調査報告書16 1999（平成11）年
- 4 秋田県教育委員会『十二牲B遺跡－県営ほ場整備事業（金沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第304集 2000（平成12）年
- 5 横手市教育委員会で1992（平成4）年に調査（報告書未刊）
- 6 秋田県教育委員会『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－富ヶ沢A・B・C窯跡・田久保下遺跡・富ヶ沢1号～4号塚－』 秋田県文化財調査報告書第220集 1992（平成4）年
- 7 大館市教育委員会『山王台遺跡発掘調査報告書』1990（平成2）年
- 8 秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－山王岱遺跡Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第221集 1992（平成4）年
- 9 秋田県教育委員会『能代・山本地区広域農道建設に伴う発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第37集 1976（昭和57）年
- 10 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第167集 1988（昭和63）年
- 11 秋田県教育委員会『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－扇田谷地遺跡Ⅰ』 秋田県文化財調査報告書第283集 1999（平成11）年



## 第6章 まとめ

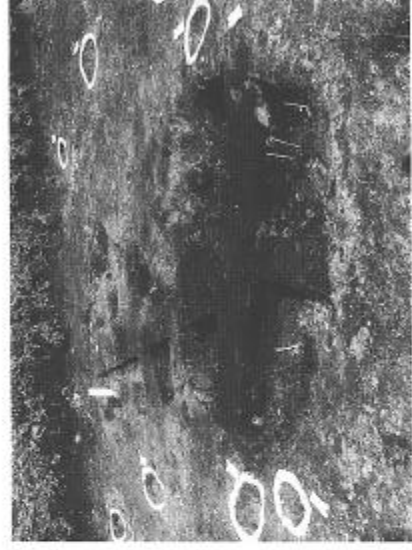
- 12 利部 修「第2章各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第8節東北西部」窯跡研究会編『古代の土師器生産と焼成遺構』  
1997（平成9）年
- 13 秋田県考古学協会『野形遺跡』 1977（昭和52）年
- 14 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1984（昭和59）年
- 15 秋田県教育委員会『上台A遺跡－農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』  
秋田県文化財調査報告書第301集 2000（平成12）年
- 16 神谷裕子「赤坂総合公園予定地内発掘調査概報－郷土館窯跡と郷土館D遺跡の土師器焼成遺構」窯跡研究会『窯跡通信  
第6号』 1996（平成8）年
- 17 秋田県教育委員会『東北自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』 秋田県文化財調査報告書  
第189集 1990（平成2）年
- 18 柴田陽一郎「横手盆地の古代遺跡」『十文字町史』 十文字町史編纂委員会 1996（平成8）年
- 19 秋田県教育委員会『広沢山遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第124集 1985（昭和60）年
- 20 秋田県教育委員会『羽後町足田遺跡発掘調査概報』 秋田県文化財調査報告書第3集 1964（昭和39）年  
なお、文献12で利部氏は、遺構の寸法について第17表で示した数値の1/2である可能性を指摘している。
- 21 秋田県教育委員会『七窪遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第215集 1991（平成3）年



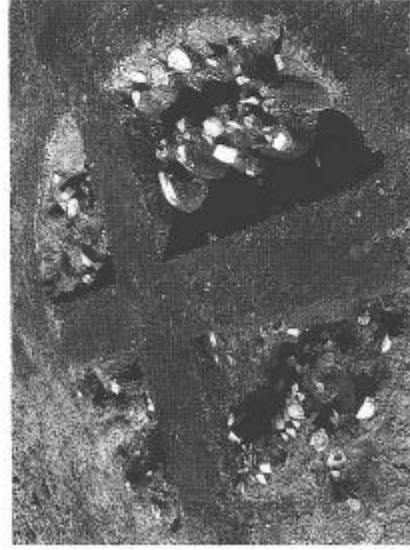
1 遺跡全景完掘状況(西から)



2 S J 125遺物出土状況(西から)



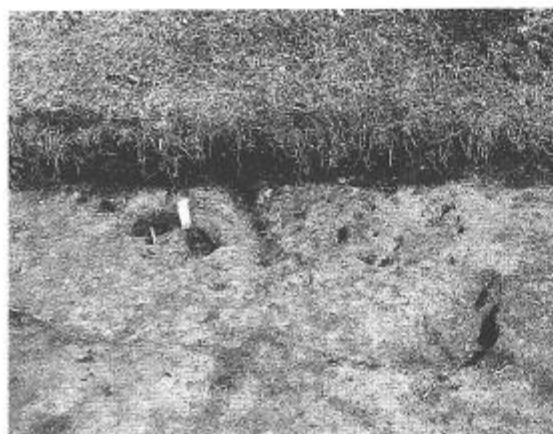
3 S J 139遺物出土状況(西から)



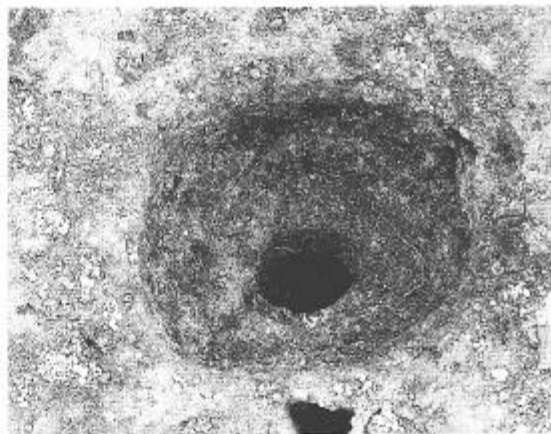
4 S J 143遺物出土状況(南から)



5 S J 240遺物出土状況(西から)



1 SK I 01完堀状況(北西から)



2 SK P 01C完堀状況(西から)



3 SK I 105完堀状況(北西から)



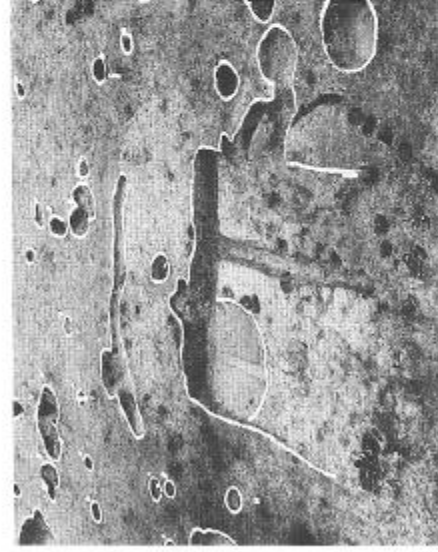
4 SK I 105カマド煙道付近(北から)



5 SK I 140とその周囲(西から)



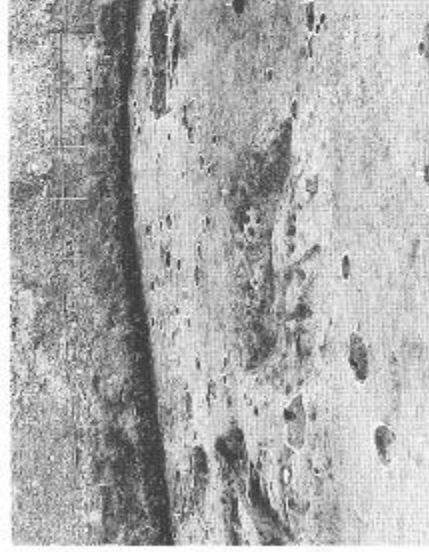
6 SQ 550B礫検出状況(西から)



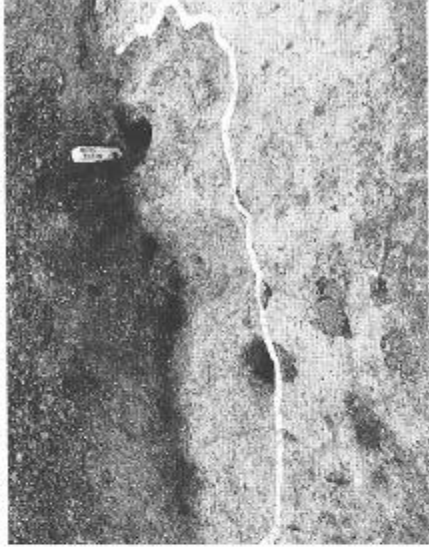
1 SK I 142完掘状況(西から)



2 SJ 404焼土範囲(西から)



3 SK I 104完掘状況(西から)



4 SK I 141完掘状況(東から)



5 SK P 324完掘状況(西から)



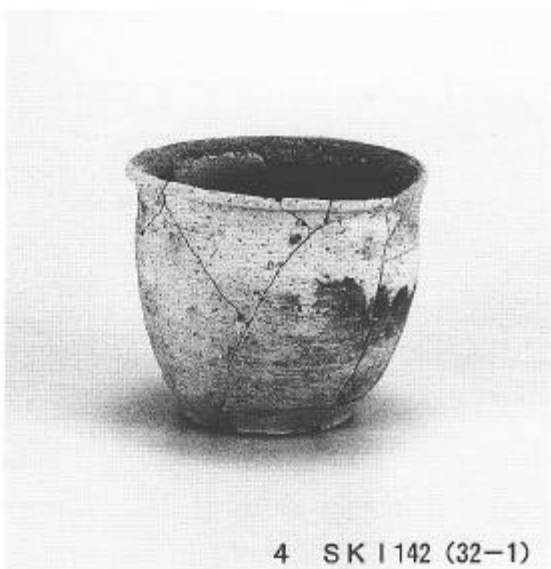
6 SK P 324遺物出土状況(西から)



1 SN405 (35-6)



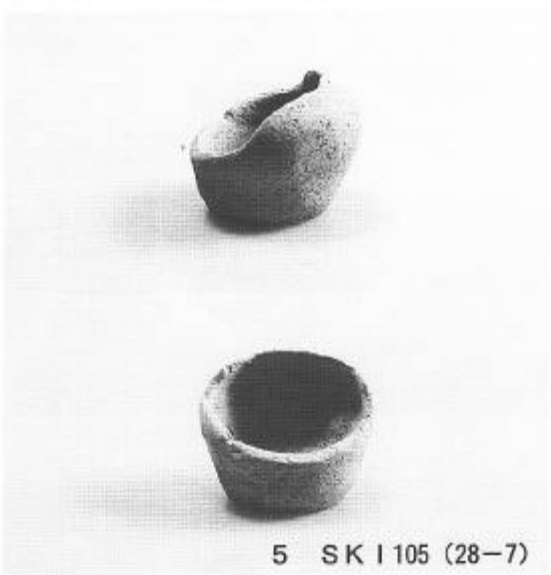
3 SK I 142 (32-2)



4 SK I 142 (32-1)

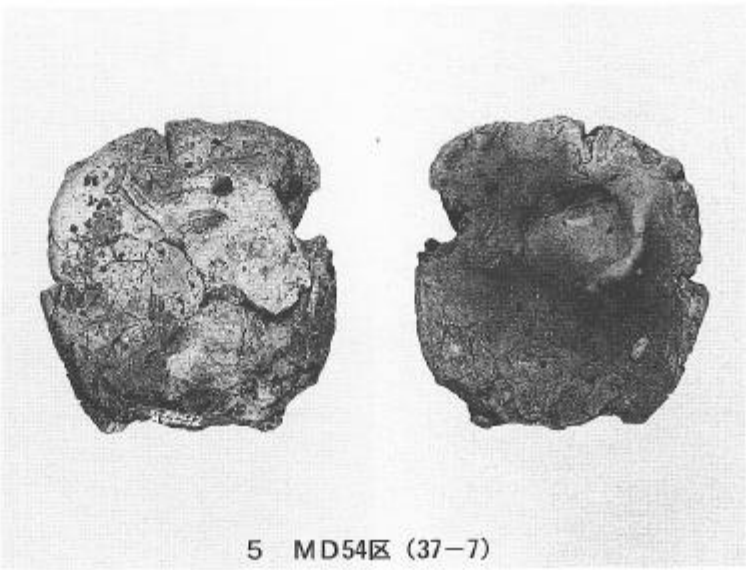
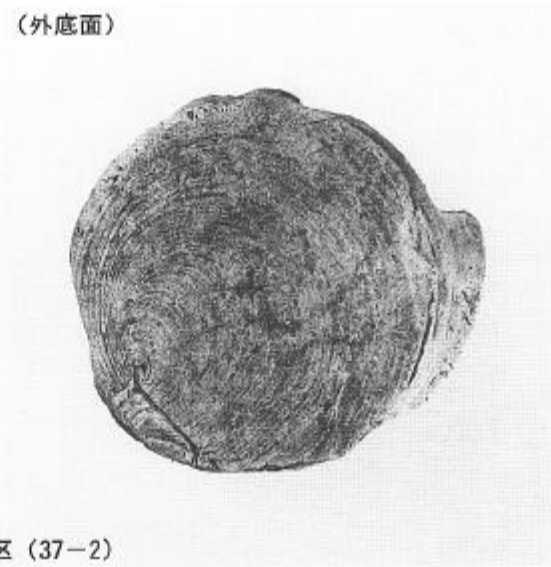
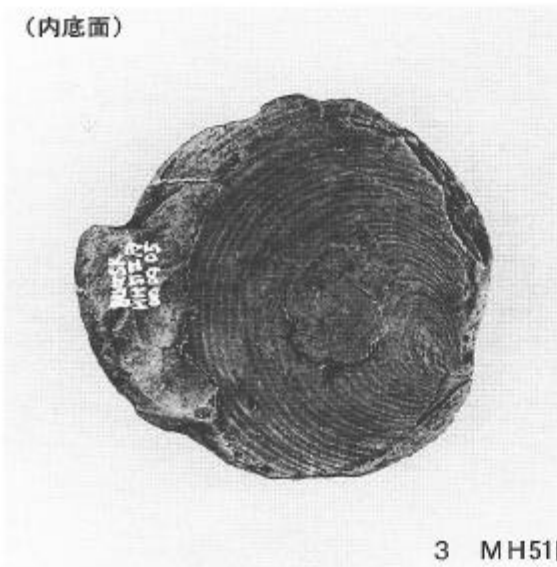


2 SK I 140 (29-1)



5 SK I 105 (28-7)





報 告 書 抄 録

ふりがな	うばがさわかまあと							
書名	姥ヶ沢窯跡							
副書名	農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第327集							
編著者名	吉川 孝							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地							
発行年月日	西暦2001年8月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
姥ヶ沢窯跡	秋田県横手市 金沢中野字 姥ヶ沢6-75外	05203	3-23	39度 21分 28秒	140度 34分 24秒	20000905 ) 20001020	1,050	農林漁業用揮 発油税財源身 替農道整備事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
姥ヶ沢窯跡	生産遺跡	平安時代  時期不明	土器焼成遺構5基 竪穴状遺構7基 土坑28基 焼土遺構4基 配石遺構2基 溝跡3条 柱穴様ピット363基 建物跡1棟 ロクロピット2基 土坑7基		ロクロ土師器、須 恵器		9世紀後半から10世 紀にかけての斜面を 利用した窯業生産遺 跡である。	

秋田県文化財調査報告書第327集  
姥ヶ沢窯跡  
—農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に係る発掘調査報告書Ⅱ—

印刷・発行 平成13年8月  
編 集 秋田県埋蔵文化財センター  
〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地  
電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会  
〒010-8580 秋田市山王3丁目1番1号  
電話 (018) 860-5193

印 刷 精巧堂印刷所